

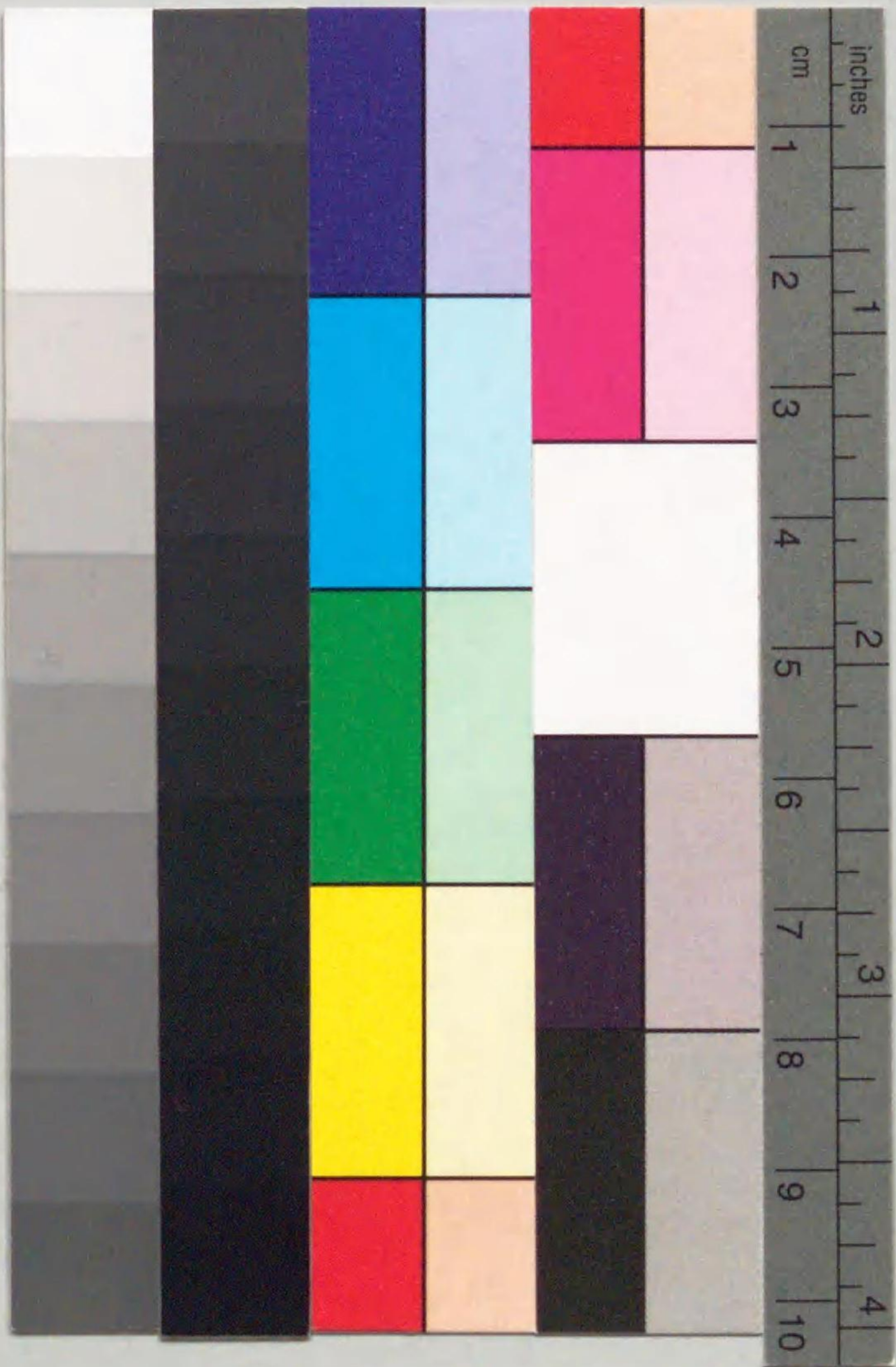
081  
Y978  
T



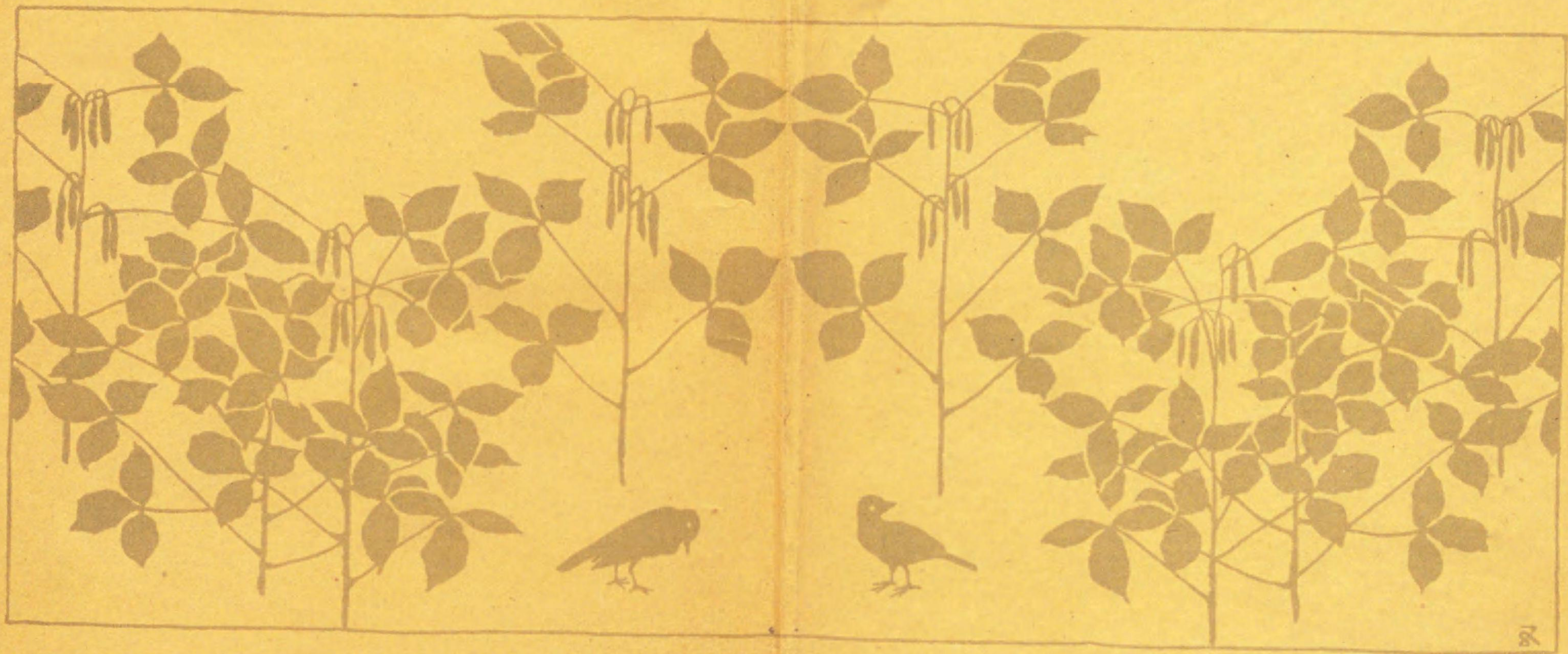
00974906



081  
Y978  
T









日蓮上人文集

全





081  
Y978  
TII  
(25)



數量更正  
59.33

974906

緒言

本書は教界の英傑日蓮上人の文中、主要なる論述拾數篇と別に消息文類數十通とを選擇して、之に校訂を施したる物也。上人の述作は其貳拾一歳の時安房の清澄に、戒體即身成佛義を試筆せしより、六拾一歳寂を武藏池上に示すに至るまで、大小實に四百五十篇に餘る。されば本書に收むる所は僅にその一部に過ぎざる如しと雖も、上人の教義を解し、其の人格を偲ばん料としては、之を以て十分なるべきを信ず。蓋し上人の教義は比較的直截なり。故に其の論述多岐に互れるもの少く、主要なる數篇は優に全般を含蓄せるかの觀あればなり。

本書大別して論文消息文の二となせるも、實は他に對する消息中に

緒言



自己の教義を論述せるものもあれば、實際は論文と見るを至當とすべきものあり。かゝる類をば、便宜論文中に連ねしもの一二あり。

上人の文集にして出版せられしものに、「高祖遺文録」「日蓮聖人御遺文」等あり。いづれも斯宗學匠の手に編せられしものとして、尊重に値する物なれども、惜むらくはその校訂通俗的ならざるを以て、一般人士の閱讀に不便尠なからず。本書はこれらの諸書に參酌して、其漢文なるは和譯し、句讀點を改め、假名遣を一定して、力めて讀み易からしめん事に苦心せり。

さてこの文の著者日蓮上人は、父を貫名左衛門重忠といふ。貞應元年二月十六日房州長狹の郡に生る。年十二にして清澄山に登り、道善師に

事へて藥王麿といふ。年十八剃髮受戒して蓮長と稱し、後自ら日蓮と改む。眞言禪律及び天台を學び、ついで叡山に登りて専ら法華經の義を講究すること十餘年、歸山の後、建長五年四月二十八日、念佛無間、禪天魔眞言亡國、律國賊の四箇言を提説し、七字の題目を高唱し、自ら一法門を立つ。上人時に三十二歳。道善等大に怒りて山を逐ふ。

文應元年七月立正安國論を作して時の執權職北條時賴に上り、忌諱に觸れて伊豆の伊東に流され、三年にして赦され、鎌倉に還る。文永八年九月、上人五十歳の時、また幕府の憎むところとなり、相州龍口に於て斬られんとせしが、時宗の宥むるによりて死一等を減じ、十月佐渡に流さる。十年二月赦され還る。五月檀越波木井實長の請によりて甲斐の身延



山に隱棲し、弘安五年十月十三日、武藏の池上宗仲寺に寂す。享壽六十一。門下多くの俊秀を出し、其の末流、關東及び京都を中心として今なほ宗敎界の一勢力をなし、近時又上人の人格を憧憬し、其の主義を渴仰する風、隆なるものあり。本書亦これが爲に多少の便をなさば、校訂者望外の幸也。

大正三年八月

校訂者 鈴木 暢 幸

日蓮上人文集 目錄

主師親御書 <small>(建長七年 三十四歲)</small>	.....	一一〇
守護國家論 <small>(正元元年 三十八歲)</small>	.....	一一六
立正安國論 <small>(文應元年 三十九歲)</small>	.....	八九—一二四
四恩鈔 <small>(弘長二年 四十二歲)</small>	.....	一五—一三三
顯謗法鈔 <small>(弘長二年 四十二歲)</small>	.....	一三—一五〇
持妙法華問答鈔 <small>(弘長三年 四十二歲)</small>	.....	一五—一六六
法華題目鈔 <small>(文永三年 四十五歲)</small>	.....	一六—一八六
開目鈔 <small>(文永九年 五十一歲)</small>	.....	一七—一七六
上.....	.....	一八七
下.....	.....	三六
祈禱鈔 <small>(文永九年 五十一歲)</small>	.....	二七—二九六

如來滅後五百 <small>(文永十年 五十二歲)</small>	.....	二九—三三〇
歲始觀心本尊抄 <small>(文永十年 五十二歲)</small>	.....	三二—三三八
如說修行鈔 <small>(文永十年 五十二歲)</small>	.....	三二—三三八
立正觀抄 <small>(法華止觀同異決 文永十一年 五十三歲)</small>	.....	三九—三五二
撰時抄 <small>(建治元年 五十四歲)</small>	.....	三五—四二〇
上.....	.....	三五三
下.....	.....	三八六
身延山御書 <small>(建治元年 五十四歲)</small>	.....	四二—四三〇
種々御振舞御書 <small>(建治二年 五十五歲)</small>	.....	四三—四五六
報恩鈔 <small>(建治二年 五十五歲)</small>	.....	四九—五二二
本尊問答抄 <small>(弘安元年 五十七歲)</small>	.....	五三—五三八
消息文類	.....	五九—六六〇
眞間釋迦佛御供養逐狀 <small>(文永七年 四十九歲)</small>	.....	五九
大豆御書 <small>(文永七年 四十九歲)</small>	.....	五三九



四條金吾女房御書(文永八年)……………五四〇

月滿御前御書(文永八年)……………五四一

四條金吾殿御書(文永八年)……………五四三

四條金吾殿御消息(文永八年)……………五四六

土籠御書(文永八年)……………五四八

佐渡御勘氣鈔(文永八年)……………五四九

佐渡御書(文永九年)……………五五〇

同生同名御書(文永九年)……………五五九

四條金吾殿御返事(文永九年)……………五六一

經王殿御返事(文永十年)……………五六四

辨殿尼御前御書(文永十年)……………五六六

彌源太殿返事(文永十一年)……………五六七

上野殿御返事(文永十一年)……………五七〇

上野殿御返事(文永十一年)……………五七一

兄弟鈔(文永十二年)……………五七四

棧敷女房御返事(建治元年)……………五九〇

千日尼御前御書(文永十二年)……………五九二

妙心尼御前御返事(文永十二年)……………五九四

御衣竝單衣御書(文永十二年)……………五九五

蒙古使御書(文永十二年)……………五九六

松野殿御返事(建治二年)……………五九九

南條殿御返事(建治三年)……………六〇九

孟蘭盆御書(建治三年)……………六一一

四條金吾殿御返事(建治三年)……………六一七

四條金吾殿御返事(建治三年)……………六二〇

兵衛志殿御書(建治三年)……………六二八

松野殿御返事(弘安元年)……………六三〇

四條金吾殿御返事(弘安元年)……………六三二

上野殿御返事(弘安二年)……………六三四

曾谷殿御返事(弘安二年)……………六三九

聖人御難事(弘安二年)……………六四八

持妙尼御返事(弘安二年)……………六五二

妙一尼御前御返事(弘安三年)……………六五四

上野殿後家御前御書(弘安三年)……………六五四

王日殿御返事(弘安三年)……………六五五

妙法尼御前御返事(弘安四年)……………六五六

四條金吾殿御返事(弘安五年)……………六五九

追加 寺泊御書(文永八年)……………六六一

日蓮上人文集索引……………六六五—六八〇



日蓮上人文集題名異稱一覽

主師親御書……………釋尊三德  
 四恩鈔……………與工藤吉隆書  
 立正觀抄……………法華止觀同異訣  
 身延山御書……………身延山記  
 種々御振舞御書……………與光日尼書  
 大豆御書……………與檀越某書  
 四條金吾女房御書……………報四條氏妻書  
 月滿御前御書……………報四條氏書  
 四條金吾殿御書……………報四條氏書  
 四條金吾殿御消息……………與四條氏書  
 土籠御書……………與日朗書

佐渡御勘氣鈔……………與清澄知友書  
 佐渡御書……………與門人等書  
 同生同名御書……………與四條氏妻書  
 經王殿御返事……………報四條氏書  
 辨殿尼御前御書……………與日昭母書  
 彌源大殿返事……………報北條彌源太書  
 上野殿御返事……………報南條氏書(上野書)  
 上野殿御返事……………與南條氏書(上野書)  
 兄弟鈔……………與兵衛志書  
 棧敷女房御返事……………報棧敷女房書  
 蒙古使御書……………與大内氏書  
 松野殿御返事……………報松野氏書  
 南條殿御返事……………報南條氏書(上野書)

孟蘭盆御書……………與治部祖母書  
 四條金吾殿御返事……………報四條氏書  
 松野殿御返事……………報松野氏書  
 (種々供養書)  
 四條金吾殿御返事……………報四條氏書  
 聖人御難事……………與門人等書  
 持妙尼御返事……………報持妙尼書(窪尼書)  
 妙一尼御前御返事……………與妙一尼書  
 王日殿御返事……………報王日書  
 妙法尼御前御返事……………報妙法尼書(明衣書)  
 四條金吾殿御返事……………報四條氏書  
 (八日講書)  
 寺泊御書……………贖命重寶鈔



親御書



釋迦佛は我等が爲には主也師也親也。一人して救ひ護ると説き給へり。阿彌陀佛は我等が爲には主ならず親ならず師ならず。然れば天台大師是を釋して曰はく、

西方佛別緣異。佛別故隱顯義不成。緣異故子父義不成。又此經首末全無。此旨。閉て  
眼穿鑿。

と。實なるかな釋迦佛は中天竺の淨飯大王の太子として、十九の御年家を出で給ひて檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峯に登りては妻木をとり深谷に下りては水を結び、難行苦行して、御年三十と申せしに佛にならせ給ひて一代聖教を説き給ふに、上には華嚴阿含、方等、般若等の種々の經經を説かせ給へども、内心には法華經を説かばやおほしめされしかども、衆生の機根まちくにして一種ならざる間、佛の御心をば説き給はで人の心に隨ひ萬の經を説き給へり。かくの如く四十二年が程は心苦しく思食ししかども、今法華經に至りて我が願既に満足しぬ、我が如くに衆生を佛になさんと説き給へり。久遠

不成一成り立たぬ

久遠より已來釋迦が遠き前世

主師親御書

081.6  
Y



に於ての生涯中  
のことをいへり  
ないがしろ一輕  
蔑すること

より已來或は鹿となり或は熊となり或時は鬼神の爲に食はれ給へり。かくの如き功德をば、法華經を信じたらん衆生は是眞佛子とて是實の我が子なり、此の功德を此の人に與へんと説き給へり。是程に思食したる親の釋迦佛をばないがしろに思ひなして、「唯以一大事」と説き給へる法華經を信ぜざらん人は、争か佛になるべきや。能々心を留めて案ずべし。二の卷に云はく、

若人不信毀謗此經則斷一切世間佛種乃至不受餘經一偈

と。文の心は、佛にならん爲には唯法華經を受持せん事を願ひて餘經の一偈一句をも受けざれと。三の卷に云はく、

如從飢國來忽遇大王膳

と。文の心は、飢たる國より來りて忽に大王の膳にあへり。心は犬野干の心を致すとも、迦葉目連等の小乗の心をば起さざれ、破れたる石は合ふとも、枯木に花はさくとも、二乗は佛になるべからずと仰せられしかば、須菩提は茫然として手の一鉢をなげ、迦葉は涕泣の聲大千界を響かすと申して歎き悲みしが、今法華經に至りて迦葉尊者は光明如來の記籙を授かりしかば、目連、須菩提、摩訶迦旃延等は是を見て、我等も定めて佛

野干一狐のこと

曠劫一計量し難  
き長き時間  
衣の裏一人々の  
佛性を有するを  
各の衣の裏に玉  
を置きながら知  
いぬに譬ふ

滅度一肉體が死  
滅すること

五天竺一印度を  
東、西、南、北、中、  
の五に別ちてい  
ふ

になるべし飢ゑたる國より來りて忽に大王の膳にあへるが如しと喜びし文也。我等衆生無始曠劫より已來妙法蓮華經の如意寶珠を片時も相離れざれども、無明の酒にたほらかされて衣の裏にかけたりとしらずして、少しきを得て足りぬと思ひぬ。南無妙法蓮華經をだに唱へ奉りたらましかば、速に佛に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわづかなる戒を以て、或は天に生れて大梵天帝釋の身と成りていみじき事と思ひ、或時は人に生れて諸の國王大臣公卿殿上人等の身と成りて是程の樂なしと思ひ、少しきを得て足りぬと思ひ悦びあへり。是を佛は夢の中の榮、幻のたのしみ也。唯法華經を持し奉り速に佛になるべしと説き給へり。又四の卷に云はく、

而此經者如來現在猶多怨嫉。況滅度後云云。

釋迦佛は師子頗王の孫、淨飯王には嫡子也。十善の位を捨て、五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすて、十九の御年出家して勤め行ひ給ひしかば、三十の御年成道し御坐して、三十二相八十種好の御形にて、御幸なる時は大梵天王帝釋左右に立ち、多聞持國等の四天王先後圍繞せり。法を説き給ふ御時は四辯八音の說法は祇園精舎に滿ち三智五眼の徳は四海に敷けり。然れば何れの人か佛を惡むべきなれども猶怨嫉するもの多し。







也。五の卷提婆品に云く、

若有善男子善女人。聞妙法華經提婆達多品。淨心信敬不生疑惑者。不墮地獄餓鬼畜生。生十方佛前。

と。此の品には二つの大事あり。一には提婆達多と申すは阿難尊者には兄、斛飯王には嫡子、師子頰王には孫、佛には從弟にて有りしが、佛は一閻浮提第一の道心者にてましまししに怨をなして、我は又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓ひて、萬の惡人を語らひて佛に怨をなして三逆罪を作して現身に大地破れて無間大城に墮ちて候ひしを、天王如來と申す記筭を授けらるゝ品にて候ふ。然れば善男子と申すは男此の經を信じまゐらせて聽聞するならば、提婆達多程の惡人だにも佛になる。まして末代の人たはたとひ重罪なりとも、多分は十惡をすぎず。まして深く持ち奉る人佛にならざるべきや。二には袈謁羅龍王のむすめ龍女と申すは、八歳の小蛇、佛に成りたる品にて候ふ。此の事めづらしく貴き事にて候ふ。其の故は華嚴經には、  
女人地獄使。能斷佛種子。外面似菩薩。內心如夜叉。  
と。文の心は女人は地獄の使、よく佛の種をたつ、外面は菩薩に似たれども内心は夜叉の

佛種子一佛にな  
る種  
夜叉一天の下に  
住し、恐ろしき

心を有すその内  
には天に服して  
之に奉仕するも  
あり

如しと云へり。又云はく一度女人を見る者はよく眼の功德を失ふ。設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからずと云ひて、又ある經には、

所有三千界男子諸煩惱合集爲一人女人之業障。

三千大千世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取集めて女人一人の罪とすと云へり。或經には三世の諸佛の眼を脱けて大地に墮つとも女人は佛に成るべからずと説き給へり。此の品の意は人畜をいはゞ畜生たる龍女だにも佛に成れり。まして我等は形のごとく人間の果報也、彼が果報にはまされり、争か佛にならざるべきやと思食すべきなり。中にも三惡道におちずと説かれて候ふ。其の地獄と申すは八寒八熱乃至八大地獄の中に、初め淺き等活地獄を尋ねれば此の一閻浮提の下一千由旬也。其の中の罪人は互に常に害心をいだけり。もしたまゝ相見れば獵師が鹿にあへるが如し。各々鐵の爪を以て互につかみさく。血肉皆盡きて唯残りて骨のみあり。或は獄卒棒を以て頭より跣に至るまで皆打ちくだく。身も破れ碎けて猶沙の如し。焦熱など申すは譬へんかたなき苦也。鐵城四方に回りに門を閉ぢたれば、力士も開きがたく、猛火高くのほつて金翅の翼もかけるべからず。餓鬼道と申すは其の住處に二あり。一には地の下五百由旬の閻魔王宮にあり。二

跣一足の裏  
焦熱一八熱地獄  
の一つ  
金翅一金翅鳥と  
て鳥中の最大な  
るものとす



には人天の中にも交れり。其の相種々也。或は腹は大海の如く、咽は鍼の如くなれば、明けても暮れても食すとも飽くべからず。まして五百生七百生など飲食の名をだにも聞かず。或は己が頭をくだきて腦を食するもあり。或は一夜に五人の子を生みて夜の内に食するもあり。萬菓林に結び、取らんとすれば悉く劍の林となり、萬水大海に流れ入りぬ。飲まんとすれば猛火となる。如何にしてか此の苦を脱るべき。次に畜生道と申すは其の住所に二あり。根本は大海に住す。枝末は人天に雜れり。短き物は長き物にのまれ、小き物は大なる物に食はれ、互に相食んでしばらくも休む事なし。或は鳥獸と生れ、或は牛馬と成りても重き物をおほせられ、西へ行かんと思へば東へやられ、東へ行かんとすれば西へやられる。山野に多くある水と艸をのみ思ひて、餘は知るところなし。然るに善男子善女人此の法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、此の三罪を脱るべしと説き給へり。何事か是にしかん、頼もしきかなたのもしきかな。又五の卷に云はく、

我闍二大乘教二度脱苦衆生二。

と。心はわれ大乘の教をひらいてと申すは法華經を申す。苦の衆生とは何ぞや。地獄の衆生にもあらず餓鬼道の衆生にもあらず只女人を指して苦の衆生と名づけたり。五障三

從と申して三つしたがふ事有りて五つの障あり。龍女我女人をつみしれり。然れば餘をば知るべからず女人を導かんと誓へり。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。



### 守護國家論

十方微塵一十方  
 の世界に無數に  
 あるの意  
 三惡一地獄、餓  
 鬼、畜生  
 爪上一爪の上は  
 どの僅少なる比  
 喩  
 證果一さとり  
 の  
 果を得たる  
 佛曰一釋尊をさ  
 す  
 四依一たよるべ  
 き四つの法、法  
 に依り人に依ら  
 ず、了義經によ  
 り了義經に依  
 らず、義に依り  
 語に依らず、智  
 に依り識に依ら  
 ず

夫以るに、偶十方微塵三惡の身を脱れて、希に、閻浮日本爪上の生を受くるも、亦閻浮日本爪上の生を捨てて、十方微塵三惡の身を受けんこと疑無きなり。然るに生を捨てて、惡趣に墮つる緣一にあらず。或は、妻子、眷屬の哀憐に依り、或は、殺生、惡逆の重業に依り、或は、國王と成りて、民衆の難を知らざるに依り、或は、法の邪正を知らざるに依り、或は、惡師を信するに依る。此の中に於きては、世間の善惡は、眼前に在れば、愚人も之を辨ふべし、佛法の邪正、師の善惡に於きては、證果の聖人すら、尙ほ、これを知らざるなり。況や、末代の凡夫に於いてをや。加之ならず、佛日西山に隠れ、餘光東域を照してより已來、四依の慧燈は、日に滅し、三藏の法流は月に濁る。實經に迷へる論師は、眞理の月に雲を副へ、權經に執する譯者は、實經の珠を碎きて、權經の石となす。何に況や、震旦の人師の宗義それ誤無からんや。何に況や、日本邊土の末學誤り多く、實少き者をや。随つて、其の教を學ぶ人數は、龍鱗よりも多けれど、



惡燈一智慧を燈  
火に譬ふ  
三藏一經と律と  
論との一切佛法  
日本邊土一日本  
といふ田舎  
上人一淨土宗の  
法然上人をさす  
一代を二門一釋  
尊の全説教を自  
力門と他力門と  
に分つ  
四聖云々一聲聞  
緣覺、菩薩、佛  
にたる心を斷つ  
こと  
帝釋一天人の中  
にての頭

信謗一之を信ず  
ると謗ると

得道の者は、鱗角より希なり。或は、權教に依るが故に、或は、時機不相應の教に依るが故に、或は位の高下を知らざるが故に、凡夫の習、佛法に就きて、生死の業を増すこと、その縁一に非らず。中昔、邪知の上人有りて、末代の愚人の爲に、一切の宗教を破りて、選擇集一卷を造る。名を、鸞、綽、導の三師に假りて、一代を二門に分ち、實經を録して權經に入れ、法華、眞言の直道を閉ぢて、淨土三部の隘路を開く。亦、淨土三部の義にも順ぜずして、權實の謗法を成し、永く四聖の種を斷じて、阿鼻の底に沈む可き僻見なり。而るに、世人これに順ふこと、譬へば大風の小樹の枝を吹くが如く、門弟子の書を重んずること、天衆の帝釋を敬ふに似たり。此の惡義を破らんが爲に、亦、多くの書あり、所謂、淨土決義鈔、彈選擇、摧邪輪等なり。此の書を造るの人皆碩德の名、一天に彌ると雖も、恐らくは、未だ、選擇集謗法の根源を顯さず。故に、還つて、惡法の流布を増す。譬へば、盛なる旱魃の時に、小雨を降せば、草木彌枯れ、兵者を打つ刻に、弱き兵を先にすれば、強敵倍力を得るが如し。予此の事を歎く間、一卷の書を造りて、選擇集の謗法の緣起を顯し、名づけて、守護國家論と號す。願はくは、一切の道俗、一時の世事を止めて、永劫の善苗を種るよ。今經論を以て、邪正を直す。信謗

は、佛説に任せ、敢へて、自義を存すること無し。分ちて、七門と爲す。一には、如來の經教に於いて、權實二教を定むることを明かにし、二には、正像末の興廢を明かにし、三には、選擇集の謗法の緣起を明かにし、四には、謗法の者を對治すべき證文を出すことを明かにし、五には、善知識、竝に、眞實の法に値ひ難きを明かにし、六には、法華、涅槃に依る行者の用心を明かにし、七には、問に隨ひて答を明かにす。大文の第一に、如來の經教に於いて、權實二教を定むることを明さば、此に於て四あり、一には、大部の經の次第を出して、流類を攝することを明かにし、二には、諸經の淺深を明かにし、三には、大小乘を定むることを明かにし、四には、且く權を捨てて、實に就く可きことを明かにす。第一に大部の經の次第を出して、流類を攝することを明さば問うて云はく、佛最初に何なる經を説き玉ふや。答へて曰はく、華嚴經なりと。問うて云はく、其の證如何と。答へて云はく、六十華嚴經の離世間淨眼品に云はく、如是我聞。一時佛在摩竭提國寂滅道場。始成正覺。法華經の序品に、放光瑞の時、彌勒菩薩、十方世界の諸佛の五時の次第を見る時、文殊



師利菩薩に問うていはく、

又觀諸佛聖主師子演說經典微妙第一其聲清淨出柔輭音教諸菩薩無數億萬亦方便品に、佛自ら初成道の時を説いて云はく、

我始坐道場觀樹亦經行乃至爾時諸梵王及諸天帝釋護世四天王及大自在天並餘諸天衆眷屬百千萬恭敬合掌禮請我轉法輪

此等の説は、法華經に華嚴經の時を指す文なり。故に華嚴經の第一に云はく、

毗沙門天王 略月天子 略日天子 略釋提桓因 略大梵 略摩醯首羅等 涅槃經に、華嚴經の時を説きて云はく、

既成道已梵天勸請唯願如來當爲衆生廣開甘露門乃至梵王復言世尊一切衆生凡有三種所謂利根中根鈍根利根能受唯願爲説佛言梵王諦聽諦聽我今當爲一切衆生開甘露門

亦三十三に、華嚴經の時を説きて云はく、

如十二部經修多羅中微細之義我先已爲諸菩薩説

かくの如き等の文は皆、諸佛世に出て玉ひて、一切經の初には、必ず、華嚴經を説き玉

時一説かれたる

ひし證文なり。

問うて云はく、無量義經に云はく、

初説四諦乃至次説方等十二部經摩訶般若華嚴海空

この文の如くんば、般若經の後に、華嚴經を説けり。相違如何と。

答へて云はく、淺深の次第なるか、或は、後方の華嚴經なるか。法華經の方便品に一代

の次第淺深を列ねて云はく、

無有餘乘 華嚴經也 若二般若經也 若三方等經也

此の意なり。

問うて云はく、華嚴經の次には、いづれの經を説き給ふや。

答へて曰はく、阿含經を説き給ふなり。

問うて云はく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、法華經の序品に、華嚴經の次の經を説きていはく、

若人遭苦厭老病死爲説涅槃

方便品にいはく、

阿含經—小乘經の總稱に用ひたり



即趣波羅奈乃至爲五比丘說

涅槃經に華嚴經の次の經を定めていはく、

於波羅奈國轉正法輪宣說中道

これ等の經文は、華嚴經より後に、阿含經を説くなり。

問うていはく、阿含經の後にいづれの經を説き給ふや。

答へて曰はく、方等經なり。

問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、無量義經にいはく、

初説四諦乃至次説方等十二部經

涅槃經にいはく、

從修多羅出方等

問うて曰はく、方等とは、天竺の語、此には大乘と云ふなり。華嚴般若涅槃等皆大

乘方等なり。なんぞ、獨方等部に限りて、方等の名を立つるや。

答へて云はく、實は、華嚴般若法華皆方等なり。しかりと雖ども、今、方等部に於

きて、別して、方等の名を立つるは、私の義にあらず。無量義經、涅槃經の文顯然たり。

阿含の證果は、一向一乘なり。次に大乘を説く。方等より已後皆大乘と云ふと雖も、大

乘の始なるが故に、初に従りて、方等部を方等といふなり。例へば、十八界の十半は、

色なりと雖も、初に従へて色境の名を立つるが如し。

問うていはく、方等部の諸經の後に、いづれの經を説き給ふや。

答へていはく、般若經なり。

問うて曰はく、何を以て、これを知るや。

答へて曰はく、涅槃經に曰はく、

從方等出般若

問うていはく、般若經の後に、いづれの經を説き給ふや。

答へて曰はく、無量義經なり。

問うていはく、何を以てこれを知るや。

答へていはく、仁王經にいはく、二十九季中と、無量義經に云はく、四十餘季と。

問うていはく、無量義經には、般若經の後に、華嚴經を列ね、涅槃經には、般若經の後



に涅槃經を列ぬ。今の所立の次第は、般若經の後に、無量義經を列ぬる相違如何。  
 答へていはく、涅槃經第十四の文を見るに、涅槃經已前の諸經を列ねて、涅槃經に對して、勝劣を論じて、法華經を擧げず。第九の卷に於きて、法華經は、涅槃經より已前なりとこれを定め給ふ。法華經の序品を見るに、無量義經は、法華經の序文なり。無量義經には、般若の次に、華嚴經を列ぬれども、華嚴經を初時に遣ることは、般若經の後は、無量義經なればなり。

問うていはく、無量義經の後に、いづれの經を説き玉ふや。  
 答へて曰はく、法華經を説き玉ふなり。問ふていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、法華經の序品にいはく、  
 爲諸菩薩説大乘經名無量義教菩薩法佛所護念佛説此經已結跏趺坐入於無量義處三昧。

問うていはく、法華經の後に、いづれの經を説き給ふや。  
 答へて曰はく、普賢經を説き玉ふ。問うていはく、何を以て、これを知るや。  
 答へていはく、普賢經にいはく、

卻後三月我當般涅槃。乃至如來昔於耆闍崛山及餘住處已廣分別一實之道。今於此處。

問うていはく、普賢經の後に、いづれの經を説き給ふや。  
 答へていはく、涅槃經を説き給ひしなり。  
 問うていはく、何を以て、これを知るや。  
 答へていはく、普賢經にいはく、

卻後三月我當般涅槃。

涅槃經三十にいはく、  
 如來何故二月涅槃。亦云如來初生出家成道轉妙法輪皆以八日。何佛涅槃獨十五日。大部の經、大概かくの如し。これより已外諸の大小乘經は、次第不定なり。或は、阿含經より已後に、華嚴經を説き、法華經より已後に方等、般若を説く。皆、義類を以て、これを收めて、一處に置可し。第二に、諸經の淺深を明さば、無量義經にいはく、  
 初説四諦。阿次説方等十二部經摩訶般若華嚴海空。宣説菩薩歷劫修行。  
 亦いはく、四十餘年未顯眞實。又いはく、無量義經尊無過上。かくの如き等の文は、四



報身の壽一報身  
佛の壽命無量な  
るをいふ

二乗作佛一聲  
聞、緣覺の二小

十餘季の諸經は、無量義經に劣ること疑なき者なり。  
問うていはく、密嚴經にいはく、一切經中勝。大雲經にいはく、諸經轉輪聖王。金光明經に  
いはく、諸經中王。これ等の文を見るに、諸大乘經の常の習なり。何ぞ、一文を瞻て、無  
量義經は、四十餘季の諸經に勝るといふや。

答へていはく、教主釋尊、もし諸經に於て、互に、勝劣を説かば、大小乗の差別、權實  
の不同あるべからず。もし、實に、差別無きに、互に、差別、淺深を説かば、諍論の  
根源、惡業起罪の因縁也。爾前の諸經は、第一に、緣に従ひて不定なり。或は、小乗の  
諸經に對して第一と、或は、報身の壽と説きて、諸經の第一と、或は、俗諦、眞諦、中  
諦等と説きて、第一なりと、一切の第一にあらず。今の無量義經の如きは、四十餘季の  
諸經に對して第一なり。

問うていはく、法華經と、無量義經と、いづれが勝れたるか。

答へていはく、法華經勝れたり。

問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、無量義經には、いまだ、二乗作佛と、久遠實成とを、明かにせず、故に、

乘之を信ずれば  
つひに佛になる  
こと

久遠實成—今の  
釋尊は實は久し  
き以前に佛と成  
り居られしもの  
との説

常説—涅槃經を  
さす

舌相云々—眞實  
たることを證明  
するをいふ

法華經に嫌はれて、今説の中に入るなり。

問うていはく、法華經と、涅槃經と、いづれが勝れたるか。

答へていはく、法華經勝るとなり。

問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、涅槃經に、自ら、「如法華中等」と説きて、「更無所作」と云ふ。法華經

に、常説を指して、難信、難解といはざるが故なり。

問うていはく、涅槃經の文を見るに、涅槃經已前は皆、邪見といふ。如何、

答へていはく、法華經は、如來出世の本懷なるが故に、

「今者已満足今正是其時。然善男我實成佛已來」

等と説く。但し、諸經の勝劣に於いては、佛自ら、我が説く所の經典は無量千萬億なり  
と擧げ了つて、已説、今説、常説等と説く時、多寶佛地より誦現して、皆これ眞實と定  
め、分身の諸佛は、舌相を、梵天に付し玉ふ。かくの如く、諸經と、法華經との勝劣を  
定めぬ。このほか釋迦如來、一佛の所説なれば、先後の諸經に對して、法華經の勝劣を  
論すべきにあらず。故に、涅槃經に諸經を嫌ふ中に、法華經を入れず。法華經は、諸經



に勝る由、これを顯す故なり。但し、邪見の文に至りては、法華經を覺知せざる一類の人、涅槃經を聞きて、悟を得る故に、迦葉童子の自身、竝に、所引を指して、涅槃經已前を、邪見等といふなり。經の勝劣を論ずるにあらず。第三に、大小乘を定むることを明さば、

問うていはく、大小乗の差別如何。

答へていはく、常途の説の如きは、阿含部の諸經は小乘なり。華嚴、方等般若、法華、涅槃等は大乘なり。或は、六界を明すは、小乘なり。十界を明すは、大乘なり。

問うていはく、諸宗に互りて、わが據るところの經を、實大乘といひ、餘宗所據の經を、權大乘といふこと、常の習なり。末學に於いて、是非定め難し。いまだ聞知せず。法華經に對して、諸大乘經を、小乗と稱する證文如何。

答へていはく、宗々の立義、互に是非を論ず。就中、末法に於いて、世間、出世につきて、非を先とし、是を後とす。自らは非を知らず。愚者の歎ず可き所なり。但し且く、われ等が智を以て、四十餘季の現文を見るに、この文を破る文無ければ、人の是非を信用すべからず。その上、法華經に對して、諸大乘經を、小乗と稱することは、自答

常途一普通、一般などいふに同じ

出世一出世間、宗教界のこと

自答を存ず、自分だけの考にて答をなすこと

を存すべきにあらず。法華經の方便品にいはく、

佛自住<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>、乃至自證<sub>二</sub>無上道<sub>一</sub>。大乘平等法<sub>二</sub>若以小乘<sub>一</sub>化<sub>二</sub>乃至於一人<sub>一</sub>。我則墮<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>、貪<sub>二</sub>此事爲不可<sub>一</sub>。

この文の意は、法華經より外の諸經を皆、小乗と説けるなり。亦壽量品にいはく、「樂<sub>二</sub>於小法<sub>一</sub>」これ等の文は、法華經より外の四十餘季の諸經を、みな、小乗と説けるなり。天台妙樂の釋に於て、四十餘季の諸經を、小乗と釋すれども、佗師これを許すべからず。故に、但、經文を出すなり。第四に、且く、權經を閣いて、實經に就くことを明さば、

問うていはく、證文如何。

答へていはく、十の證文あり。法華經にいはく、

但樂受<sub>二</sub>持<sub>一</sub>大乘經典<sub>二</sub>乃至不受<sub>一</sub>餘經<sub>一</sub>。一偈<sub>一</sub>。涅槃經にいはく、

依<sub>二</sub>了義經<sub>一</sub>不依<sub>二</sub>不了義經<sub>一</sub>。四十餘季を云ふ不<sub>二</sub>了義經<sub>一</sub>是<sub>二</sub>二<sub>一</sub>。法華經にいはく、



此經難持。若暫持者。我即歡喜。諸佛亦然。如是之人。諸佛所歎。是則勇猛。是則精進。是名持戒行頭陀者。於末代無四十餘季の持戒。唯持法華經爲持戒。是三。

涅槃經にいはいはく、

於乘緩者。乃名爲緩。於戒緩者。不名爲緩。菩薩摩訶薩於此大乘。心不憚慢。是名奉戒。爲護正法。以大乘水。而自澡浴。是故菩薩雖現破戒。不名爲緩。是文流通法華經。也是四。

法華經第四にいはいはく、

妙法華經乃至皆是眞實。

此文の者多寶の證明也。是五。

法華經第八普賢菩薩の誓にいはいはく、

於如來滅後。閻浮提內廣令流布。使不斷絕。

六。是。

法華經第七にいはいはく、

我滅度後。後五百歲中。於閻浮提。無令斷絕。

釋迦如來の誓。是七。

法華經第四にいはいはく、

令法久住。故來至此。

八。是。

流通一結論

法華經第七に、法華經を行する者の住處を説いてはいはく、

於如來滅後。應當一心受持讀誦解說書寫如說修行。所在國土乃至若經卷所住之處。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧坊。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。是中皆應起塔供養。所以者何。當知是處即是道場。諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。九。是。

法華經の流通たる涅槃經にいはいはく、

我涅槃後正法未滅。餘八十年爾時。是經於閻浮提。當廣流布。是時當有諸惡比丘。抄掠是經。分作多分。能滅正法。色香味美。是諸惡人。雖復讀誦。是經典。滅除如來深密要義。安置世間莊嚴文飾無義之語。抄前著後抄。後著前前後著。中著前後。當知如是諸惡比丘。是魔伴侶。乃至譬如牧牛女多加水乳。諸惡比丘亦復如是。雜以世語。錯定是經。令多衆生不得正說正寫。正取尊重讚歎供養恭敬。是惡比丘。爲利養。故不能廣宣流布。是經。所可分流。少不足言。如彼牧牛貧窮女人。展轉賣乳。乃至成糜。而無乳味。是大乘經典。大涅槃經亦復如是。展轉薄淡。無有氣味。雖無氣味。猶勝餘經。是一千倍。如彼乳味。於諸苦味。爲千倍勝。何以故。是大乘經典。大涅槃經。於聲聞經。最爲上首。十。是。



上義一實義を盡したるをいふ

歴劫修業一無限の長時を修業して後に進むこと

五性各別一人には根本よりさとり五種の階段に至るべき性定まり居るとの説

問うていはく、不了義經を捨てて、了義經に就くとは、大圓覺修多羅了義經大佛頂如來密因修證了義經、かくの如き諸乘經は、みな了義經なり。依用すべきか。答へていはく、了義、不了義は所對に隨つて不同なり。二乘菩薩等の所說の不了義經に對して、一代の佛說は、みな了義なり。佛說に就きて、また、小乘經は不了義、大乘經は了義なり。大乘に就きて、また、四十餘季の諸經は不了義經にして、法華、般若、大日經等は了義經なり。而るに、圓覺、大佛頂等の諸經は、小乘、及び歴劫修業の不了義經に對すれば、了義經なり。法華經の如きは、了義にあらざるなり。問うていはく、華嚴、法相、三論等、天台、眞言より以外の諸宗の高祖、各、その依憑の經々に依りて、その經々の深義を極めんと欲へり。これ爾るべきや。如何。答へていはく、華嚴宗の如きは、華嚴經によりて、諸經を判じて華嚴經の方便となす。法相宗の如きは、阿含、般若等を卑しとして、華嚴、法華、涅槃を以て、深密經に同じ。同じく、中道教を立つると雖も、亦、法華、涅槃は、一類の一乘と説くが故に不了義經なり。深密經には、五性各別を存するが故に、了義經と立つるなり。三論宗の如きは、二藏を立てて、一代を攝し、大乘に於いて深淺を論せず、而も、般若經を以て依憑となす。これ等の

二藏一聲聞藏(小乘教)菩薩藏(大乘教)

舊譯新譯一華嚴經の翻譯に舊と新とにより數種あり  
佛乘一最上の佛となるべき教

頓教一直に佛果に至らしむる教  
漸教一長き修業を経て漸く佛果に進む教  
意樂一考といふほどの語  
已一法華以前をさす  
今一法華をさす  
當一涅槃をさす

諸宗の高祖多分は、四依の菩薩なるか、定めて所存あらん。是非に及ばず。然りと雖も、自身の疑を晴さんがために、且く人師の異解を聞いて、諸宗の依憑の經々を開き見るに、華嚴經は、舊譯五十六、新譯八十四なり。その中に、法華、涅槃の如き、一代聖教を集めて方便と爲すの文無し。四乘を説くと雖も、その中の佛乘に於いて、十界互具久遠實成を説かず。但し、人師に至りて、五教を立て、先の四教に諸經を收めて華嚴の方便となす。法相宗の如きは、三時教を立つるの時、法華等を以て、深密經に同すと雖も、深密の五卷を開き見るに、全く、法華等を以て、中道の内に入れず。三論宗の如きは、二藏を立つる時、菩薩藏に於て、華嚴、法華等を收め、般若經に同すと雖も、新譯の般若經を開き見るに、大般若を以て、法華涅槃に同するの文なし。華嚴は頓教、法華は漸教等とは、人師の意樂にして、佛說にあらざるなり。法華經の如きは、序分無量義經に隨に四十餘季の季限を擧げ、華嚴、方等、般若等の大部の諸經の題名を呼びて、末顯眞實と定め正宗の法華經に至りて、一代の勝劣を定むる時、わが所說の經典無量千萬億、已に説き、今説き、當に説かんとするの金言を吐きて、而もその中に於いて、この法華經は最も、これ難信、難解なりと説き給ふ時、多寶如來地より湧出して、妙法華經皆これ眞實と證誠



過去云々釋迦  
佛以前に古く七  
佛相つぎて世に  
出て給へりとい  
り  
未結集一いまだ  
編輯せぬ

雙林最後一娑羅  
雙樹林にて釋尊  
の入滅せらるる  
時に涅槃經を説  
かる

三昧發得一さと  
りを得たること

し、分身の諸佛十方より盡く一處に集りて、古を梵天に付け玉ふ。今この義を以て、余  
推察を加ふるに、唐土、日本に渡れる所の、五千七百餘卷の諸經以外の、天竺、龍宮、四  
王天、過去の七佛等の諸經、並に、阿難の未結集の經、十方世界の塵に同する諸經の、  
勝劣、淺深、難易、掌中にあり。無量千萬億の中に、あに、釋迦如來の所説の諸經に漏  
るべきや。已説、今説、當説の季限に入らざる諸經これあるべきや、願はくは、末代の  
諸人且く、諸宗高祖の弱文無義を閑いて、釋迦、多寶、十方諸佛の強文有義を信すべし。  
何に、況や、諸宗の末學偏執を先と爲し、末代の愚者、人師を本と爲して、經論を抛つ  
る者に依憑すべきや。故に、法華の流通たる、雙林最後の涅槃經に、佛、迦葉童子菩薩に  
遺言して云はく、

依法不依人、依義不依語、依智不依識、依了義經不依不了義經云云。

予世間を見聞するに、自宗の人師を以て、三昧發得、智慧第一と稱すれども、無徳の凡  
夫をして、實經に依りて法門を信ぜしめず、不了義の觀經等を以て、時機相應の教と  
稱し、了義の法華、涅槃を閑いて、譏りて、理深解微の失を付く。如來の遺言に背きて、  
依人不依法、依語不依義、依識不依智、依不了義經不依了義經と談するにあらすや。如

梵漢未達一梵語  
と漢語とに通達  
せざること  
宿習一昔より習  
の性となり居る  
こと  
會通一論斷

流轉一まよひの  
まよひに身をまか  
すこと

法爾一自然  
無漏一さと

來の入滅は、すでに二千二百餘の星霜を送れり。文殊、迦葉、阿難、經を結集せし已後  
四依の菩薩重ねて、世に出で、論を造り、經の意を申べ、末の論師に至りて漸く誤出  
來す。亦譯者においても、梵漢未達の者、權教宿習の人、實の經論を曲けて、權の經論  
の義を存せり。これに就きて唐土の人師、過出の權教の宿習の故に、權の經論心に叶ふ  
間、實の經論を用ひず。小しく自義に違ふ文あれば、理を曲けて、會通を構へ、以て  
自身の義に叶はしむ。設ひ後に、道理と念ふと雖も、或は名利に依り、或は檀那の歸依  
に依りて、權宗を捨てて實經に入らず。世間の道俗亦無智の故に、理非を辨へず、但し  
人に依りて法に依らず。設ひ惡法たりと雖も、多人の邪義に隨つて、一人の實説に依ら  
ず。而るに衆生の機多くは流轉に隨ひ、設ひ、出離を求むとも、亦多分は、權經に依る。  
但恨むらくは、惡業の身、善に付け、惡に付け、生死を離れ難きのみ。然りと雖も、今  
の世の一切の凡夫、設ひ今生を損すと雖も、上に出す所の涅槃經第九の文に依りて、且  
く法華、涅槃を信ぜよ。その故は、世間の淺事すら、展轉する時は、虚は多く、實は少  
し。況や佛法の深義に於いてをや。如來の滅後二千餘年の間、佛教に邪教を副へ來り、  
萬に二も正義なきか。一代の聖教多分は誤あるか。ゆるに、心地觀經の法爾無漏の種



別時意趣—最後永遠の結果を今の事の如くに説きて人を導くと

久住—三の教世に存して人を導く力あること

行證—教の如くに修行すると、修行によりて證果(さと)りを得ると

子、正法華經の屬類の經末、娑婆論の十六字、攝論の識と八九に分つ。法華論と妙法華經との相違、涅槃論の法華煩惱に汗するの文、法相宗の定性無性の不成佛、攝論宗の法華經の一稱、南無の別時意趣、これ等は譯者人師の誤なり。この外に、四十四季の經々に於て、多くの誤あり。設ひ法華、涅槃に於て、誤あるも、誤なきも、四十餘季の諸經を捨てて、法華、涅槃に隨ふべし。その證上に出し了んぬ。況や、誤ある諸經に於て、信心を致す者、生死を離るべきや。大文の第二に、正像末に就きて、佛法の興廢あることを明さば、これに就きて二あり。一には、爾前四十餘季の内の諸經と、淨土の三部經と、末法に於て、久住、不久住を明かにし、二には、法華、涅槃と、淨土の三部經、竝に、諸經との久住、不久住を明にす。問うていはく、如來の教法は、大小、深淺、勝劣を論ぜず。但時機に依りてこれを行へば定めて利益あるべきなり。然るに、賢劫、大術、大集等の諸經を見るに、佛の滅後二千餘季已後は、佛法皆滅して、但、教のみありて、行證あるべからず。隨つて、傳教大師の末法燈明記を開くに、

我延曆二十季辛巳一千七百五十歲也。自延曆二十季已後亦四百五十餘歲也。既入

目足—重要なもの

末法、設雖有教法、無行證。於然者行佛法者、萬一難有得道歟。然見雙觀經當來之世經道滅盡、我以慈悲哀愍、特留此經、止住百歲、其有衆生值斯經者、隨意所願、皆可得度、等文、釋迦如來一代聖教皆滅盡後、唯特留雙觀經念佛、可利益衆生、と見え了んぬ。この意趣に依りて、粗、淨土家の諸師の釋を勘ふるに、その意なきにあらず。道綽禪師は、當今末法は、これ五濁惡世なり、唯淨土の一門のみ通入の路なるべしと書し、善導和尚は、萬年に三寶滅し、この經のみ住すること百年なりと宣べ、慈恩大師は、末法萬年に餘經悉く滅し、彌陀の一教利物、偏に増すと定め、日本國の叡山の先德慧心僧都は、一代聖教の要文を集めて、末代の指南を教ゆる、往生要集の序にいはいはく、夫往生極樂之教行濁世末代之目足也。道俗貴賤誰不歸者、但顯密教法其文非一、事理業因其行惟多、利智精進之人未爲難、如予頑魯之者豈敢矣。

就中念佛之教多利、末代經道滅盡後濁惡衆生計也。

總じて、諸宗の學者も、この旨を存すべし。殊に、天台一宗の學者誰か、この義に背くべけんや。如何。



答へていはく、爾前四十四季の經經は、各時機に隨つて、而も興廢あるが故に、多分は、淨土の三部經より、已前に滅盡あるべきか。諸經に於ては、多く三乘現身の得道を説くが故に、末代に於ては、現身得道の者これ少し。十方の往生淨土は、多くは末代の機に蒙らしむ。これに就きて、西方極樂は、娑婆鄰近なるが故に、最下の淨土なるが故に、日輪東に出で西に没するが故に、諸經に多くこれを勤む。隨つて淨土の祖師のみ獨りこの義を勤むるにあらず。天台妙樂等も亦爾前の經に依るの日は、且くこの筋あり。亦獨り人師のみにあらず。龍樹天親もこの義あり。これ一義なり。亦仁王經等の如きは、淨土の三部經より尙久しく末法萬季の後、八千季住す可しと。故に、爾前の諸經に於て一定すべからず。第二に、法華、涅槃と、淨土の三部經との久住、不久住を明さば、問うて云はく、法華、涅槃と、淨土の三部經といづれが先に滅すべきか。答へて云はく、法華、涅槃より已前に、淨土の三部經は滅す可きなり。問うていはく、何を以てこれを知るや。

特留一特に末代の爲にこの經を

答へていはく、無量義經に、四十餘季の大部の諸經を擧げ了へて、末顯眞實と云ふ。故に雙觀經等の特留此經の言は皆方便なり、虛妄なり。華嚴方等、般若、觀經等の速疾歴

留めて教化せしむとの佛言  
速疾歴却一普通は長き時間を修得せざるべからざるを直に飛び越えて佛となるを得との教  
隨宜一方便といふに同じ  
外道一外教、多くは婆羅門教の說をさす

三説一已今當經を輕重せられしをさす

八萬聖教一八萬四千の法門と云ふに同じ

劫の往生成佛、無量義經の實義を以てこれを檢ぶるに、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に、無上菩提を成ずることを得ず。乃至險逕を行くに、留難多きが故に經と云ふなり。往生、成佛俱に別時意趣なり。大集、雙觀經等の住滅の先後はみな隨宜の一説なり。法華經に來らざる以前は、彼の外道の說に同じ。譬へば、江河の大海に趣かず、民臣の天王に隨はざるが如し。身を苦しめ行を作すとも、法華、涅槃に至らざれば、一分の利益なく、有因無果の外道なり。在世滅後俱に、教ありて、人無く、行ありて、證なきなり。諸木は枯ると雖も、松柏は萎ます。衆草は散ると雖も、鞠竹は變せず。法華經も亦復かくの如し。釋尊の三説、多寶の證明、諸佛の舌相、偏に令法久住にあるが故なり。

問うていはく、諸經滅盡の後、特に法華經の留るべき證文如何。答へていはく、法華經の法師品に、釋尊自ら流通せしめていはく、我所說經典無量千萬億。已說今說、當說。而於其中、此法華經最爲難信難解云云。文の意は一代五十季の已今當の三説に於て最も第一の經なり。八萬聖教の中に殊に未來に留めんと欲して説き玉ひしなり。故に次の品に、



多寶如來從地涌出。分身諸佛自十方來集一處。釋迦如來諸佛爲御使。責充滿八方四百萬億那由他世界。菩薩二乘人天八部等。云多寶如來竝十方諸佛涌出來集。意趣偏爲令法久住也。各三說諸經滅盡之後。隨於未來五濁難信世界。弘此經立誓言時。二萬菩薩八十萬億那由他菩薩各立誓狀云。我不愛身命。但惜無上道。千世界微塵菩薩文殊等皆誓云。我等於佛滅後。乃至當廣說此經云云。

その後佛十諭を擧げ玉ふ。その第一の諭は、川流江河を以て、四十餘季の諸經に譬へ、法華經を以て大海に譬ふ。末代濁惡の無慚無愧の、大旱魃の時、四味の川流江河は竭ると雖も、法華の大海は減少せず等と説き了へて、次に正しく説て云はく

四味—五味中の前四味

我滅度後。後五百歲中。廣宣流布。於閻浮提。無令斷絕。と定め了んぬ。情ら文の次第を按ずるに、我滅度後の次の後の字は、四十餘季の諸經滅盡の後の後の字なり。故に、法華經の流通たる涅槃經には、應以無上佛法付諸菩薩。以諸菩薩善能問答。如是法寶則得久住。無量千世增熾益盛利安衆生。上。かくの如き等の文は、法華、涅槃は無量百歲にも絶のべからざる經なり。この義を知ら

ざる世間の學者は、大集權門の五五百歳の文を以て、この經に同じ、淨土三部經より已前に滅盡すべしと存する立義は、一經先後の起盡を忘れたるなり。

問うて云はく、上に擧ぐる所の、曇鸞、道綽、善導、慧心等の諸師みな法華眞言等の諸經に於て、末代不相應の釋を作る。これに依りて、源空竝に所化の弟子、法華眞言等を以て難行と立て、難行道と踈み、行者をば、群賊惡衆惡見の人等と罵り、或は祖父の履に類し(聖光房語)或は、絃歌等にも劣るといふ(南無房語)。その意趣を尋ねれば、偏に時機不相應の義を存するが故なり。これ等の人師の釋を如何に、これを會すべきや。

答へて云はく、釋迦如來一代五十年の説教一佛の金言に於て、權實二教を分け、權經を捨てて、實經に入らしむる佛語顯然たり。こゝに於て、「若但讚佛乘。衆生沒在苦の道理を恐れ、且く四十二季の權經を説くと雖も、「若以小乘化乃至於一人。我則墮慳貪」の失を脱れんがために、「入大乘爲本」の義を存し、本意を遂けて法華經を説き給ふ。しかるに涅槃經に至りて、

我滅度必出四依。令弘通權實二教。と約束了んぬ。故に龍樹菩薩は、如來の滅後八百季に出世して、十住毗婆沙等の權論

會す—解釋する

若但云々—衆生の機を考へず。最上の教をばめ説けば云々。爲本—目的とすといふに同じ



順次此の世を去れば直に次の生を受くること萬行一念佛の一行に對してあらゆるよき修行をさす

を造りて、華嚴、方等、般若等の意を宣べ、大論を造りて、般若、法華の差別を分ち、天親菩薩は、如來の滅後九百季に出世して、俱舍論を造りて、小乘の意をのべ、唯識論を造りて、方等部の意をのべ、最後に佛性論を造りて、法華、涅槃の意をのべ、了義、不了義を分ちて、敢て佛の遺言に違はず。末の論師竝に譯者の時に至りては、一向權經に執するが故に、實經を會して、權經に入れ、權實雜亂の失出來せり。亦人師の時に至りては、各依憑の經を以て、本となすが故に、餘經を以て權經となす。これより、彌佛意に背く。而るに淨土の三師に於ては、鸞綽の二師は、十住毗婆沙論に依りて、難易聖淨の二道を立つ。若し本論に違ひて、法華眞言等を以て、難易の内に入れば信用に及ばず。隨つて、淨土の論註竝に安樂集を見るに、多分は本論の意に違はず。善導和尚は亦淨土の三部經に依りて、彌陀稱名等の一行一願の往生を立つる時、梁、陳、隋、唐の四代の攝論師、總じて、一代聖教を以て、別時意趣と定む。善導和尚の存念に違へるが故に、攝論師と破する時、彼の人を群賊等に譬ふ。順次往生の功德に賊するが故に、その所行を雜行と稱することは、必ず萬行を以て、往生の素懷を遂ぐる故は、この人初むる故に千中無一と慊へり。この故に善導和尚も雜行の言の中に、敢て法華眞言等を入れず。日

念佛三昧一心を阿彌陀佛にかけ念を他に散さぬ修行、三昧は梵語、定と譯し、心を一ツ所に定むること内證一自己心内のさとり

本國の源信僧都はまた、叡山第十八代の座主慈慧大師の御弟子なり。多くの書を造れどもみな法華經を弘めんがためなり。而るに往生要集を造るの意は、爾前四十餘季の諸經に於て、往生成佛の二義あり。成佛の難行に對して、往生、易行の義を存し、往生の業の中に於て、菩提心觀念の念佛を以て最上となす。故に大文第十の問答料簡の中第七の諸行勝劣門に於ては、念佛を以て最勝となす。次下に爾前最勝の念佛を以て、法華經の一念信解の功德に對して、勝劣を判する時、一念信解の功德は、念佛三昧より勝る百千倍なりと定めたまへり。當に知るべし、往生要集の意は、爾前最上の念佛を以て、法華最下の功德に對して、人をして法華經に入らしめんが爲に造れる書なるを。故に往生要集の後に、一乘要訣を造りて、自身の内證を述ぶる時、法華經を以て本意となす。而るに、源空竝に所化の衆、この義を知らざるが故に、法華眞言を以て、三師竝に源信所破の難聖雜竝に往生要集の序の顯密中に入れて、三師竝に源信を法華眞言の謗法の人となす。その上、日本國の一切の道俗を化し、法華眞言に於て、時機不相應の旨を習はしめ、在家出家の諸人に於て、法華眞言の結縁を留む。豈に佛の記し玉ふ所の「世中比丘邪智心詔曲」の人にあらずや。亦「則斷一切世間佛種」の失を免るべきか。その上、



山門一教山  
寺門一三井寺

山門、寺門、東寺、天台竝に日本國中法華眞言を習ふ諸人を群賊、惡衆、惡見の人等に譬ふる源空が重罪、何れの劫にかその苦果を経盡すべきか。法華經の法師品に持經の者を罵る罪を説いていはく、

若有惡人、以不善心、於一劫中、現於佛前、常毀罵佛、其罪尙輕。若人以一惡言、毀訾在家出家讀誦法華經者、其罪甚重。

一人の持者を罵る罪すらかくの如し。況や書を造り、日本國の諸人に罵らしむる罪をや。何に、況やこの經を千中無一と定めて、法華經を行する人に疑を生ぜしむる罪をや。觀經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや。願くは、一切の源空が所化の四衆、頓に選擇集の邪法を捨てて、忽に法華經に遷り、今後阿鼻の災を脱れよ。

問うていはく、正しく源空が法華經を誹謗する證文如何。

答へて云はく、法華經の第二に云はく、若人不信毀謗斯經、則斷一切世間佛種。

不信の相貌は人をして法華經を捨てしむればなり。故に天親菩薩の佛性論の第一にこの文を釋して云はく、

四衆一出家の男女  
女と在家の男女

佛性論一四卷、  
世親著

妙樂一名は湛  
然、荆溪尊者と  
も云ふ、天台智  
者大師第五世の  
孫

稱名一口に南無  
阿彌陀佛と稱ふ  
ること

苦憎背大乘者。此是一闡提因。爲令衆生捨此法故。

謗法の相貌はこの法を捨てしむるが故なり。選擇集は、人をして法華經を捨てしむる書にあらすや。閣抛の二字は佛性論の憎背の二字にあらすや。亦法華經誹謗の相貌は四十餘季の諸經の如く、小善成佛を以て、別時意趣と定むる等なり。故に天台の釋に云はく、若不信小善成佛、則斷世間佛種也。

妙樂重ねてこの義を宣べていはく、

此經遍開六道佛種、若謗此經、義當斷也。

釋迦多寶十方の諸佛、天親天台妙樂の意の如くんば、源空は謗法の者なり。所詮選擇集の意は、人をして法華眞言を捨てしめんと書き了んぬ。謗法の義疑なきなり。大文の第三に選擇集謗法の緣起を出さば、

問うて云はく、何れの證據を以て源空を謗法の者と稱するや。

答へていはく、選擇集の現文を見るに、一代聖教を以て二に分つ。一には聖道、難行、難行、二には淨土、易行、正行なり。その中に聖、難、雜といふは、華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃、大日經等なり。淨、易、正と云ふは、淨土三部經の稱名念佛



等なり。聖、難、雜の失を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば、百の時に希に一二を得、千の時希に三五を得ん。或は千が中に一も無し。或は群賊惡衆邪見惡見邪雜の人等と定むるなり。淨、易、正の得を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば、十は即ち十生じ、百は即ち百生ぜん等なり。謗法の邪義これなり。

問うて云はく、一代聖教を聖道、淨土、難行、易行、正行、雜行と分つ。その中に難、聖、雜を以て時機不相應と稱すること、但源空一人の新義にあらず。曇鸞、道綽、善導三師の義なり。これ亦これ等人師の私の按にあらず。その源は龍樹菩薩の十住毗婆沙論より出でたり。若し源空を謗法の者と稱せば、龍樹菩薩に三師を謗法の者と稱するにあらずや。

答へて云はく、龍樹菩薩に三師の意は、法華已前の四十餘季の經に於て、難易等の義を存す。而るを源空より已來、龍樹に三師の難行等の語を借りて、法華眞言等を以て難雜等の内に入れぬ。所化の弟子師の失を知らず、この邪義を以て正義なりと存じ、この國に流布せしむるが故に、國中の萬民悉く、法華眞言等に於て時機不相應の想をなす。その上世間を貪る天台眞言の學者、世の情に隨はんが爲に、法華眞言等に於て、時機不相

應の惡言を吐き、選擇集の邪義を扶け、一旦の欲心に依りて、釋迦、多寶並に十方諸佛の御評定の「會法久住於閻浮提廣宣流布」の誠言を壞り、一切乘生に於て、一切三世十方の諸佛の舌を切るの罪を得しむ。偏にこれ惡世の内の比丘は邪智にして、心詔曲に未だ得ざるをこれ得たりと謂ひ、乃至惡鬼その身に入り、佛の方便隨宜所説の法を知らざるが故なり。

問うて云はく、龍樹菩薩並に三師法華眞言等を以て、難、聖、雜の内に入れざるを、源空私に之を入るとは何を以て知るや。

答へて云はく、遠く餘處に證據を尋ぬべきにあらず。即ち選擇集に見えたり。問うて云はく、選擇集の第一篇に云はく、

道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正歸淨土之文約束了。次下引安樂集私料簡段云初聖道門者就之有二。一者大乘。二者小乘。就大乘中雖有顯密權實等不同。今此集意唯存顯大及以權大。故當歷劫迂回之行。準之思之。應存密大及以實大。已。

選擇集の文なり。この文の意は、道綽禪師の安樂集の意は、法華已前の大小乘經に於て、



法體一教の内  
容、常没一常に惡道  
に沈没する  
雜云々往生の  
目的に適切なら  
ざるもの

聖道淨土の二門を分つと雖も、我私に法華眞言等の實大密大を以て、四十四季の權大乘に同じて聖道門と稱す。「準之思之」の四字これなり。善導和尚の正雜二行を分つ時、また、法華眞言を以て、雜行の内に入る。總じて選擇集の十六段に互りて、無量の謗法をなす根源は、この四字より起る。誤れるかな。畏しきかな。爰に、源空の門弟、師の邪義を救うて云はく、諸宗の常の習、譬ひ經論の證文無しと雖も、義類の同じきを聚めて一處に置く。而も選擇集の意は、法華眞言等を集めて雜行の内に入れ、正行に對してこれを捨つ。偏に經の法體を嫌ふにあらず。但風勢なき末代の衆生を常没の凡夫と定め、この機易行の法を撰ぶ時、稱名念佛を以てその機に當て、易行の法を以て諸教に勝ると立つ。權實淺深等の勝劣を詮するにあらず。雜行といふを嫌ひて、雜といふにあらず。雜と云ふは、不純を雜といふ。その上、諸の經論竝に諸師もこの意なきにあらず。故に叡山の先徳の往生要集の意偏にこの義なり。所以に往生要集の序に云はく、顯密教法其文非一。事業業因其行惟多。利智精進之人未爲難。如予頑魯之者豈敢矣。是故依念佛一門云云。

この序の意は慧心先徳も、法華眞言等を破るにあらず、但偏に、われ等頑魯の者の機に

當りて、法華眞言は聞き難く、行ひ難きが故に、わが身鈍根なるが故にとなり。敢て法體を嫌ふにはあらず、その上、序より已外正宗に至るまで十門あり。大文第八の門に述べて云はく、

今勸念佛、非是遮餘種種妙行。只是男女貴賤。不簡行住坐臥。不論時處諸緣。修之不難。乃至臨終願求往生。得其便宜。不如念佛上。

これ等の文を見るに、源空の選擇と、源信の往生要集と、一卷三卷の不同ありと雖も、一代聖教の中には易行を撰んで、末代の愚人を救はんと欲する意趣は但し同じことなり。源空上人眞言法華を難行と立てて惡道に墮せば、慧心先徳もこの失を免るべからず。如何。

答へて云はく、汝師の謗法の失を救はんがために、源信の往生要集に寄せて、謗法の上に彌よ重罪を招くものなり。その故は、釋迦如來五十年の説教に總じて四十二年の意を無量義經に定めて云はく、  
行於險逕。多留難故。

と、無量義經の已後を定めていはく、

留難一さまたげ



行大直道無留難故

と佛自ら難易勝劣の二道を分ち玉へり。佛よりほか、等覺已下未代の凡師に至るまで、自義を以て難易の二道を分ち、この義に背く者は外道魔王の説に同じからんと。随つて四依の大士龍樹菩薩十住毗婆沙論には、法華已前に於て難易の二道を分ち、敢て四十四年已後の經に於て難行の義を存ぜず。その上もし修し易きを以て易行と定めば、法華經の展轉の行は、稱名念佛より行じ易きこと、百千萬億倍なり。もしまた、勝を以て易行と定めば、分別功德品に爾前四十餘季の八十萬億劫の間、檀、戒、忍、進、念佛三昧等、先の五波羅密の功德を以て法華經の一念信解の功德に比するに、一念信解の功德は、念佛三昧等の先の五波羅密の功德に勝ること百千萬億倍なり、難易勝劣といひ、行淺功深と謂ひ、觀經等の念佛三昧を法華經に比するに、難行中の極難、勝劣中の極劣なり。その上惡人愚人を扶くること、また教の深淺による。阿含十二季の戒門には、現身に四重五逆の者に得道を許さず。華嚴、方等、般若、雙觀經等の諸經は、阿含經より教深きが故に、觀門の時重罪の者を攝すと雖も、なほ戒門の日は、七逆の者に現身の受戒を許さず。然りと雖も、決定性の二乗、無性の闡提に於て戒觀共にこれを許さず。法華涅

波羅密一梵語、度と譯す、この行によりて迷界を度りて悟界に入らしむる意、一念信解一、一念たりとも信解すること、行淺功深一修行は淺くとも功德は深きこと、四重一殺生、偷盜、邪淫、妄語を四重禁戒とす

七逆罪一出佛身血、殺父、殺母、殺和尚、殺阿闍梨、破羯磨僧、殺阿羅漢、攝す一成佛せしむるものの中にをさめ入れてあること、一往一たゞ一と通り

王三昧一三昧中の王

繫等には、唯五逆七逆謗法の者を攝するのみにあらずして、また定性無性をも攝す。就中末法に於ては常没の闡提これ多し、豈に觀經等の四十餘季の諸經に於てこれを扶く可けんや。無性の常没、決定性の二乗は但法華涅槃等に限り、四十餘季の經に依る人師は、彼經の機を取る。この人は未だ教相を知らざるが故なり。但し往生要集は一向序文を見る時は、法華真言等を以て顯密の内にに入れて殆ど未代の機に叶はざる書と雖も、文に入りて委細に一部三卷の始末を見るに、第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時、觀佛三昧、般舟三昧、十住毗婆沙論、寶積、大集等の爾前の經論を引き、一切の萬行に對して、念佛三昧を以て王三昧と立て了んぬ。最後の問答あり。爾前の禪定念佛三昧を以て、法華經の一念信解に對するに百千萬倍劣ると定む。復問を通ずる時、念佛三昧を萬行に勝ると云ふは爾前の當分なりと云々。知る當し、慧心の意は、往生要集を造りて未代の愚なる機を調べて、法華經に入れんが爲なり。故に最後に一乘要訣を造る。その序に云はく、

諸乘權實古來評也。俱據經論互執是非。余寬弘丙午歲冬十月病中歎曰。雖遇佛法。不了佛意。若終空手後悔何追。爰經論文義賢哲章疏。或令人尋。或自思擇。全捨自



宗佗宗之偏黨專探權智實智之深奧終得一乘真實之理五乘方便之說者也既開  
今生之蒙何遺夕死之恨

この序の意は偏に慧心の本意を顯すなり。自宗佗宗の偏黨を捨つる時、淨土の法門を  
捨てざらんや。一乘は眞實の理を得る時専ら法華經に依るにあらずや。源信僧都は、永  
觀二年甲申の冬十一月往生要集を造り、寛弘二年丙午の冬十月の比一乘要訣を造る。そ  
の中間二十餘季、權を先にし、實を後にす。宛も佛の如く、亦龍樹天親天台等の如し。  
汝往生要集を便となし、師の謗法の失を救はんと欲すれども敢てその義類に似ず。義類  
の同じきを以て一處に聚るならば、何等の義類同じきや。華嚴の如きは、二乘界を隔つ  
るが故に十界互具なし。方等般若の諸經は亦十方互具を許さず。觀經等の往生極樂も亦  
方便の極樂なり。成佛往生俱に法華經の如き往生にあらず。皆別時意趣の往生成佛な  
り。その上、源信僧都の意は、四威儀に行じ易きが故に、念佛を以て易行と云ひ、四威  
儀に行じ難きが故に、法華を以て難行と稱せば、天台妙樂の釋を破る人なり。所以に、  
妙樂大師の末代の鈍者無智の者等の法華經を行するに、普賢菩薩竝に多寶十方の諸佛を  
見奉るを易行と定めて云はく、

四威儀一行（あ  
るく間）任（直立  
して居る間）坐  
（すわり居る間）  
臥（寝て居る間）

散心に一心を一  
處に定めず

散心誦華法不入禪三昧坐立行一心念法華文字

この釋の意は、末代の愚者を攝せんが爲なり。散心とは定心に對する語なり。誦法華と  
は、八卷一卷一字一句一偈題目一心一念隨喜の者五十展轉等なり。坐行とは、四威儀を  
嫌はざるなり。一心とは定の一心にもあらず、理の一心にもあらず、散心中の一心なり。  
念法華文字とは、この經は、諸經の文字に似ず、一字を誦すと雖も、八萬寶藏の文字を  
含み、一切諸佛の功德を納むるなり。天台大師立義の八に云はく、

手不執卷常讀是經口無言聲徧誦衆典佛不說法恆聞梵音心不思惟普  
照法界

この文の意は、手に法華經一部八卷を執らざれども、この經を信する人は、晝夜十二時  
の持經者なり。口には讀經の聲を出さざれども、日々時々念々に一切經を讀む者なり。  
佛の入滅はすでに二千餘季をへたり。然りと雖も、法華經を信する者の許に、佛の音聲  
を留めて、時々刻々念々に我が死せざる由を聞かしむるなり。心に一念三千を觀せざれ  
ども、徧く十方法界を照す者なり。これ等の徳は、法華經を行する者に備るなり。この故  
に、法華經を信する者は設ひ臨終の時、心に佛を念はず、經を誦せず、道場に入らざるも、



法界—宇宙全體をさす  
臨終正念—死に臨んで佛を念ずる心の動かぬこと

淺機—智淺きものを得道せしむる意

三大部—法華經の玄義、文句及び止觀  
本末—本は天台の著、末は妙樂の註釋

心無くして法界を照し、音無くして一切經を誦し、卷軸を取らずして、法華經八卷を奉る徳これあり。これ豈權教の念佛者の、臨終正念を期して、十念の念佛を唱へんと欲する者に百千萬倍勝るの易行にあらずや。故に天台大師文句の十に云はく、

都勝諸經故言隨喜功德品。

妙樂大師の、法華經は、諸經よりも淺機を取るなり、而るに、人師この義を辨へざるが故に、法華經の機を深くとることを破りて云はく、

恐人謬解者不測初心功德之大、而推功上位、蔑此初心、故今示彼行淺功深、以顯經力。

「以顯經力」釋の意趣は、法華經は觀經等の權經に勝れたるが故に、行は淺く、功は深し。淺機を攝するが故なり。若慧心の先德、法華經を以て、念佛より難行と定め、愚者頑魯の者を攝せずと云はく、恐らくは、逆路伽耶陀の罪を招かざらんや。亦恐る人謬解の内に入らざらんや。總じて天台妙樂の三大部の本末の意には、法華經は諸經に漏れたる愚者、惡人、女人、常沒闍提等を攝し給ふなり。陀師佛意を覺らざるが故に、法華經を諸經に同じ、或は地住の機に取り、或は凡夫に於ても、別時意趣の義を存す。これ等

四惡—地獄、餓鬼、畜生、阿修羅

宿善—前世に上き事をなしたること

塵點—塵點劫にて無量の長時

初頓—華嚴經は佛成道の最初に説かれし頓教(たごちに佛となる教)なるをいふ

の邪氣を破りて、人天四惡を以て、法華經の機と定む。種類相對を以て、過去の善惡を收む。人天に生ずる人、豈過去の五戒十善なからんや、等と定め了んぬ。若慧心この義に背かば豈天台宗を知る人ならんや。而るに源信深くこの義に迷ふが故に、往生要集に於て、辟見を起し、自ら失ひ、佗をも誤るなり。適宿善ありて、實教に入りながら、一切衆生を化して、權經に還らしめ、剩へ、實經を破らしむ。豈惡師にあらずや。彼の「久遠下種大通結縁」の者の五百三千の塵點を経るが如きは、法華の大教を捨てて、爾前の權妙に還るが故に、後には權經をも捨てて六道に回りぬ。不輕輕毀の衆は、千劫阿鼻地獄に墮つ。權師を信じて、實經を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。而るに、源空我が身唯實經を捨てて、權經に入るのみにあらず。人を勸めて、實經を捨てて權教に入らしめ、亦權人をして實經に入らしめず。剩へ、實經の行者を罵るの罪永劫にも浮み難からん。

問うて云はく、十住毗婆沙論は一代の通論なり。難易の二道の内に、何ぞ法華眞言涅槃答へて云はく、一代の諸大乘經に於て、華嚴經の如きは、初頓後分あり。初頓の華嚴



は、二乗の成不成を論ぜず。方等部の諸經には一向二乗無性闡提の成佛を斥く般若部の諸經もこれに同じ。總じて四十餘季の諸大經の意は、法華涅槃大日經等の如く、二乗無性の成佛を許さず。これ等を以てこれを檢するに、爾前と法華との相違水火の如し。滅後の論師龍樹天親も亦俱に千部の論師なり。その差別を分つに、決定性の二乗、無性、闡提の成不成を以て論の權實を定むるなり。而るに、大論は龍樹菩薩の造、羅什三藏の譯、般若經に依る時は、二乗作佛を許さず。法華經に依れば二乗作佛を許す。十住毗婆沙論も亦龍樹菩薩の造、羅什三藏の譯なり。この論も亦二乗作佛を許さず、これを以て、法華已前の諸大乘經の意を申べたる論なることを知りぬ。

問うて云はく、十住毗婆沙論のいづれの處に、二乗作佛を許さざるの文を出したるや。答へて云はく、十住毗婆沙論の第五に云はく、

若墮聲聞地及辟支佛地。是名菩薩死。則失一切利。若墮於地獄。不生。如是畏。若墮二乘地。則爲大怖畏。墮於地獄中。畢竟得至佛。若墮二乘地。畢竟遮佛道。

この文二乗作佛を許さず。宛も淨名等の「於佛法中以如敗種」の文の如し。問うて云はく、大論の般若經に依りて、二乗作佛を許さず、法華經に依りて二乗作佛を

許す文如何。

答へて云はく、大論の一百にいはいはく、

問曰。更有何法甚深勝般若者。而以般若屬累阿難。而以餘經屬累菩薩。答曰。般若波羅蜜非秘密法。而法華等諸經說阿羅漢受決作佛。所以大菩薩能受持用。譬如大藥師能以毒爲藥。亦九十三云。阿羅漢成佛非論義者所知。唯佛能了。上已

成不成一成佛と不成佛

これ等の文を以てこれを思ふに、論師の權經は宛も佛の權實の如し。而るに、權經に依る人師猥に法華等を以て觀經等の權說に同じ、法華涅槃等の義を假りて、淨土三部經の徳となし、決定性の二乗無性の闡提常没等の往生を許す。權實雜亂の失脱れ難し。例へば外典の儒者の内典を賦みて外典を莊るが如し。謗法の失免れ難きか。佛自ら權實を分け玉ふ。その詮を探るに、決定性の二乗無性有情の成不成これなり。而るにこの義を辨へざる譯者、爾前の經々を譯する時、二乗の作佛、無性の成佛を許す。この義を知る譯者は、爾前の經を譯する時、二乗の作佛、無性の成佛を許さず。これによりて、佛意を覺らざる人師も亦爾前の經に於て、決定性無性の成佛を明すと見て、法華と爾前と同じき思を作し、或は爾前の經に於て決定無性を嫌ふ文を見、この義を以て了義經となし、



地論師—地論の學者  
攝論師—攝論宗の學者

法華涅槃を以て不了義經となす。共に佛意を覺らず、權實二經に迷へり。これ等の誤を出すは、源空一人に限るのみにあらず、天竺の論師並に譯者より、唐土の法師に至るまでその義あり、所謂地論師攝論師の一代の別時意趣、善導懷感の、法華の一稱南無佛の意趣、これ等は、皆權實を辨へざるが故に、出來する處の誤なり。論を造る菩薩、經を譯する譯者、三昧發得の法師猶以てかくの如し。何に況や末代の凡師に於てをや。問うて云はく、汝末學の身に於て何ぞ論師並に譯者法師を破するや。答へて云はく、敢てこの難を致すこと勿れ。攝論師並に善導等の釋は、權實二經を辨へずして、猥に法華經を以て、別時意趣と立つ。故に天台妙樂の釋と水火を作す間、且く法師の相違を聞いて、經論に付きて是非を検する時、權實の二教は佛說より出でたり。天親龍樹重ねてこれを定む。この義に順ずる法師をば且くこれを仰ぎ、この義に順ぜざる法師をば且くこれを用ひざれ。敢て自義を以て是非を定むるにあらず。たゞ相違を出す計りなり。大文の第四に謗法の者を對治すべき證文を出さば、一には佛法を以て、國王大臣並に四衆に附屬する事を明し、二には、正しく謗法の人王地に處するをば對治すべき、證文を明す。第一に佛法を以て國王大臣並に四衆に附屬することを明すは、仁王

經に云はく、

佛告波斯匿王乃至是故付屬諸國王不付屬比丘比丘尼清信男清信女何以故無王威力故乃至此經三寶付屬諸國王四部弟子

大集經二十八に云はく、

若有國王見我法滅捨不擁護於無量世修施戒慧悉皆滅失其國出三種不祥事乃至命終生大地獄

仁王經の文の如くならば、佛法を以てまづ國王に付屬し、次に四衆に及ぼす。王位に居る君、國を治むる臣は佛法を以て先となして、國を治むべきなり。大集經の文の如くならば王臣等佛道のために無量劫の間、頭目等の施を施し、八萬の戒行を持ち、無量の佛法を學ぶと雖も、國に流布する所の法の邪正を正さざれば、大風、早魃、大雨の三災起りて、萬民を逃脫せしめ、王臣定めて三惡に墮せんと。亦雙林最後の涅槃經の第三に云はく、

今以正法付屬諸王大臣宰相比丘比丘尼優婆塞優婆夷乃至不護法者名禿居士



善男子護持正法者不受五戒不修威儀應持刀劍弓箭鋒槊

又云はく、

「不受五戒爲護正法乃名大乘護正法者應當執行乃劍器械云云。」

四十餘季の内にも、梵網等の戒の如くならば、國王大臣諸人等、一切竹杖弓箭矛斧鬪戰の具を蓄ふることを得ず。若これを蓄ふる者は、定めて國王の位比丘比丘尼の位を失ひ、後生は三惡道の中に墮つべしと定め了んぬ。而るに今の世は道俗を擇ばず、弓箭刀杖を帶せり。梵網經の文の如くならば、必ず三惡道に墮ちんこと疑なきなり。涅槃經の文無くんば如何にしてかこれを救はん。亦涅槃經の先後の文の如くならば、弓箭刀杖を帶して、惡法の比丘を治し、正法の比丘を守護せん者は、先世の四重五逆を滅して無上道を證せんと定め給ふ。亦金光明經第六に云はく、

守護正法比丘者滅先世四重五逆必證無上道定亦金光明經第六云若有入於其國土雖有此經未嘗流布生捨離心不樂聽聞亦不供養尊重讚歎見四部衆持經之人亦復不能尊重乃至供養遂令我等及餘眷屬無量諸天不得聞此甚深妙法背甘露味失正法流無有威光及以勢力增長惡趣損滅人天墜生

河乖涅槃路世尊我等四王竝諸眷屬及藥叉等見如斯事捨其國土無擁護心非但我等捨棄是王亦有無量守護國土諸大善神皆悉捨去既捨離已其國當有種種災禍喪失國位一切人衆皆無善心唯有繫縛殺害瞋諍互相讒詔柱及無辜疫病流行慧星數出兩日竝現薄蝕無恒黑白一虹表不祥相星流地動井内發聲暴雨惡風不依時節常遭飢饉苗實不成多有佗方怨賊侵掠國內人民受諸苦惱土地無有可樂之處上

この經文を見るに、世間の安穩を祈らんに、而も三災起らば、惡法流布するが故なりと知る可しと。而るに、當世は隨分國土の安穩を祈ると雖も、去ぬる正嘉元年には大地大に動じ、同二年には大雨大風、苗實を失へり。定めて國を喪ふの惡法この國にあるかと勘ふ。撰擇集の或段に云はく

第一讀誦雜行者除上觀經等往生淨土經已外於大小顯密諸經受持讀誦悉名讀誦雜行

と書き了へて次に書して云はく、

次判二行得失者法華眞言等雜行失淨土三部經得也。



以下に、善導和尚の往生禮讚の十即十生百即百生千中無一の文を書き載せて云はく、私云。見此文彌須捨雜修專。豈捨百即百生專修正行。堅執千中無一雜修雜行乎。行者能思量之上。曰

これ等の文を見るに、世間の道俗豈諸經を信すべけんや。次下に亦書して、法華經等の雜行と、念佛の正行との勝劣難易を定めて云はく、

一者勝劣義。二者難易義。初勝劣義者。念佛是勝。餘行是劣。次難易義者。念佛易修。諸行難修。

亦次下に、法佛真言等の失を定めて云はく、

故知諸行非機失時。念佛往生當機得時。

亦次下に、法華真言等の雜行の門を閉ぢて云はく、

隨陀之前覽雖開定散門。隨自之後還閉定散門。一開以後。永不閉者。唯是念佛一門最後の本懷に云はく、

夫速欲離生死。二種勝法中且闍聖道門。撰入淨土門。欲入淨土門。正雜二行中且拋諸雜行。撰應歸正行上。曰

隨陀一人の意にかなふ様にすること、方便隨自一人にかかはらず、自意のまゝに打出すこと、眞實道聖門―自力の

修行にて佛位に進まんとせしむる効

門弟この書を傳へて、日本六十餘州に充滿するが故に、門人世間の無智の者に語りて云はく、上人智慧第一の身となりて、この書を造り、眞實の義を定め、法華真言等の門を閉ぢて、後に開くる文無く、抛ち還つて、取るの文無し、などと立つる間、世間道俗一同に頭を傾け、その義を問ふ者には、假字を以て、選擇集の意を宣べ、或は法然上人の物語を書す間、法華真言に於て難を付けて、或は去年の曆祖父の履に譬へ、或は法華經を讀むは管絃より劣ると。かくの如き惡書國中に充滿するが故に、法華真言等國にありと雖も、聽聞せんことを樂はず。偶行する人ありと雖も、尊重を生ぜず。一向念佛は、法華等の結縁をなすをば、往生の障となると云ふ。故に捨離の意を生ず。この故に諸天妙法を聞く事を得ず、法味を嘗めざれど、威光勢力あることなく、四天王竝に眷屬この國を捨て、日本國守護の善神も捨離し已んぬ。故に正嘉元年に大地大に震ひ、同二年に春大雨苗を失ひ、夏の旱魃に草木を枯し、秋の大風に果實を失ひ、飢渴忽ち起りて、萬民を逃脱せしむること、金光明經の文の如し。豈選擇集の失にあらざるや。佛語虛からず。故に惡法の流布あり、既に國に三災起れり。而して、この惡義を對治せずんば、佛の所説の三惡を脱るべけんや。而るに近年より予「我不愛自命。但惜無上道」の文



雪山常啼 雪山童子、常啼菩薩共に法華經の爲に難行せられし方といふ諸行往生念佛以外の行にても往生の出来ること説くこと

逆路伽耶陀一路 伽耶陀を順世外道といふ、この説に反對する異説にて左順世外道とも稱せらる

を瞻る間、「雪山常啼」の心を起し、命を大乘の流布に替へ、強言を吐いて云はく、選擇集を信じて、後世を願ふ人は無間地獄に墮すべしと。爾時に、法然上人の門弟、選擇集に於て上に出すところの惡義を隠し、或は諸行往生を立て、或は選擇集に於て、法華眞言等を破らざる由を稱し、或は在俗に於て、選擇集の邪義を知らしめざらん爲に、妄語を構へて云はく、日蓮は念佛を稱する人を三惡道に墮すと云ふと。

問うて云はく、法然上人の門弟諸行往生を立てる失ありや否や。答へて云はく、法然上人の門弟と稱し、諸行往生を立てるは、逆路伽耶陀の者なり。當世も亦諸行往生の義を立て。而も内心には一向に念佛往生の義を存じ、外には、諸行不謗の由を聞かしむるなり。抑この義を立てる者は、選擇集の、法華眞言等に於て、失を付け、捨閑閣拋群賊邪見惡見邪雜人中無一等の語を見ざるや否や。第二に正しく謗法の人の王地に處するを對治すべき證文を出さば、涅槃經第三に云はく、懈怠破戒毀正法者。大臣四部之衆應當苦治。善男子是諸國王及四部衆尙無有罪。不也世尊。善男子是諸國王及四部衆尙無有罪。又第十二に云はく、

波羅夷極惡と譯す、四重禁を犯したるもの

我念往昔於閻浮提作大國王名曰仙豫愛念敬重大乘經典其心純善無有羸惡嫉恚乃至善男子我於爾時心重大乘聞婆羅門誹謗方等聞已即時斷其命根善男子以是因緣從是已來不墮地獄上。問うて云はく、梵網經の文を見るに、比丘等の四乗等を誹謗すれば、波羅夷罪なり。而るに源空が謗法の失を顯はすは豈阿鼻の業にあらずや。答へて云はく、涅槃經の文に云はく、

迦葉菩薩言世尊如來何故記彼當墮阿鼻地獄善男子善星比丘多有眷屬皆謂善星是阿羅漢是得道果我欲壞彼惡邪心故記彼善星以放逸故墮於地獄上。この文に放逸とは謗法の名なり。源空も亦彼の善星の如く、謗法を以ての故に無間に墮つべし。所化の衆この邪義を知らざるが故に、源空を以て一切智心と號し、或は勢至菩薩、或は善導の化身なりと云ふ。彼が惡邪の心を壞らんが爲の故に謗法の根源を顯はす。梵網經の説は謗法の者の四乗なり。佛誡めて云はく、謗法の人を見てその失を顯さざれば佛の弟子にあらずと。故に涅槃經に云はく、我涅槃後隨其方面有持戒比丘威儀具足護持正法見壞法者即能斷遣呵責徵



治。當知是人得福無量不可稱計。

亦云はく、

若善比丘見壞法者置不呵責。當知是人。佛法中怨。若能斷遣呵責處。是我弟子。眞聲聞也。

予佛弟子の一分に入らんがためにこの書を造り、謗法の失を顯し、世間に流布す。願はくは十方の諸佛この書に於て力を副へ、大惡法の流布をとどめ、一切衆生の謗法を救はしめ玉へ。

大文の第五に、善知識竝に眞實の法に値ひ難きを明さば、これにつきて三あり。一には受け難き人身、値ひ難き佛法なることを明し、二には受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に値ふと雖も、惡知識に値ふが故に三惡道に墮つることを明し、三には末代の凡夫の爲に善知識を明す。第一に受け難き人身、値ひ難き佛法なることを明さば、涅槃經三十三に云はく、

爾時世尊取地少土置之爪上告迦葉言。是土多耶。十方世界地土多乎。迦葉菩薩白佛言。世尊爪上土者不比十方所有土也。善男子有人捨身還得人身。捨三惡身得

受人身諸根完具生於中國具足正信能修習道修習道已能修正道修正道已能得解脫得解脫已能入涅槃如爪上土捨人身已得三惡身捨三惡身得三惡身諸根不具生於邊地信邪倒見修習邪道不得解脫常樂涅槃如十方界所有地土

この文は多く法門を集めて一具となせり。

捨人身還受人身如爪上土捨人身墮三惡道如十方土捨三惡身受人身如爪上土捨三惡身還得三惡身如十方土受人身如十方土受人身不缺一六根如爪上土受人身不缺一六根生邊地如十方土生中國如爪上土生中國如十方土值佛法如爪上土又云不作一闍提不斷善根信如是等涅槃經典如爪上土乃至作一闍提斷諸善根不信是經者如十方界所有地土

已上經文

この文の如くば、法華涅槃を信ぜずして、一闍提と作るは十方の土の如く、法華經を信ずるは爪上の土の如し。この經文を見て彌感涙押へ難し。今日本國の諸人を見聞するに、多分は權教を行す。設ひ口には實教を行すと雖も、心には亦權教を存ず。故に天台大



師摩訶止觀の五に云はく、

其癡鈍者。毒氣深入。失本心。故。既其不信。則不入。手。乃至大罪聚人。乃至設厭世者。翫下劣乘。攀附枝葉。狗狎作務。敬彌猴。爲帝釋。崇瓦礫。是明珠。此黑闇人。豈可論道。

如意珠—如意寶珠、意のまゝに何物をも生ずる最貴の寶、龍王宮にありといふ

十方—十方世界

權者—佛菩薩のかりに人として現れしをいふ

源空竝に所化の衆深く三毒の酒に酔ひ、大通結縁の法を失ふ。法華涅槃に於て不信の思を作し、一闡提と作り、觀經等の下劣の乘に依りて、方便稱名等の瓦礫を翫び、法然房の彌猴を敬うて智慧第一の帝釋と思ひ、法華涅槃の如意珠を捨て、如來聖教を偏するは、權實二教を辨へざるが故なり。故に弘決の第一に云はく、聞此圓頓、不宗重者。良由近代習大乘者雜濫故也。

大乘に於て、權實二教を辨へざるを雜濫と云ふなり。故に末代に於て法華經を信する者は、爪上の土の如く、法華經を信ぜざるものは、十方の微塵の如し。故に妙樂歎いて曰はく、像末は情澆く、信心寡薄にして、圓頓の教法、藏に溢れ函に盈つれども、暫くも思惟せず。便ち目を瞑するに至る。徒に生き、徒に死す、一に何ぞ痛しきやと。この釋は偏に妙樂大師權者たるの間、遠く日本國の當代を覽て記し置所の未來記なり。

問うて云はく、法然上人の門弟の内にも一切經藏を安置し、法華經を行する者あり。何ぞみな謗法の者と稱せんや。

答へて云はく、一切經を開き見て、法華經を讀み、難行道の由を稱し、選擇集の惡義を扶けんが爲なり。經論を開くに付けて、彌謗法を増すこと、例へば善星の十二部經、提婆達多の六萬藏の如し。智者の由を稱するは、自身を重んじ、惡法を扶けんが爲なり。第二に受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に値ふと雖も惡知識に値ふが故に、三惡道に墮つることを明さば、佛藏經に云はく、

大莊嚴佛滅後。五比丘一人知正道。多億人。四人住邪見。此四人命終後墮阿鼻地獄。仰臥。伏臥。左脇臥。右脇臥。各九百萬億歲。乃至若在家出家親近此人。竝諸檀越。凡六百四萬億人。與此四師俱生俱死在大地獄。受諸燒煮。大劫若盡。是四惡人及六百四萬億人。從此阿鼻地獄轉生。佗方大地獄中。

涅槃經三十三に云はく、  
爾時城中有一尼乾。名曰苦得。乃至善星問苦得。答曰我得食吐鬼身。善星諦聽。乃至爾時善星即還我所。作如是言。世尊苦得尼乾命終之後。生三十三天。乃至爾時如

十二部經云々—小乘の十二部經を總て諸師せしこと

尼乾—外道の名



四禪定一四禪天  
に上乘するだけ  
の修行證果

來即與迦葉往善星所善星比丘遙見我來見已即生惡邪之心以惡心故生身  
陷入墮於阿鼻地獄上曰  
善星比丘は佛の菩薩たりし時の子なり。佛に隨ひ奉り、出家して十二部經を受け、欲界  
の煩惱を壞りて四禪定を獲得せり。然りと雖も、惡知識たる苦得外道に値ひ、佛法の正  
義を信ぜざるに依りて、出家の受戒十二部經の功德を失ひ、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦  
岸等の四比丘に親近せし六百四萬の人は、四師と俱に十方の大阿鼻地獄を經しなり。今  
の世の道俗は、選擇集を貴ぶが故に、源空の影像を拜して、一切經難行の邪義を讀む。  
例へば、尼乾の所化の弟子が、尼乾の遺骨を禮して、三惡道に墮ちしが如し。願くは今  
の世の道俗選擇集の邪正を知りて、後に供養恭敬を致せ。しからざれば定めて後悔あ  
らん。故に涅槃經に云はく、

菩薩摩訶薩於惡象等心無畏怖於惡知識生怖畏心何以故是惡象等唯能壞身  
不能壞心惡知識者二俱壞故是惡象等唯壞一身惡知識者壞無量善身無量善心  
是惡象等唯能破壞不淨臭身惡知識者能壞淨身及以淨心是惡象等能壞肉身惡知  
識者壞於法身為惡象殺不至三趣為惡友殺必至三趣是惡象等但為身怨

是非云々是な  
るか非なるかを  
定めよの意

善知識まこと  
のよき指導者

惡知識者為善法怨是故菩薩常當遠離諸惡知識上曰  
請ひ願はくは、今の世の道俗、設ひこの書を邪義なりと思ふと雖も、且くこの念を抛ち  
て、十住毘婆娑論を開き、その難行の中に、法華經の不入入を檢べ、選擇の「準」之思  
之の四字を按じて、後に是非を致せ。謬りて惡知識を信じ、邪法を習ひ、この生を空し  
うすることなかれ。

第三に末代の凡夫の爲に善知識を明さば、  
問うて云はく、善財童子は五十餘の知識に値ひき。その中に普賢、文殊、觀音、彌勒等  
あり。常啼、班足、妙莊嚴、阿闍世等は、曇無竭、普明、嚧婆二子夫人に値ひ奉りて生死を  
離れたり。これ等はみな大聖なり。佛世を去りて後はかくの如き師を得ること難しとな  
す。滅後に於て龍樹、天親も去りぬ。南岳、天台にも値はず。如何ぞ生死を離るべきや。  
答へて云はく、末代に於て眞實の善知識あり、所謂法華涅槃これなり。  
問うて曰はく、人を以て善知識となすは常の習なり。法を以て知識となすの證ありや。  
答へて云はく、人を以て知識となすは常の習なり。しかりと雖も末代に於ては眞の知識な  
ければ法を以て知識となすに多くの證あり。摩訶止觀にいはいはく、



或從知識或從經卷聞上所說一實菩提

この文の意は、經卷を以て善知識となすなり。法華經にいはく、若法華經行閻浮提有受持者應作此念。皆是普賢威神之力。

この文の意は、末代の凡夫法華經を信ずるは、普賢の善知識の力なりと。又いはく、

若有受持讀誦正憶念修習書寫是法華經者當知是人則見釋迦牟尼佛如從佛口聞此經典當知是人供養釋迦牟尼佛上已

この文を見るに、法華經は釋迦牟尼佛なり。法華經を信ぜざる人の前には、釋迦牟尼佛入滅を取り、この經を信ずる者の前には、滅後たりと雖も、佛の在世なり。又いはく、

若我成佛滅度後之於十方國土有說法華經處我之塔廟爲聽是經故涌現其前。爲作證明。

この文の意は、われ等法華の名號を唱ふれば多寶如來本願の故に必ず來り玉ふ。又云はく、

諸佛在於十方世界說法盡還集一處。釋迦多寶十方諸佛普賢菩薩等はわれらが善知識なり。若この義に依らば、われ等は亦

宿善 善財常啼班足等にも勝れたり。彼は權經の知識に値ひ、われ等は實經の知識に値へばなり。彼は權經の菩薩に値ひ、われ等は實經の佛菩薩に値ひ奉ればなり。涅槃經に

いはく、  
依法不依人 依智不依識

「依法」と云ふは、法華涅槃の常住の法なり。「不依人」とは、法華涅槃に依らざる人なり。設ひ佛菩薩たりと雖も、法華涅槃に依らざる佛菩薩は善知識にあらず。況や、法華涅槃に依らざる論師譯者人師に於てをや。「依智」とは佛に依り、「不依識」とは等覺已下なり。今の世の世間の道俗、源空の謗法の失を隠さんが爲に、徳を天下に擧げて、權化なりと稱す。依用すべからず。外道は五通を得て、能く山を傾け海を竭すとも、神通なき阿含經の凡夫に及ばず。羅漢を得て六通を現する二乗は、華嚴方等般若の凡夫に及ばず。華嚴方等般若の等覺の菩薩も、法華經の名字觀行の凡夫に及ばず。設ひ神通智慧ありと雖も權教の善知識をば用ふべからず。われ等常没の一闍提の凡夫、法華經を信せんと欲するは、佛性を顯さんが爲の先表なり。故に妙樂大師の云はく、「內薰にあらざるよりは、何ぞよく悟を生ぜん。故に悟を生ずる力は眞如にあり。故に眞薰を以て外護となすなり」

五通—天眼通、  
天耳通、宿命通、  
他心通、神足通、  
六通—五通に漏  
盡通を加ふ  
等覺—菩薩の位  
として最上に  
あり  
內薰—心の本性  
がよき句を有す  
ること  
眞薰—佛が外よ  
り力を加ふるこ  
と



十界互具一地獄界より佛界に至る十界の各は、實は他の九界をも具有するものと、法華經の深遠なる説とす

九界の佛界一九界の中にそのまゝ佛界を具ふる常途一尋常

と。法華經より外の四十餘季の諸經には、十界互具なし。十界互具を説かざれば、内心の佛界を知らず。内心の佛界を知らざれば、外の諸佛も顯れず。故に四十餘季の權行者は佛を知らず。設ひ佛を見ると雖も成佛なし。爾前の菩薩も亦自身の十界互具を見ざれば、二乗界の成佛を見ず。故に衆生無邊誓願度の願も満足せず。故に菩薩も佛を見ず。凡夫も亦十方互具を知らざるが故に、自身の佛界に顯れず。故に阿彌陀如來の來迎もなく、諸佛如來の加護もなし。譬へば、盲人の自身の影を見ざるが如し。今法華經に至りて、九界の佛界を開くが故に、四十餘季の菩薩二乘六凡始めて自身の佛界を見る。この時この人の前に始めて佛菩薩二乗を立つ。この時二乗菩薩始めて成佛し、凡夫始めて往生す。この故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經これなり。常途の天台宗の學者は、爾前に於て當分の得道を許せども、自義に於ては當分の得道を許さず。然りと雖も、この書に於てはその義を盡さず。略してこれを記す。追つてこれを記すべし。大文の第六に法華涅槃に依る行者の用心を明さば、一代教門の勝劣淺深難易等に於ては先の段に既にこれを出せり。この一段に於ても、一向に後世を念ふ。末代常没の五逆謗法一闡提等の愚人の爲にこれを注す。略して三あり。一には在家の諸人正法を護持するを以

て、生死を離る可く、惡法を持つに依りて三惡道に墮つることを明かにし、二には法華經の名字計りを唱へて三惡道を離るべきを明かにし、三には涅槃經は、法華經の爲に流通と成すことを明かにす。第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離るべく、惡法を持つに依りて三惡道に墮つることを明さば、涅槃經第三に云はく、佛告迦葉。以能護持正法。因緣故得成就。是金剛身。亦云はく、

時有國王名曰有德。乃至爲護法故。乃至與是破戒諸惡比丘。極共戰鬥。乃至王於是時得聞法已。心大歡喜。尋即命終生阿閼佛國。上曰

この文の如くは、在家の諸人別の知行無しと雖も、謗法の者を對治する功德に依りて生死を離るべきなり。

問うて云はく、在家の諸人佛法を護持すべき様如何

答へて云はく、涅槃經に云はく  
若有衆生貪著財物。我當施財。然後以是大涅槃經勸之令讀。乃至先以愛語而隨其意。然後漸當以是大乘大涅槃經勸之令讀。若凡庶者當以威勢逼之令



讀。若僑慢者。我當爲其而作。僕使隨順其意。令其歡喜。然後復當以大涅槃而教導之。若有誹謗大乘經者。當以勢力摧之令伏。既摧伏已。然後勸令讀大涅槃。若有愛樂大乘經者。我躬當往恭敬供養尊重讚歎。上曰

問うて云はく今の世の道俗偏に選擇集に執して、法華涅槃に於ては、自身不相應の念を作すの間、護惜建立の心なし。偶邪義の由を稱する人あれば、念佛誹謗の者と稱し、惡名を天下に雨す。これらは如何。

答へて云はく、自答を存すべきにあらず。佛自らこのことを記して云はく、

仁王經云。大王。我滅度後未來世中四部弟子諸小國王太子王子。乃是任持護三寶者。轉更滅破三寶。如師子身中蟲自食師子。非外道也。多壞我佛法。得大罪過。正教衰薄。民無正行。以漸爲惡。其壽日減。至于百歲。人壞佛教。無復孝子。六親不和。天神不祐。疾疫惡鬼日來侵害。災怪首尾。連禍縱橫。死入地獄餓鬼畜生。

亦次下に云はく、

大王。未來世中諸小國王四部弟子自作此罪。破國因緣。乃至諸惡比丘多求名利。於國王太子王子前自說破佛法因緣。破國因緣。其王不別信聽此語。乃至當其時。正法將

一もなく一も成佛するものなき

道俗一出家と俗人

粟散王一粟粒の如き小き國の王

滅不久上曰

余選擇集を見るに、敢てこの文の未來記に違はず。選擇集は法華真言等の正法を定めて雜行難行と云ひ、末代のわれ等に於ては時機相應せず、これを行する者は千中に一もなく、佛還つて法華等を説き玉ふと雖も、法華真言の諸行の門を閉ぢて、念佛の門を開く。末代に於てこれを行する者は群賊等と定め、當世一切の道俗に於てこの書を信ぜしめ、この義を以て如來の金言と思へり。この故に世間の道俗佛法建立の意なく、法華真言の正法の法水忽ちに竭き、天人減少して三惡日に增長す。偏に選擇集の惡法の催す所、起す所の邪見なり。この經文を佛記して、わが滅度の後といへるは、正法の末八十季像法の末八百年、末法の末八千季なり。選擇集の出づる時は、像法の末、末法の始なれば八百季の内なり。仁王經に記する所の時節に當れり。諸の小國の王とは日本國の王なり。中下品の善とは粟散王これなり。獅子身中の蟲の如しとは佛弟子の源空これなり。諸の惡比丘とは所化の衆これなり。說破佛法因緣破國因緣とは上に擧ぐる所の選擇の語これなり。「其王不別信聽此語」とは、今の世の道俗邪義を辨へずして猥にこれを信するなり。請ひ願はくは道俗法の邪正を分別して、その後正法に付して後世を願へ。



今度人身を失ひ三惡道に墮ちば、後悔すとも何ぞ及ばん。  
第二に但法華經の題目計を唱へて三惡道と離るべきことを明さば、法華經第五にいはく、  
文殊師利。是法華經於無量國中乃至名字不可得聞。  
第八にいはく、

汝等但能擁護受持法華名者福不可量。

提婆品にいはく、

聞妙法華經提婆達多品。淨心信敬不生疑惑者不墮地獄餓鬼畜生。

大般涅槃經名字功德品にいはく、

若有善男子善女人。聞是經名。生惡趣者無有是處。涅槃經は法華經の流通たるが故にこれを引く

問うて云はく、但この經の題名を聞くと雖も、解心なくば如何にして三惡道を脱れん。

答へて云はく、法華經流布の國に生れて、この經の題名を聞き信を生ずるは、宿善の深厚なるに依れり、設ひ今生は惡人無智なりと雖も、必ず過去の宿善あるが故にこの經の名を聞きて信を致す者なり。故に惡道に墮ちず。

問うて云はく、過去の宿善とは如何。

解心理解し得る心

答へて云はく、法華經の第二に云はく、

若有信受此經法者是人已曾見過去佛恭敬供養亦聞是法法師品云又

如來滅度之後。若有人聞妙法華經乃至一偈一句一念隨喜者。乃至當知是諸人等

已曾供養十萬億佛。

流通たる涅槃經にいはく、

若有衆生。於熙連河沙等諸佛發菩提心。乃能於是惡世受持如是經典。不生誹

謗。善男子若有能於一恆河沙等諸佛世尊發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是

法。愛敬是典。已上經文

大善の所生一法華を誹らざるを得るは非常の善ありしによりて生じたるものと

宿緣多幸一前世の因緣が非常によかりしこと

これ等の文の如くんば、設ひ先に解心なくとも、この法華經を聞きて、謗せざるは大善の所生なり。夫三惡の生を受くること大地微塵より多く、人間の生を得ること爪上の土より少し。乃至四十餘季の諸經に値ふことは大地微塵より多く、涅槃經に値ふことは爪上の土より少し。上に擧る所の涅槃經の三十三の文を見るべし。設ひ一字一句なりと雖も、この經を信すれば宿緣多幸なり。問うて云はく、設ひ法華經を信すと雖も、惡緣に隨はど何ぞ三惡道に墮ちざらんや。



有緣云々一經の行はるるにたよりある土地

答へていはく、解心なき者權教の惡知識に遇ひて、實教を退けば惡師を信する失に依りて、必ず三惡道に墮つべきなり。かの不輕輕毀の衆は權人なり。大通結縁の者の三千塵點を歴しは、法華を退して權教に遷りしが故なり。法華經を信するの輩、法華經の信を捨てて、權人に隨はんより外は、世間の惡業に於ては、法華の功德に及ばざるが故に、三惡道に墮つべからざるなり。

問うて云はく、日本國は法華涅槃有緣の地なりや否や。

答へて云はく、法華經第八に云はく、

於如來滅後、閻浮提內廣令流布、使不斷絕。

七の卷に云はく、

廣宣流布、於閻浮提、無令斷絕。

涅槃經第九にいはく、

此大乘經典大涅槃經復亦如是、爲於南方諸菩薩、故當廣流布。三千世界廣しと雖も、佛自ら法華涅槃を以て南方流布の處と定む。南方の諸國の中に於て、日本國は殊に法華經の流布すべき處なり。

問うて云はく、その證如何。

答へて云はく、肇公の法華の翻經の後記にいはく、

羅什三藏奉值須利耶蘇摩三藏、授法華經時語云、佛日西山隱遺耀照、東北、茲典有緣於東北諸國、汝慎傳弘。

東北とは日本なり。西南の天竺より東北の日本を指すなり。故に慧心の一乘要訣にいは

日本一州圓機純一。朝野遠近同歸一乘。縑素貴賤悉期成佛。

願はくは日本國の今世の道俗、選擇集の久習を捨てて、法華涅槃の現文に依り、肇公慧心の日本記を恃みて法華修行の安心を企てよ。

問うて云はく、法華修行の者何れの淨土を期すべきや。

答へて云はく、法華經二十八品の肝心たる壽量品に云はく、

我常在、此娑婆世界。

亦云はく、

我常住於此。

圓機一圓教（最上の大乘教）を信解する智慧縑素一僧と俗



本地久成一本來の佛地に於て久遠の昔に佛となり居給ひし完全の佛

兜率一彌勒菩薩の居らるる天の名西方一彌陀の淨土十方十方にも各諸佛の淨土あり

亦云はく、

我此土安穩。

この文の如くは本地久成の圓佛は、この世界に在せり。この土を捨てて何の土を願ふべきや。故に法華修行の者の所住の處を淨土と思ふべし。何ぞ煩しく他の處を求めんや。故に神力品にいはく、

若經卷所住之處。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧坊。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。乃至當知是處即是道場。

涅槃經に云はく、

若善男子是大涅槃微妙經典所流布處。當知其地即是金剛。是中諸人亦如金剛。上曰法華涅槃を信する行者は餘處を求むべきにあらず。この經を信する人の所住の處は即ち淨土なり。

問うていはく、華嚴方等般若阿含觀經等の諸經を見るに、兜率、西方、十方の淨土を勸む。その上法華經の文を見るに亦兜率西方十方の淨土を勸む。何ぞこれ等の文に違うて、この瓦礫荆棘の穢土を勸むるや。

穢土一淨土に對してこの土をさす安養一極樂淨土の一名

光宅一光宅寺、支那金陵にあり、梁武帝の勅によりて法雲法師之を建つ道場一道場寺、支那金陵にあり、創立年代未詳、摺拾一とりあつむ、二者中より法華を特に取る意、天台一天台宗の

答へて云はく、爾前の淨土は久遠實成の釋迦如來の所現の淨土にして、實は皆穢土なり。法華經は亦方便壽量の二品なり。壽量品に至りて、實の淨土を定むる時、この土は即ち淨土なりと定め了んぬ。但、兜率安養十方の難に至りては爾前の名目を改めず。この土に於て兜率安養等の名を付く。例へばこの經に三乘の名ありと雖も、三乘あらざるが如し、「不須更指觀經等也」の釋の意これなり。法華經に結縁なき衆生の、當世西方淨土を願ふは、瓦礫の土を樂ふとはこれなり。法華經を信ぜざる衆生は、誠に分添の淨土なき者なり。

第三に、涅槃經は法華經流通の爲にこれを説き玉ふを明さば、

問うて云はく、光宅の法雲法師、竝に道場の慧觀等の碩學は、法華經を以て第四時の經と定め、無常熱蘇味と云ふ。天台智者大師は、法華涅槃同味と立つと雖も、亦摺拾の義を存す。二師共に權化なり。互に德行を具せり。何を正となしてわれ等の迷心を晴すべきや。

答へて云はく、設ひ論者譯者たりと雖も、佛教に違ひて權實二教を判ぜずんば、且く疑を加ふべし。何に況や唐土の人師たる天台、南岳、光宅、慧觀、知儼、嘉祥、善導等の



開祖、名は智顛、智者大師ともいふ。陳隨の問の人。南岳一支那天台宗第二祖、名は慧思。光宅一光宅寺の法雲のこと、涅槃宗、梁代の人。慧觀一羅什三藏、慧遠の弟子。知儼一華嚴宗の第七祖、唐代の人。嘉祥一嘉祥寺の吉藏、三論宗、隋唐代の人。善導一淨土教の大家、隋唐代の人。

釋に於てをや。設ひ末代の學者たりと雖も、依法不依人の義を存じ、本經本論に違はずんば信用を加ふべし。

問うて云はく、涅槃經の第十四卷を開きたるに、五十年の諸大乘經を擧げて前四味に譬へ、涅槃經を以て醍醐味に譬ふ。諸大乘經は、涅槃經より劣ること百千萬倍と定め了んぬ。その上迦葉童子の領解に云はく、

我從今日始得正見。自是之前我等悉名邪見之人。

この文の意は涅槃經以前の法華等の一切衆典を皆邪見と云ふなり。當に知るべし、法華經は邪見の經にして、未だ正見の佛性を明さず。故に天親菩薩の涅槃論に諸經と涅槃との勝劣を定むる時、法華經を以て般若經に同じて、同じく第四に攝したり。豈に正見の涅槃經を以て邪見の法華の流通となさんやと。如何。

答へて云はく、法華經の現文を見るに、佛の本懷殘すことなし。方便品にいはいはく、

今正是其時。

壽量品にいはいはく、

每自作是念。以何令衆生得入無上道速成就佛身。

神力品に云はく、

以要言之。如來一切所有之法。乃至皆於此經宣示顯說。

これ等の現文は、釋迦如來の内證は皆此の經に盡し玉ふ。その上多寶竝に十方の諸佛來集の庭に於て、釋迦如來の已今當の語を證し、法華經の如き經なしと定め了んぬ。而るに多寶諸佛本土に還るの後に、但釋迦一佛のみ異變を存じて、還つて涅槃經を説きて法華經を卑くせば、誰人かこれを信ぜん。深くこの義を存じ、隨つて涅槃經の第九を見るに、法華經を流通して説きていはいはく、

是經出世。如彼菓實多所利益安樂一切。能令衆生見於佛性。如法華中八千聲聞得授記。成。大菓實。如秋收冬藏更無所作。

この文の如くば、法華經若邪見ならば涅槃も豈邪見にあらずや。法華經は大収、涅槃經は摺拾なりと見え了んぬ。涅槃經は自ら法華經に劣るの由を稱す。法華經の當説の文敢て相違なし。但し、迦葉の領解竝に第十四の文は、法華經を下すの文にあらず。迦葉の自身竝に所化の衆、今始めて法華經の所説の「常住佛性久遠實成」を覺る。故にわが身を指して、これより已前は邪見なりと云ふ。法華經已前の無量義經に嫌へる諸經を、涅槃



槃經に重ねてこれを擧げて嫌へるなり。法華經を嫌へるにあらず。亦涅槃論に至りてはこれ等の論は、書き付くるが如く天親菩薩の造、菩提流支の譯なり。法華論も亦天親菩薩の造、菩提流支の譯なり。經文に違ふことこれ多し。涅槃論も亦本經に違ふ。當に知るべし。譯者の誤なり、信用するに及ばず。

問うて云はく、先の經に漏れたるものを後の教にこれを承け取りて得道せしむるを流通とせり。阿含經は華嚴の流通と成るべきか。乃至法華經は前四味の流通と成るべきか。答へていはく、前四味の諸經は、菩薩人天等の得道を許すと雖も、決定性の二乘無性闡提の成佛を許さず。その上佛意を探りて、實を以てこれを檢ぶるに、亦菩薩人天等の得道もなし。十方互具を説かざるが故に、久遠實成なきが故に。問うて云はく、證文如何。

答へて云はく、法華經方便品に云はく、  
若以小乗化、乃至於一人。我則墮慳貪。此事爲不可。

この文の意は、今選擇集の邪義を破らんが爲に餘事を以て詮となさず。故に爾前得道有無の實義はこれを出さず。追つてこれを檢ぶべし。但し四四季の諸經は實に凡夫の得

道なきが故に、法華經は爾前の流通となさず。法華經に於て十界互具久遠實成を顯したるゆゑ。故に涅槃經は、法華經の爲に流通となるなり。

大文の第七に問に隨つて答ふとは、若末代の愚人、上の六間に依りて萬一にも法華經を信ぜば、權宗の諸人、或は自ら惑へるに依り、或は偏執に依りて、法華經の行者を破らんが爲に、多く四四季竝に涅槃等の諸經を引きてこれを難ぜん。而るに權教を信ずる人はこれ多く、或は威勢に依り、或は世間の資縁に依り、人の意に隨つて、世路を互らんが爲に、或は權教には學者多く、實教には智者少し。是非に就きて萬が一も實教を信ずる者あるべからず。この故にこの一段を撰んで權人の邪難を防がん。

問うて云はく、諸宗の學者難じて云はく、華嚴教は、報身如來の所説、七處八會皆頓極頓證の法門なり。法華經は應身如來の所説、教主既に優劣あり。法門に於て何ぞ淺深なからん。隨つて對告衆も法慧、功德林、金剛幢等なり。永く二乘を雜へず。法華經は舍利弗等を以て對告衆となすと。宗難、法相宗の如きは、解深密經等を以て依憑となして難を加へていはく、解深密經は文殊觀音等を以て對告衆となすと。勝義生菩薩の領解には一代を有空中と詮す。その中とは、華嚴法華深密等なり。法華經の信解品の五時の

七處八會一華嚴  
教は七處に八  
度の説法を以て  
せられしこと  
教主一教を説か  
れし佛  
對告衆一聽衆と  
いふに同じ  
法慧云々一菩薩  
衆の名



達磨一印度禪宗の二十八祖、支那禪宗の初祖、印して一印可し

領解は四大聲聞なり。菩薩と聲聞とは勝劣天地なりと。淨土宗の如きは、道理を立てて云はく、われ等は、法華等の諸經を誹謗するにあらず。彼等の諸經は正しくは大人のために、傍には凡夫のためにす。斷惑證理深の教にして、末代のわれ等これを行ずるに、千人の中に一人もかの機にあたらす。在家の諸人、多分は文字を見ず。亦華嚴法相等の名を聞かず。況や、その義を知らんや。淨土宗の意はわれ等凡夫は但口に任せて、六字の名號を稱すれば、現在には阿彌陀如來二十五の菩薩等を遣して、身に影の隨ふ如く、百重千重に行者を圍遶して、これを守り玉ふ。故に、現世には七難即滅、七福即生し、乃至臨終の時は必ず來迎ありて、觀音の蓮臺に乘じ、須臾の間に、淨土に至り、業に隨つて蓮華開け、法華經を聞きて、實相を覺る。何ぞ煩しく穢土に於て、餘行を行じて、何の詮かある。但萬事を抛ちて一向に名號を稱せよ云々。禪宗等の人云はく、一代の聖教は月を指す指なり。天地日月等も汝等が妄心より出でたり。十方の淨土も執心の影像なり。釋迦十方の佛陀は、汝が覺心の所變なり。文字を執する者は、株を守る愚人なり。わが達磨大師は文字を立てず。方便を假らず、一代聖教の外に、佛迦葉に印してこの法を傳ふ。法華經は未だ眞實を宣べず。これ等の諸宗の難一にあらず。如何ぞ、

て、認可して

難一非難、攻撃

法華經の信心を壞らざる可けんや。答へて云はく、法華經の行者は心中に、「四十餘季已今當皆是眞實、依法不依法」等の文を存じて、而も外に語にこれを出さず。難に隨つてこれを問ふべし。抑所立の宗義、何の經に依るやと。かの經を引かば、引くに隨つて亦これを尋ねよ。一代五十季の間の說の中に、法華經より先か、後か、同時なるか、亦先後不定なるかと。若先と答へなば、未顯眞實の文を以てこれを責めよ。敢てかの經の說相を尋ねること勿れ。後と答へなば、當說の文を以てこれを責めよ。同時なりと答へなば、今說の文を以てこれを責めよ。不定と答へなば、不定經は大部の經にあらず、一時一會の說にして、亦物の數にあらず。その上不定經と雖も三說を出でず、設ひ百千萬の義を立つると雖も、四十餘季等の文を載せて、虚妄と稱せざるより外は、用ふべからず。佛の遺言に、不依不義經と云ふが故なり。亦知儼、嘉祥、慈恩、善導等を引ききて、徳を立て、難すと雖も、法華涅槃に違ふ人師に於ては、用ふべからず。依法不依人の金言を仰ぐが故なり。亦法華經を信せん愚者のために、二種の信心をたつ。一には佛に就きて信を立て、二には經に就きて信を立てつ。佛に就きて信を立てつとは、權宗の學者來り難じて云はん、善導和尚は、三昧發得の

慈恩一名は窺基、唐代法相宗、玄奘三藏の弟子



舍利佛骨

人師、本地彌陀の化身なり、慈恩大師は、十一面觀音の化身にして、亦筆端より舍利を雨らす、これ等の諸人は皆、彼々の經々に依りて皆證あり、何ぞ汝彼經に依らずして亦彼師の義を用ひざるやと。

答へて云はく、汝聞け、一切の權宗の大師先德竝に舍利弗目連普賢文殊觀音乃至阿彌陀藥師釋迦如來われらが前に來りて説きて、法華經は汝等の機に叶はず、念佛等の權經の行を修め、往生を遂げて、法華經を覺れと。かくの如き説を聞くと雖も敢て用ふべからず。その故は四十餘季の諸經には法華經の名字を呼はず。何の處にか、機の堪不堪を論ぜん。法華經に於ては、多寶釋迦十方諸佛一處に集りて選定して云はく、

令法久住。於如來滅後。閻浮提內廣令流布。使不斷絕。

この外に今佛出來して、法華經を、未代不相應と定めば、既に、法華經に違ふ。知りぬ、この佛は、涅槃經に出す所の滅後の魔佛なり。これを信用すべからず。その已下の菩薩、聲聞、比丘等は亦言論するに及ばず。これ等は不審もなし。涅槃經に記す所の、滅後の魔の所變の菩薩等なり。その故は、法華經の座は、三千大千世界の外四百萬億阿僧祇の世界なり。その中に充滿せる。菩薩二乘人天八部等、皆如來の告勅を蒙り、各所

在の國土に、法華經を引むべき由、これを願ひぬ。善導等若權者ならば、何ぞ、龍樹天親等の如く、權教を引めて、後に法華經を引めざるや。法華經の告勅の數に入らざるや。何ぞ、佛の如く、權教を引めて後に法華經を引めざるや。若この義無くんば、設ひ佛たりと雖もこれを信すべからず。今は法華經中の佛を信す。故に佛に就きて信を立つと云ふなり。

問うて云はく、釋迦如來の所説を、佛佗これを證するを實説と稱せば、何ぞ阿彌陀如來を信せざるや。

答へて云はく、阿彌陀經に於ては、法華經の如き證明なきが故に、これを信せざるなり。

問うて云はく、阿彌陀經を見るに、釋迦如來所説の一日七日の念佛を、六方の諸佛舌を出し、三千を覆うてこれを證明せり、何ぞ證明なしと云ふや。

答へて云はく、阿彌陀經に於ては全く、法華經の如き證明なく、但釋迦一佛、舍利弗に向つて、説きて言はく、われ一人阿彌陀經を説くのみにあらず、六方の諸佛舌を出し、三千を覆うて阿彌陀經を説くと云ふと雖も、これ等は、釋迦一佛の説なり、敢て諸佛は



來り玉はず。これ等の權文は、四十餘季の間は、教主も權佛の始覺の佛なり。佛權なるが故に所説も亦權なり。

故に四十餘季の權佛の説はこれを信すべからず。今の法文涅槃は、久遠實成の圓佛の實説なり、十界互具の實言なり。亦多寶十方の諸佛來りて、これを證明し玉ふ。故にこれを信すべし。阿彌陀經の説、無量義經の未顯眞實の語に壞れ了んぬ。全く釋迦一佛の語にして、諸佛の證明にはあらざるなり。二に經に就きて信を立つとは、無量義經に四十餘季の諸經を擧げて、未顯眞實といふ。涅槃經に云はく、

如來雖無虛妄之言。若知衆生因虛妄說得法利者。隨宜方便則爲說之。又云依了義經不依不了義經。上曰

情執一まよひ

かくの如き文一にあらず。皆四十四季の自説の諸經を、虛妄方便不了義經魔説と稱す。これ皆人をして、その經を捨て、法經涅槃に入らしめんが爲なり。而るに何の恃ありて、妄語の經を留めて、行義を企て、得道を期するや。今權教の情執を捨て、偏に實教を信するが故に、經に就きて信を立つと云ふなり。問うて云はく、善導和尚も人に就きて信を立て、行に就きて信を立て、何の差別あらん

や。

答へて云はく、彼は阿彌陀經の三部に依りて、これを立て、一代の經に於て、了義經不了義經を分たずしてこれを立つ。故に、法經涅槃の義に對して、これを難する時は、その義壞れ了んぬ。(原漢文)



立正安國論

旅客來りて嘆じて曰はく、近年より、近日に至るまで、天變地妖し、飢饉疾癘遍く天下  
 に滿ち、廣く地上に迸る。牛馬蒼に斃れ、骸骨路に充ち、死を招くの輩既に大半に超  
 え、之を悲まざるの族一人も無し。然る間に、我は、利劍即是の文を專にし、西土教主  
 の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃みて、東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死  
 の詞を仰ぎて、法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅、七福即生の句を信じて、百座百  
 講の儀を調べ、或は祕密眞言の教に因りて、五瓶の水を灑ぎ、或は坐禪入定の儀を全う  
 して、空觀の月を澄し、若しくは七鬼神の號を書して、千門に押し、若しくは五大力の  
 形を圖して、萬戸に懸け、若しくは、天神地祇を拜して、四角四堺の祭祀を企て、若し  
 くは萬民百姓を哀みて、國主國宰の徳政を行ふ。然りと雖も、唯肝膽を推くのみにして、  
 彌飢疫に逼り、乞客目に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥して、觀と爲し、尸を竝べて橋  
 と作す。觀れば夫二離壁を合せ、五緯珠を連ぬ、三寶世に在り、百王未だ窮らず、此の

利劍即是—彌陀  
 の名號の譬、善  
 導の文に出づ  
 西土教主—阿彌  
 陀佛のこと  
 東方如來—藥師  
 佛のこと  
 五瓶—眞言の五  
 佛を指す  
 五大力—五大方  
 菩薩

觀—樓閣



圓覆一  
方載一  
微管一  
見

世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたるや。是何なる禍に依り、是何なる誤に由るや。主人の曰はく、獨り此の事を愁へて、胸臆に憤排す。客來りて共に嘆く、屢談話を致さん。それ出家して道に入る者は、法に依りて、佛を期するなり。而るに今神術も協はず、佛威も驗無し。具に當世の體を觀るに、愚にして、後生の疑を發す。然れば則ち、圓覆を仰ぎて、恨を呑み、方載に俯して慮を深くす。情ら微管を傾け、聊か經文を披きたるに、世皆正に背き、人悉く惡に歸す。故に、善神國を捨てて相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て、魔來り、鬼來り、災起り、難起る。言はずんばある可からず、恐れずんばある可からずと。

客曰はく、天下の災、國中の難、余獨嘆くにあらずして、衆皆悲めり。今蘭室に入りて、初めて芳詞を承るに、神聖去り、辭し、災難並び起るとは、何の經に出でたるや。その證據を聞かんと。

主人曰はく、其の文繁多にして、其の證弘博なり。金光明經に云はく、

於其國土雖有此經未嘗流布生捨離心不樂聽聞亦不供養尊重讚歎見四部衆持經之人亦復不能尊重乃至供養遂令我等及餘眷屬無量諸天不得聞此

甚深の妙法。背甘露味。失正法流。無有威光及以勢力。增長惡趣。損滅人天。墜生死河。乖涅槃路。世尊我等四王竝諸眷屬及藥叉等。見如斯事。捨其國土。無護擁心。非但我等捨棄是王。必有無量守護國土諸大善神。皆悉捨去。既捨離已。其國當有種種災禍。喪失國位。一切人衆皆無善心。唯有繫縛殺害。瞋諍。互相讒詔。枉及無辜。疫病流行。彗星數出。兩日竝現。薄蝕無恆。黑白一虹表不祥相。星流地動。井內發聲。暴雨惡風。不依時節。常遭飢饉。苗實不成。多有佗方怨賊。侵掠國內。人民受諸苦惱。土地無有可樂之處。

大集經に云はく、

佛法實隱沒。鬚髮爪皆長。諸法亦忘失。當時虛空中大聲震。於地一切皆遍動。猶如水上輪。城壁破落下。屋宇悉圯折。樹林根枝葉華葉藥盡。唯除淨居天。欲界一切處。七味三精。氣損減無有餘。解脫諸善論。當時一切盡。所生華菓味。希少亦不美。諸有井泉池。一切盡枯涸。土地悉鹹鹵。滴裂成丘澗。諸山皆焦然。天龍不降雨。苗稼皆枯死。生者皆死盡。餘草更不生。雨土皆昏闇。日月不現明。四方皆亢旱。數現諸惡瑞。十不善業道。貪瞋癡倍增。衆生於父母。觀之如獐鹿。衆生及壽命。色力威樂滅。遠離人天樂。皆悉墮惡道。如是不善



業惡比丘。毀壞我正法。損滅天人道。諸天神王悲愍衆生者。棄此濁惡國。皆悉向餘方。上仁王經に云はく、

國土亂時。先鬼神亂。鬼神亂故萬民亂。賊來劫國。百姓亡喪。臣君太子王子百官共生是非。天地怪異。二十八宿。星道日月。失時失度。多有賊起。

亦云はく、

我今五眼明見三世。一切國王皆由過去世侍五百佛。得爲帝王主。是爲一切聖人羅漢。而爲來生彼國土中。作大利益。若王福盡時。一切聖人皆爲捨去。若一切聖人去時。七難必起。

藥師經に云はく、

若利帝利灌頂王等災難起時。所謂人衆疾疫難。佗國侵逼難。自界叛逆難。星宿變怪難。日月薄蝕難。非時風雨難。過時不雨難。上曰

仁王經に云はく

大王吾今所化百億須彌百億日月。一一須彌有四天下。其南閻浮提有十六大國五百中國十千小國。其國土中有七可畏難。一切國王爲是難故。云何爲難。日月失度。時節返

逆。或赤日出黑日出。二三四五日出。或日蝕無光。或日輪一重二三四五重輪。現爲一難也。二十八宿失度。金星彗星輪星鬼星火星水星風星。星南北斗五鎮大星。一切國主星三公星百官星。如是諸星。各各詐現。爲二難也。大火燒國。萬姓燒盡。或鬼火龍火天火山神火人火樹木火賊火。如是變怪。爲三難也。大水澌沒。百姓時節返逆。冬雨雪。冬時雷電霹靂。六月雨。冰霜雹。雨。赤水黑水青水。雨。土山石山。雨。沙磔石。江河逆流。浮山流石。如是變時。爲四難也。大風吹殺萬姓。國土山河樹木一時滅沒。非時大風黑風赤風青風天風地風火風水風。如是變。爲五難也。天地國土亢陽。炎火洞燃。百艸亢旱。五穀不登。土地赫燃。萬姓滅盡。如是變時。爲六難也。四方賊來侵國。內外賊起。火賊水賊風賊鬼賊。百姓荒亂。刀兵劫起。如是怪時。爲七難也。

大集經に云はく、

若有國王。於無量世。修施戒慧。見我法滅。捨不擁護。如是所種無量善根。悉皆滅失。其國當有三不祥事。一者穀貴。二者兵革。三者疫病。一切善神悉捨離之。其王教令。人不隨從。常爲鄰國之所侵嬖。暴火橫起。多惡風雨。暴水增長。吹灑人民。內外親戚。其共謀叛。其王不久。當遇重病。壽終之後。生大地獄中。乃至如王夫人太子



色を作す一立腹  
すること  
金人云々一漢土  
に佛教の渡りし  
故事  
寺塔一四天王寺  
建立  
鷲頭の月一靈鷲  
山の說法  
雞足の風一鷄足  
山に於て未來の  
彌勒佛が說法あ  
るべしと傳ふ

大臣城主柱師郡守宰官。亦復如是。是。上。已。それ四經の文朗らかにして、萬人誰か疑はん。而るに、盲瞽の輩、迷惑の人妄りに邪説を信じて、正教を辨へず。故に、天下世上諸佛衆生に於て、捨離の心を生じ、擁護の志無し。仍て、善人、聖人、國を捨て、所を去る。是を以て、惡鬼、外道災を成し、難を致すなり。客色を作して曰はく、後漢の明帝は、金人の夢を悟りて、白馬の教を得たり。上宮太子は守屋の逆を誅して、寺塔の構を成せり。爾來上一人より、下萬民に至るまで、佛像を崇びて、經卷を專にす。然れば則ち、敷山、南都、園城、東寺、四海一州、五畿七道、佛教星の如く羅がり、堂宇雲の如く布けり。鷲子の族は、則ち、鷲頭の月を觀、鶴勒の流は亦、雞足の風を傳ふ。誰か、一代の教を編し、三寶の跡を廢すと謂はん。若しその證あらば、委しく、其の故を聞かんと。主人諭して曰はく、佛閣臺を連ね、經藏軒を竝べ、僧は竹葦の如く、侶は稻麻に似たり。崇重すること、年舊り、尊貴日に新なり。但し、法師は諂曲にして、人倫に迷惑し、王臣は不覺にして、邪正を辨すること無し。仁王經に云はく、諸惡比丘。多求名利。於國王太子王子前。自說破佛法因緣破國因緣。其王不別信。

聽此語。橫作法制。不依佛戒。是爲破佛破國因緣。上曰

涅槃經に云はく、

菩薩於惡象等。心無恐怖。於惡知識。生怖畏心。爲惡象殺。不至三趣。爲惡友。殺必至三趣。上曰

法華經に云はく、

惡世中比丘邪智。心諂曲。未得謂爲得。我慢心充滿。或有阿練若納衣在空閑。自謂行眞道。輕賤人間者。貪著利養。故與白衣說法。爲世所恭敬。如六通羅漢。乃至常在大眾中。欲毀我等。故向國王大臣婆羅門居士及餘比丘衆。誹謗說我惡。謂是邪見人說。外道論議。濁劫惡世中。多有諸恐怖。惡鬼入其身。罵毀辱我。濁世惡比丘。不知佛方便隨宜所說法。惡口聲。數數見擯出。上曰

涅槃經に云はく、

我涅槃後。無量百歲四道聖人悉復涅槃。正法滅後。於像法中。當有比丘。似像持律。少讀誦經。貪嗜飲食。長養其身。雖著袈裟。猶如獵師細徐行。如貓伺鼠。常唱是言。我得羅漢。外現賢善。內懷貪嫉。如受啞法婆羅門等。實非沙門。現沙門像。



邪見熾盛。誹謗正法。上曰

文に就きて世を見るに、誠に以て然なり。悪侶を誡めずんば、豈善事を成さんや。客猶ほ、憤りて曰はく、明王は、一天地に因りて、化を成し、聖人は、理非を察して世を治む。世上の僧侶は、天下の歸する所なり。悪侶に於きては、明王信す可からず。聖人に非ずんば、賢哲仰ぐ可からず。今賢聖の尊重せるを以て、龍象の輕からざるを知る。何ぞ、妄言を吐きて、強ちに、誹謗を成し、誰人を以て惡比丘と謂ふや。委細に聞かんと欲すと。

主人の曰はく、後鳥羽院の御宇に、法然と云ふ者ありて、撰擇集を作る。則ち、一代の聖教、遍く十方の衆生を迷はず。其の撰擇に云はく、

道綽禪師立聖道淨土二門。而捨聖道。正歸淨土之文。初聖道門者。就之有二。乃至。之に準じて、之を思ふに、密大、及び、實大を存す應し。然れば則ち、今の、眞言、佛心、天台、華嚴、三論、法相、地論、攝論、此等八家の意正しく此に在るなり。曇鸞法師の往生論註に云はく、

密大—密教の大乗  
實大—實大乘  
存す—意味す  
佛心—禪のこと

龍象—高僧のこと

此中難行道者。即是聖道門也。易行道者即是淨土門也。淨土宗學者先須知此旨。設雖先學聖道門一人。若於聖道門有其志者。須棄聖道。歸於淨土。

又云はく、

善導和尚立正雜二行。捨雜行。歸正行之文。第一讀誦雜行者。除上觀經等往生淨土經已外。於大小乘顯密諸經。受持讀誦。悉名讀誦雜行者。第三禮拜雜行者。除上禮拜彌陀已外。於一切諸佛菩薩等及諸世天等。禮拜恭敬。悉名禮拜雜行者。私云。見此文。須捨雜修專。豈捨百即百生專修正行。堅執。千中無一雜修雜行乎。行者能思量之。又云。貞元入藏錄中。始自大般若經六百卷。終于法常住經。顯密大乘經總六百三十七部。二千八百八十三卷也。皆須攝讀誦大乘之一句。當知隨自之前。暫雖開定散門。隨自之後。還閉定散門。一開以後。永不閉者。唯是念佛一門。又云。念佛行者。必可具足三心之文。觀無量壽經云。同經疏云。問曰。若有解行不同。邪雜人等。防外邪異見之難。或行一分二分。群賊等喚回者。即喻別解別行惡見人等。私云。又此中言一切別解別行異學異見等者。是指聖道門。比又最後結句文云。夫速欲離生死二種勝法中。且闍聖道門。選入淨土門。欲入淨土門。正雜二行中。且拋



諸雜行、選應、歸、正行、上曰

これに就きて、之を見るに、曇鸞、道綽、善導の謬釋を引いて、聖道淨土、難行、易行の旨を建て、華法、眞言總じて、一代の大乗六百三十七部二千八百八十三卷一切の諸佛菩薩及び、諸の世天等を以て、皆聖道、難行、難行等に攝して、或は捨て、或は閉ぢ、或は閑き、或は抛つ。此の四字を以て、多く一切を迷はし、剩へ、三國の聖僧、十方の佛弟を以て、皆群賊と號し、併せて罵詈せしむ。近くは、所依の淨土の三部經の、「唯除、五逆、誹謗、正法」の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる、法華經の第二の「若人、不信毀謗此經、乃至其人命終入阿鼻獄」の誠文に迷ふ者なり。こゝに、代末代に及び、人聖人にあらず、各冥衢に容りて、竝に直道を忘る。悲しいかな、瞳朦を樹たず、痛しいかな、徒に、邪信を催す。故に、上國王より、下土民に至るまで、皆、經は、淨土三部の外の經なく、佛は、彌陀三尊の外に佛なしと謂へり。仍て、傳教、義眞、慈覺、智證等或は萬里の波濤を涉りて、渡せし所の聖教、或は、一朝の山川を回りて崇むる所の佛像、若しくは、高山の巔に、華界を建てて安置し、若しくは、深谷の底に蓮宮を起て以て崇重す。釋迦藥師光を竝ぶるや、威を現當に施し、虛空地藏の化を成すや、

攝をさめ入る  
三國一、天竺、支那、日本

一代五時一釋尊の一代の說法を淺深の五段に分ちて五時に次第せるをいふ

三尊一彌陀と觀音と勢至と

華界一華藏世界といふ淨土、これを形どれること

蓮宮一淨土のこと、これを模して造るをいふ  
虛空地藏一虛空藏菩薩と地藏菩薩  
佛馱一佛陀に同じ、ほとけ  
付屬一釋尊の依賴  
供佛一佛に供養すること  
施僧一僧に布施すること

一凶一念佛の教をさす  
釋迦文一釋迦牟尼に同じ  
廣業一大乘といふに同じ

益を生後に被らしむ。故に、國主は、郡郷を寄せて、燈燭を明らかにし、地頭は、田圃を充てて、供養に備ふ。而るを、法然の選擇に依りて、則ち、教主を忘れて、西土の佛馱を貴び、付屬を抛ちて、東方の如來を閑き、唯四卷三部の佛典を專にし、空しく、一代五時の妙典を抛つ。是を以て、彌陀の堂に非らざれば、皆、供佛の志を止め、念佛の者に非ざれば、早く施僧の懷を忘る。故に、佛堂零落して、瓦松の煙、老い、僧房荒廢して、庭草の露深し。然りと雖も、各護惜の心を捨てて、竝に建立の急を廢す。是を以て、住持の聖僧行きて歸らず、守護の善神去りて來ることなし。是偏に、法然の選擇に依るなり。悲しいかな、數十年の間、百千萬の人、魔縁に蕩されて、多く佛教に迷へり。傍を好みて、正を忘る、善神怒を爲さざらんや。圓を捨てて、偏を好む、惡鬼便を得ざらんや。若かず彼の萬祈を修せんよりは、此の一凶を禁せんには。客殊に色を作して曰はく、我が本師釋迦文、淨土の三部經を説き玉うてより、以來、曇鸞法師は、四論の講説を捨てて、一向に淨土に歸し、道綽禪師は、涅槃の廣業を閑きて、偏に西方の行を弘め、善導和尚は、難行を抛ちて、專修を立て、慧心僧都は、諸經の要文を集めて、念佛の一行を宗とす。彌陀を貴重すること誠に以て然なり。又往生の人そ



出離—生死のま  
よひを脱脚する  
こと  
勢至—法然は幼  
名を勢至丸と呼  
び、勢至菩薩の  
化身と稱せらる

翠葉—グダの葉  
溷廁—かはや、  
入り了ればその  
臭を覺えざるに  
至るとなり

れ幾ぞや。就中、法然上人幼少にして天台山に昇り、十七にして六十卷に涉り、竝に、  
八宗を究め、具に大意を得たり。其の外、一切の經論七遍反覆し、章疏傳記究め看ざる  
ことなし。智は日月に齋しく、徳は先師に超えたり。然りと雖も、猶、出離の趣に迷  
ひ、涅槃の旨を辨へず。故に、遍く觀、悉く鑒み、深く思ひ、遠く慮り、遂に、諸經  
を抛ちて、念佛を修す。其の上、一夢の靈應を蒙り、四裔の親疎に弘む。故に或は、勢  
至の化身と號し、或は、善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち、十方の貴賤、頭を低れ、一朝  
の男女歩を運ぶ。爾來春秋推移し、星霜相積れり。而るに、忝くも釋尊の教を疎に  
して、恣に、彌陀の文を譏る。何ぞ、近年の災を以て、聖代の時に課し、強ひて、  
先師を毀り、更に、聖人を罵るや。毛を吹きて、疵を求め、皮を剪りて、血を出す。昔  
より、今に至るまで、此の如き、惡言未だ見ず。惶る可し、憤む可し。罪業至つて重し、  
科條争でか遁れん。對産するも猶ほ以て恐ありと、杖を携へて歸らんと欲す。  
主人咲み止めて曰はく、辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷廁に忘る。善言を聞きて惡言と思  
ひ、謗者を指して、聖人と謂ひ、王師を疑うて惡侶に擬す。其の迷誠に深く、其の罪淺  
からず。事の起りを聞け、委しく其の趣を談ぜん。釋尊說法の内一代五時之間に、先

捨閉閣抛—す  
てとち、おき、  
なげうつ、眞實  
の教の爲に權の  
教を捨つるなり  
八荒—八方に同  
じ

後を立てて、權實を辨す。而るに、曇鸞、道綽、善導、既に權に就きて實を忘れ、先に依  
りて後を捨つ。未だ、佛教の淵底を探らざる者なり。就中、法然其の流を酌むと雖も、  
其の源を知らず。所以は何に。大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、竝に、一切の諸  
佛菩薩、及び、諸の世天等を以て、捨、閉、閣、抛の字を置きて、一切衆生の心を薄う  
す。是偏に、私曲の詞を展べて、全く、佛經の説を見ざるなり。妄語の至り、惡口の科、  
言ふも比無く、責めても餘り有り。人皆其の妄語を信じ、悉く其の選擇を貴ぶ。故に淨  
土の三經を崇めて、衆經を抛ち、極樂の一佛と仰ぎて、諸佛を忘る。誠に是、諸佛諸經  
の怨敵、聖僧、衆人の讎敵なり。此の邪教廣く八荒に弘まり、周く十方に遍す。抑も近  
年の災難、往代の由を以て、強ちに之を恐る、聊か、先例を引きて汝の迷を悟す可し。  
止觀の第二に史記を引いて云はく、

周末有被髮袒身不依禮度者。

弘決の第二に此の文を釋するに、左傳を引いて云はく、

初平王之東遷也。伊川見被髮者而於野祭。識者曰。不及百年。其禮先止。

爰に知りぬ、微前に顯れ、災後に致ることを。又、



阮藉逸才。蓬頭散帶。後公卿子孫皆教之。奴苟相辱者。方達自然。擗節兢持者。呼爲田舍。爲司馬氏滅相上。

又、慈覺大師の入唐巡禮記を案するに、云はく、

唐の武帝。會昌元年。敕令章敬寺鏡霜法師於諸寺傳彌陀念佛教。每寺三日巡輪。不絶。同二年。回鶻國之軍兵等侵唐界。同三年。河北之節度使忽起亂。其後大蕃國更拒命。回鶻國重奪地。凡兵亂同秦項之代。災火起。邑里之際。何況武宗大破佛法。多滅寺塔。不能撥亂。遂以有事。取意。

此を以て、之を惟ふに、法然は、後鳥羽院の御宇、建仁年中の者なり。彼の院の、御事既に、眼前に在り。然れば則ち、大唐に例を残し、吾が朝に證を顯す。汝疑ふことなかれ。汝怪むことなかれ。唯須く凶を捨てて、善に歸し、源を塞ぎ、根を截るべしと。

客聊か和ぎて曰はく、未だ、淵源を究めずして、數其の趣を知る。但し、落華より、柳營に至るまで、釋門に樞樞在り、佛家に棟梁あり。然れども、未だ、勘狀を進せず、上奏に及ばず。汝賤身を以て、輒ら莠言を吐く。その義餘あるもその理謂無し。主人曰はく、予少量たりと雖も、忝くも、大乘を學ぶ。蒼蠅驥尾に附きて、萬里を渡

釋門—佛家といふに同じ  
樞樞—棟梁、座主長吏等の僧職をいふ

葵言—不正の言

この義云々—意見はよきも上奏するは不禮當ぞとなり

驥—一日千里を走る駿馬  
碧蘿—青き蔓草

感神院—祇園にあり  
犬神人—卑しき宮仕人

り、碧蘿松頭に懸りて、千尋を延ぶ。弟子一佛の子と生れ、諸經の王に事ふ。何ぞ、佛

法の衰微を見て、心情の哀惜を起さざらん。其上、涅槃經に云はく、

若善比丘。見壞法者。置不呵責。驅遣舉處。當知是人佛法中怨。若能驅遣阿責舉處。是我弟子眞聲聞也。

余善比丘の身たらずと雖も、佛法中怨の責を遁れん爲に、唯、大綱を撮つて、粗ほ一端を示す。其の上、去る元仁年中に、延曆興福の兩寺より、度々、奏聞を經、敕宣御教書を申下して、法然の選擇の印板を大講堂に取り上げ、三世の佛恩を報ぜん爲に、之を燒失せしめ、法然の墓所に於きては、感神院の犬神人に仰付けて、破格せしむ。其の門弟隆觀、聖光、成覺、薩生等は、遠國に配流し、その後未だ、御勘氣を許されざるなり。豈に未だ、勘狀を進せずと云はんや。

客則ち和ぎて曰はく、經を下し、僧を誘ふこと、一人として論じ難し。然れども、大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、竝に、一切の諸佛、菩薩及び諸の世天等を以て、捨、閉、閣、抛の四字を載す。其の詞勿論なり。其の文顯然たり。此の瑕瑾を守りて、その誹謗をなす。迷うて言ふか、覺りて語るか。愚賢辨たず、是非定め難し。但し、災難の起は、



選擇に因るの由、盛にその詞を増し、彌その旨を談す。所詮天下泰平、國土安穩は、君の樂ふ所、土民の思ふ所なり。夫國は法に依りて昌へ、法は人に因りて貴し。國亡び、人滅せば、佛を誰か崇む可き。法を誰か信すべきや。先づ、國家を祈りて、佛法を立つべし。若し、災を消し、難を止むるの術あらば聞かんと欲すと。

主人曰はく、余はこれ頑愚にして、敢て、賢を存せず。唯經文に就きて、聊か所存を述べん。抑、治術の旨、内外の間、その文幾多ぞや。具に擧ぐべきこと難し。但し、佛道に入りて、數、愚案を回すに、謗法の人を禁じて、正道の侶を重んぜば、國中安穩にして、天下泰平ならん。即ち涅槃經に云はく、

佛言。唯除一人。餘一切施。皆可讚歎。純陀問言。云何名爲唯除一人。佛言。如此經中所說破戒。純陀復言。我今未解。唯願說之。佛語。純陀言。破戒者。謂一闍提。其餘在所一切布施。皆可讚歎。獲大果報。純陀復問。一闍提者其義云何。佛言。純陀者。有比丘及比丘尼優婆塞優婆夷。發羸惡言。誹謗正法。造是重業。永不改悔。心無懺悔。如是等人名爲趣向一闍提道。若犯四重。作五逆罪。自知定犯如是重事。而心初無怖畏懺悔。不有發露。於彼正法。永無護惜建立之心。毀皆輕賤。言多禍

答。如是等亦名趣向一闍提道。唯除如此一闍提輩。施其餘者。一切讚歎。

又云はく、  
我念往昔。於閻浮提。作大國王。名曰仙豫。愛念敬重大乘經典。其心純善。無有羸惡嫉恚。善男子。我於爾時。心重大乘。聞婆羅門誹謗。方等。聞已即時斷其命根。善男子。以是因緣。從是已來。不墮地獄。

又云はく  
如來昔爲國王。行菩薩道時。斷絕爾所婆羅門命。

又云はく、  
殺有三。謂下中上。下者蟻子乃至一切畜生。唯除菩薩示現生者。以下殺因緣。墮於地獄畜生餓鬼。具受下苦。何以故。是諸畜生有微善根。是故殺者具受罪報。中殺者。凡夫人。至阿那含。是名爲中。以是業因。墮於地獄畜生餓鬼。具受中苦。上殺者。父母乃至阿羅漢。辟支佛。畢定菩薩。墮於阿鼻大地獄中。善男子。若有能殺一闍提者。則不墮此三種殺中。善男子。彼諸婆羅門等。一切皆是一闍提也。

仁王經に云はく、



佛告波斯匿王。是故付屬諸國王。不付屬比丘比丘尼。何以故。無王威力。涅槃經に云はく、

今以無上正法。付屬諸王大臣宰相及四部衆。毀正法者。大臣四部之衆。應當苦治。又云はく、

佛言。迦葉。以下能護持正法。因緣故。得成就。是金剛身。善男子。護持正法者。不受五戒。不修威儀。應持刀劍弓箭鋒槩。

又云はく、

若有不受持五戒之者。不得名爲大乘人。也不受五戒。爲護正法。乃名大乘。護正法者。應當執持刀劍器仗。雖持刀杖。我說。是等名曰持戒。

又云はく

善男子。過去之世。於此拘尸那城。有佛出世。號歡喜增益如來。佛涅槃後。正法住世無量億歲。餘四十年佛法末。爾時有一持戒比丘。名曰覺德。爾時多有破戒比丘。聞作是說。皆生惡心。執持刀杖。逼是法師。是時國王名曰有德。聞是事。已爲護法。故即便往。至說法者所。與是破戒諸惡比丘。極共戰鬥。爾時說法者得免。巨害。

王於爾時。身被刀劍鋒槩之瘡。體無完處。如芥子許。爾時覺德尋讚王言。善哉善哉。王今真是護正法者。當來之世。此身當爲無量法器。王於是時得聞法已。心大歡喜。尋即命終。生阿閼佛國。而爲彼佛作第一弟子。其王將從人民眷屬有戰鬪者。有歡喜者。一切不退。菩提之心。命終悉生阿閼佛國。覺德比丘。後壽終亦得往生阿閼佛國。而爲彼佛作聲聞衆中第二弟子。若有正法欲盡時。應當如是受持擁護。迦葉。爾時王者。則我身是。說法比丘。迦葉。佛是。迦葉護正法者。得如是等無量果報。以是因緣。我於今日。得種種相。以自莊嚴。成法身不可壞身。佛告迦葉。菩薩。是故護法。優婆塞等。應執持刀杖。擁護如是。善男子。我涅槃後。濁惡之世。國土荒亂。互相抄掠。人民飢餓。爾時多有爲飢餓故。發心出家。如是之人。名爲禿人。是禿人。輩見護持正法。驅逐令出。若殺若害。是故我今聽持戒人。依諸白衣持刀杖者。以爲伴侶。雖持刀杖。我說。是等名曰持戒。雖持刀杖。不應斷命。

法華經に云はく

若人不信毀謗此經。即斷一切世間佛種。乃至其人。命終入阿鼻獄。上。經文顯然たり。私の詞何ぞ加へん。凡て法華經の如くんば。大乘經典を謗る者は、



供一五逆を犯せる者の供養  
施一法をそしる者の布施

遺體一佛滅後の形體  
外一國外といふに同じ  
釋迦の手指云云  
一釋迦の佛像を改めて彌陀像に造り直すこと

無量の五逆に勝れたり。故に、阿鼻大城に墮ちて、永く出づる期無けん。涅槃經の如く  
んば、設ひ、五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は、必ず、三惡  
道に落つ。謗法を禁むる者は、定めて、不退の位に登らん。所謂、覺徳とは、これ迦  
葉佛なり。有徳とは、則ち、釋迦文なり。法華、涅槃の經教は、一代五時の肝心にして、  
其の禁實に重し。誰か歸仰せざらんや。而るに謗法の族正道の人を忘れ、剩へ、法然  
の選擇に依りて、彌愚癡の盲瞽を増す。是を以て或は彼の遺體を忍びて、木畫の像に  
露はし、或はその妄語を信じて、莠言を模に彫り、之を海内に弘め、之を塚外に翫ぶ。  
仰ぐ所は則ち、その家風にして、施す所は則ちその門弟なり。然る間、或は、釋迦の手  
指を切りて、彌陀の印相を結び、或は、東方如來の鴈字を改めて、西土教主の鵝王を居  
ゑ、或は、四百餘回の如法經を止めて、西方淨土の三部經となし、或は、天台大師の講  
を停めて、善導の講となす。此の如き群類、それ誠に盡し難し。是破佛にあらすや、是  
破僧にあらすや。この邪義は則ち、選擇に依るなり。嗟呼悲しいかな、如來誠諦の禁言  
に背くこと。哀れなり、愚侶、迷惑の麤語に隨ふこと。早く天下の靜謐を思はど、須く  
國中の謗法を斷つべしと。

打辱一打ちはづかしめ  
其の父一佛をさす  
後昆一後代に同じ

客の曰はく、若し、謗法の輩を斷し、若し佛禁の違を絶たんには、彼の經文の如く、斬  
罪を行ふべきか。若し然らば、殺害相加へ、罪業何かせんや。則ち大集經に云はく、  
剃頭著袈裟持戒及毀戒。天人可供養彼。則爲供養。我。是我子。若有搗打彼。  
則爲打我子。若罵辱彼。則爲毀辱。我。  
料り知りぬ、善惡を論せず、是非を擇ぶ無く僧侶たるに於いては、供養を展ぶべし。何  
ぞ其の子を打辱して、忝くも其の父を悲哀せしめん。彼の竹杖の目連尊者を害せしや、  
永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺ししや、久しく阿鼻の焰に咽ぶ。先證  
これ明にして、後昆最も恐あり。謗法を誡むるに似て、既に、禁言を破る。此の事信じ  
難し。如何でか意を得む。  
主人曰はく、客明に經文を見て、猶ほ、斯の言を成す。心の及ばざるか、理の通ぜざる  
か。全く佛子を禁むるに非ずして、唯偏に謗法を惡むなり。それ、釋迦の以前の佛教は、  
其の罪を斬ると雖も、能く之を忍ぶ。以後の經説は則ちその施を止む。然れば則ち、四  
海の萬邦、一切の四衆、その惡に施さず、此の善に歸さば、何なる難か並び起り、何な  
る災か競ひ來らんと。



席を避け一窓入りて謙遜する體

一闍提の施一不信者に布施すること  
白浪、綠林一共に盜賊の異名こくは異信者をさす  
蘭室一善香の室に入れば自ら香を得ること  
麻畝一麻の直き間に植ゑらるれば遂も直く育つこと

客則ち席を避け、襟を刷ひて曰はく、佛教は斯區々にして、旨趣窮め難く、不審多端にして、理非明かならず。但し、法然上人の選擇現在するや、諸佛、諸經、諸菩薩、諸天等を以て、捨閑閣抛を載す。其の文顯然なり。茲に因りて、聖人國を去り、善人所を捨て、天下飢渴し、世上疫病すと。今主人、廣く經文を引きて、明に、理非を示す。故に、妄執既に翻り、耳目數朗かなり。所詮、國土泰平、天下安穩は、一人より、萬民に至るまで、好む所なり、樂ふ所なり。早く、一闍提の施を止め、永く衆の、僧尼の供を致し、佛海の白浪を收め、法山の綠林を截らば、世は義農の世と成り、國は唐虞の國と爲らん。然して後、法水の深淺を斟酌し、佛家の棟梁を崇重せんと。主人悦びて曰はく、鳩化して鷹と爲り、雀變じて蛤と爲る。悦しいかな、汝、蘭室の友に交り、麻畝の性となる。誠に、その難を顧みて、専ら此の言を信せば、風和ぎ、浪靜にして、不日に豊年ならんのみ。但し、人の心は晴に隨つて移り、物の性は、境に依つて改る。譬へば水中の月の、波に動き、陣前の軍の、劍に靡くが猶し。汝、當座に信すと雖も、後定めて永く忘れん。若し、先づ、國土を安んじて、現當を祈らんと欲せば、速に、情慮を回し、念ぎて對治を加へよ。所以は何に。藥師經の、七難の内、五難忽ちに起り、二難猶

有爲一まよひ

四表一四方

ほ残り。所以佗國の侵逼の難は、自國の叛逆の難なり。大集經の、三災の内、二災早く顯れ、一災未だ起らず。所以兵革の災なり。金光明經の内、種々の災禍一々起ると雖も、佗方の怨賊、國內を侵掠する此の災未だ露れず、此の難未だ來らず。仁王經の七難の内、六難今盛にして、一難未だ現れず。所以四方の賊來りて、國を侵すの難なり。加之、國土亂れん時は、先づ鬼神亂る、鬼神亂るとが故に、萬民亂ると。今この文に就きて、具に事の情を案するに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡ぶ。先難是明なり、後災何ぞ疑はん。若し、殘る所の難、惡法の科に依りて、並び起り競ひ來らば、その時何にか爲んや。帝王は國家を基として、天を治め、人臣は田園を領して、世上を保つ。而るに、佗方の賊來りて、其の國を侵逼し、自界叛逆して、其の地を掠領せば、豈驚かざらんや、騒がざらんや。國を失ひ、家を滅せば、何の所に世を遁れん。汝、須らく一身の安堵を思はど、先づ四表の靜謐を禱るべきか。就中、人の世に在るや、各後生を忘る。是を以て、或は、邪教を信じ、或は、謗法を貴ぶ。各、是非に迷ふことを惡むと雖も、猶ほ佛法に歸することを哀む。何ぞ同じく、信心の力を以て、妄りに、邪義の詞を宗めんや。若し、執心翻らず、亦、曲意猶ほ存せば、早く有爲の郷を辭して、必



ず、無間の獄に墮ちなん。所以は、何に。大集經に云はく、  
 若有國王。於無量世。修施戒慧。見我法滅。捨不擁護。如是所種無量善根。悉皆  
 滅失。乃至其王不。久當遇重病。壽終之後。生大地獄。如王夫人太子大臣城主柱師郡  
 主宰官亦復如。是。

仁王經に云はく、

人壞佛教。無復孝子。六親不和。天龍不祐。疾疫鬼日來侵害。災怪首尾。連禍縱橫。死入地  
 獄。餓鬼畜生。若出爲人。兵奴果報。如響如影。如人夜書。火滅字存。三界果報亦復如是。

法華經第二に云はく、

若人不信。毀謗此經。乃至其人命終。入阿鼻獄。

同第七卷不輕品に云はく、

千劫於阿鼻地獄。受大苦惱。

涅槃經に云はく、

遠離善友。不聞正法。住惡法者。是因緣故。沈沒在於阿鼻地獄。所受身形縱橫八  
 萬四千由延。

重んず—重きも  
 のと見る、思し  
 き方に云ふなり  
 盛焰—無間地獄  
 の火をさす  
 佛國、寶の土—  
 共に淨土といふ  
 に同じ

廣く、衆經を披きたるに、専ら、謗法を重んず。悲しいかな、皆正法の門を出でて、深  
 く邪法の獄に入る。愚なるかな、各惡教の網に懸りて、眞に謗教の網に纏る。これ、朦  
 霧の迷、彼の盛焰の底に沈む。豈に愁へざらんや。豈に苦しからざらんや。汝早く、信  
 仰の心を改めて、速に、實乗の一善に歸せよ。然らば、則ち三界は皆佛國なり。佛國  
 それ衰へんや。十方は悉く寶の土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微無く、土に破壞  
 無くんば、身は是安全にして、心はこれ禪定ならん。此の詞、此の言、信す可く崇む可  
 しと。

客の日はく、今生、後生、誰か慎まざらん、誰か恐れざらん。此の經文を披きて、具に  
 佛語を承るに、誹謗の科至つて重く、毀法の罪誠に深し。我一佛を信じて、諸佛を抛ち、  
 三部經を仰ぎて、諸經を閑きしは、是私曲の思にあらずして、則ち、先達の詞に隨ひし  
 なり。十方の諸人も亦復是の如くなるべし。今世には、性心を勞し、來生には、阿鼻に  
 墮ちんこと、文明かに、理詳かなり。疑ふべからず。彌貴公の慈誨を仰ぎて、益  
 愚客の癡心を開き、速かに、對治を回して、早く泰平を致し、先づ生前を安んじ、更に、  
 没後を扶けん。唯我信するのみにあらず、又、佗の誤を誡めん耳と。



勘文一自己の考へたる文をさす

文應元年、「大歳庚申」之を勘ふ。正嘉より、これを始め、文應元年に勘へ畢る。いぬる正嘉元年「大歳丁巳」八月三日戌亥の尅の大地震を見て、これを勘ふ。その後、文應元年「大歳庚申」七月十六日を以て、宿谷禪門に付きて、最明寺入道殿に獻じ奉れり。その後文永元年「大歳甲子」七月五日大明星の時、いよく、この災の根源を知る。文應元年「大歳庚申」より、文永五年「大歳戊辰」後の正月十八日に至るまで九箇年を経て、西方大蒙國より、わが朝を襲ふべきの由、牒狀これを渡す。又同六年重ねて、牒狀これを渡す。すでに、勘文これに叶ふ。これに準じて。これを思ふに、未來亦しかるべきか。この書は徴ある文なり。これ偏に、日蓮の力にあらすして、法華經の眞文、聖の感應する所か。

文永六年「大歳己巳」十二月八日、これを寫す。(原漢文)

### 四 恩 鈔

能忍一釋迦牟尼を能仁とも能忍ともいふ

沙門一梵語、出家のこと  
習氣一前世の習慣の餘波のこと

抑此の流罪の身になりて候ふにつけて二つの大事あり。一には大なる悦あり。其の故は。此の世界をば娑婆と名づく。娑婆と申すは忍と申す事也。故に佛をば能忍と名づけたてまつる。此の娑婆世界の内に百億の須彌山百億の日月百億の四州あり。其の中の中央の須彌山日月四州に佛は世に出でまします。此の日本國は其の佛の世に出でまします國よりは丑寅の角にあたりたる小島也。此の娑婆世界より外の十方の國土は皆淨土にて候へば、人の心もやはらかに、賢聖を語り惡む事も候はず。此の國土は十方の淨土に捨て果てられて候ふ十惡五逆、誹謗賢聖、不孝父母、不敬沙門等の科の衆生が、三惡道に墮ちて無量劫を経て還りて此の世に生れて候が、先生の惡業の習氣失せずして、やともすれば十惡五逆を作り、賢聖を語り、父母に孝せず、沙門をも敬はず候ふ也。故に釋迦如來世に出でましますしかば、或は毒藥を食に雜へて奉り、或は刀杖惡象師子惡牛惡狗等の方便を以て害し奉らんとし、或は女人を犯すと云ひ、或は卑賤の者或は殺生の者と



行合—ほどこしの物

第六天—下より數へて第六番目の天上界  
魔王—第六天に居る天魔の王  
まらせまの料—まらせまの料  
爲  
三善道の業—阿修羅、人間、天上に生るゝ行爲の業

獨尊—佛のこと

云ひ、或は行合奉る時は面を覆うて眼に見奉らじとし、或は戸を閉ぢ窓を塞ぎ、或は國王大臣の諸人に向つては邪見の者也高き人を罵る者など申せし也。大集經涅槃經等に見えたり。させる失も佛にはおはしまさざりしかども、只此の國の僻偏として惡業の衆生が生れ集りて候ふうへ、第六天の魔王が此の國の衆生を佗の淨土へ出さじとたばかりを成して、かく、事にふれて僻める事をなす也。此のたばかりも詮する所は佛に法華經を説せまるらせじ料と見えて候ふ。其の故は魔王の習として三惡道の業を作る者をば悦び、三善道の業を作る者をばなげく。又三善道の業を作る者をば甚うなげかず、三乘とやらんとする者をば痛うなげく。又三乘となる者をばいたう嘆かず、佛となる業をなす者は強になげき、事にふれて障をなす。法華經は一文一句なれども耳にふるゝ者は既に佛になるべきと思ひて、いたう第六天の魔王もなげき思ふ故に、方便を回して留難をなし、經を信する心を捨てしめんとたばかる。而るに佛の在世の時は濁世なりといへども、五濁の始たりし上、佛の御力をも恐れ、人の貪瞋癡邪見も強盛ならざりし時だにも、竹杖外道は神通第一の目連尊者を殺し、阿闍世王は惡象を放ちて三界の獨尊を威し奉り、提婆達多是證果の阿羅漢蓮華比丘尼を害し、瞿伽利尊者は智慧第一の舍利弗に惡名を立

てき。何に況世漸く五濁の盛になりて候ふをや。況世末代に入りて法華經を苟にも信ぜん者の、人にそねみ妬まれん事は夥しかるべきか。故に法華經に云はく、如來現在猶多怨嫉。況滅度後云云。

始に此の文を見候ひし時はさしもやと思ひ候ひしに、今こそ佛の御言は違はざりけるものかなと、殊に身に當て思ひ知られて候へ。日蓮は身に戒行なく心に三毒を離れざれども、此の御經を若や我も信を取り人にも縁を結ばしむるかと思ひて、隨分世間の事穩ならんと思ひき。世末になりて候へば妻子を帶して候ふ比丘も、人の歸依をうけ、魚鳥を服する僧もさてこそ候ふか。日蓮はさせる妻子をも帶せず、魚鳥をも服せず。只法華經を弘めんとする失によりて、妻子を帶せずして犯僧の名四海に滿ち、螻蟻をも殺さざれども惡名一天に彌れり。恐らくは在世に釋尊を諸の外道が毀り奉りしに似たり。是偏に法華經を信する事の、餘人よりも少し經文の如く信をも向けたる故に、惡鬼其の身に入りて、そねみをなすかと覺え候へば、是程の卑賤無智無戒の者の、二千餘年已前に説かれて候ふ法華經の文に乗せられて、留難に値ふべしと佛記し置かれまらせて候ふ事のうれしさ、申し盡し難く候ふ。此の身に學文つかまつりし事やうやく二十四五年にまか

さてこそ候ふ—斯くの如き有様にあり  
螻蟻—虫けち、あり



行住坐臥—ある  
く時、立止る時、  
坐し居る時、寐  
て居る時、これ  
を四威儀といふ

止事なく—貴し  
といふこと

りなる也。法華經を殊に信じまらせ候し事はわづかに此の六七年よりこのかた也。又  
信じて候ひしかども懈怠の身たる上、或は學文と云ひ或は世間の事に障えられて、一日  
にわづかに一卷一品題目計也。去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで二百四  
十餘日の程は、晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候ふ。其の故は法華經の故にかよ  
る身となりて候へば、行住坐臥に法華經を讀み行するにてこそ候へ。人間に生を受けて  
是程の悦は何事か候ふべき。凡夫の習我と勵みて菩提心を發して後生を願ふといへども、  
自ら思ひ出し十二時の間に一時二時こそは勵み候へ。是は思ひ出さぬにも御經をよみ、  
讀まざるにも法華經を行するにて候か。無量劫の間六道四生を輪回し候ひけるには、或  
は謀叛を起し強盜夜打等の罪にてこそ、國主より禁をも蒙り流罪死罪にも行はれ候ふら  
め。是は法華經を弘むるかと思ふ心の強盛なりしに依りて、惡業の衆生に讒言せられて  
かよる身になりて候へば、定めて後生の勤にはなりなんと覺え候ふ。是程の心ならぬ晝  
夜十二時の法華經の持經者は、末代には有りがたくこそ候ふらめ。又止事なくめでき事  
に侍り。無量劫の間六道に回り候ひけるには、多くの國主に生れ値ひ奉りて或は寵愛の  
大臣關白等ともなり候ひけん。若爾らば國を給はり財寶官祿の恩を蒙りけるか。法華經

惡律儀—惡道を  
行ふもの  
四衆—佛弟子の  
四類。比丘、比丘  
尼、優婆塞、優婆  
塞  
三光—日光、月  
光、星光

流布の國主に値ひ奉り其の國にて法華經の御名を聞きて修行し、是を行じて讒言を蒙り  
流罪に行はれまらせて候ふ國主には未だ値ひまらせ候はぬ歟。法華經に云はく、  
是法華經。於無量國中。乃至名字不可得聞。何況得見。受持讀誦。云云。  
されば此の讒言の人。國主こそ我が身には恩深き人におはしまし候ふらめ、佛法を習ふ  
身には必ず四恩を報すべきに候か。四恩とは心地觀經に云はく、一には一切衆生の恩。一  
切衆生なくば衆生無邊誓願度の願を發し難し。又惡人無くして菩薩に留難をなさずば、  
いかでか功德をば增長せしめ候ふべき。二には父母の恩。六道に生を受くるに必ず父母  
あり。其の中に或は殺盜惡律儀謗法の家に生れぬれば、我と其の科を犯さざれども其の  
業を成就す。然るに今生の父母は我を生みて法華經を信する身となせり。梵天帝釋四大  
天王轉輪聖王の家に生れて、三界四天を讓られて人天四衆に恭敬せられんよりも、恩重  
きは今の某が父母なる歟。三には國王の恩。天の三光に身をあたため、地の五穀に神  
を養ふこと皆是國王の恩也。其の上今度法華經を信じ今度生死を離るべき國主に値ひ奉  
れり。争か少分の怨に依りて愚に思ひ奉るべきや。四には三寶の恩。釋迦如來無量劫の  
間菩薩の行を立て給ひし時、一切の福德を集めて六十四分となして功德を身に得給へり。



六親—父母、妻  
子、兄弟

果地—さとり  
の地位

其の一分をば我が身に用ひ給ふ。今六十三分をば此の世界に留め置きて、五濁雜亂の時、非法の盛ならん時、謗法の者國に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、日月光を失ひ、天龍雨をくださず、地神地味を減ぜん時、草木根莖枝葉華菓藥等の七味も失せん時、十善の國王も貪瞋癡をまし、父母六親に孝せず親しからざらん時、我が弟子無智無戒にして髪ばかりを剃りて守護神にも捨てられて、活命の計なからん比丘比丘尼の命の支とせんと誓ひ給へり。又果地の三分の功德二分をば我が身に用ひ給ひ、佛の壽命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、殘る所の四十年の壽命を留め置きて我等に與へ給ふ恩をば、四大海の水を硯の水とし、一切の草木を燒きて墨となして、一切の獸の毛を筆とし、十方世界の大地を紙と定めて注し置くとも、争か佛の恩を報じ奉るべき。法の恩を申さば、法は諸佛の師也。諸佛の貴き事は法に依る。されば佛恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報すべし。次に僧の恩はいはゞ、佛寶法寶は必ず僧によて住す。譬へば薪なければ火無く大地無ければ草木生すべからず。佛法有りといへども僧有りて習ひ傳へずんば、正法像法二千年過ぎて末法へも傳はるべからず。故に大集經に云はく、五箇の五百歳の後に、無智無戒なる沙門を失あり

凡夫—迷を離れぬもの、男女に通ず

と云ひて是を惱すは、此の人佛法の大燈明を滅せんと思へと説かれたり。然れば僧の恩を報じ難し。されば三寶の恩を報じ給ふべし。古の聖人は雪山童子、常啼菩薩、藥王大士、普明王等、此等は皆我が身を鬼の打飼となし、身の血髓をうり、臂を燒き、頭を捨て給ひき。然るに末代の凡夫三寶の恩を蒙りて三寶の恩を報ぜず。いかにしてか佛道を成ぜん。然るに心地觀經、梵網經等には、佛法を學し圓頓の戒を受けん人は必ず四恩を報すべしと見えたり。某は愚癡の凡夫血肉の身也。三惑一分も斷ぜず。只法華經の故に罵詈毀謗せられて、刀杖を加へられ流罪せられたるを以て、大聖の臂を燒き髓をくだき頭をはねられたるに擬へんと思ふ。是一つの悦なり。第二に大なる歎と申すは、法華經第四に云はく、

若有惡人。以不善心。於一劫中。現於佛前。常毀罵佛。其罪尙輕。若人以一惡言。毀皆在家出家讀誦法華經者。其罪甚重等云云。

此等の經文を見るに信心を起し、身より汗を流し兩眼より涙を流す事雨の如し。我一人此の國に生れて多くの人をして一生の業を造らしむる事を歎く。彼不輕菩薩を打擲せし人、現身に改悔の心を起せしだにも、猶罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮ちぬ。今我に



怨を結べる輩は未だ一分も悔る心も起さず。是體の人の受くる業報を大集經に説いて云はく、若人あつて千萬億の佛の所にして佛身より血を出さん。意に於て如何。此の人の罪をうる事寧多しとせんや否や、大梵王言さく、若人只一佛の身より血を出さん無間の罪尙多し。無量にして算をおきても數をしらず。阿鼻大地獄の中に墮ちん。何に況や萬億の佛身より血を出さん者を見んをや。終によく廣く彼の人の罪業果報を説く事ある事なからん。但し如來をば除き奉る。佛の言はく大梵王若し我が爲に髮をそり袈裟をかけ片時も禁戒を受けず缺犯を受けん者を、なやまし、罵り、杖をもて打ちなんどする事有らば、罪を得る事彼よりは多し。

弘長二年壬戌正月十六日

日蓮花押

工藤左近尉殿

### 顯謗法鈔

本朝沙門日蓮撰

第一に八大地獄の因果を明し、第二に無間地獄の因果の輕重を明し、第三に問答料簡を明し、第四に行者弘經の用心を明す。

等活—八大地獄  
中の最も罪苦輕  
き所

第一に八大地獄の因果を明さば、第一に等活地獄とは、此の閻浮提の地の下一千由旬にあり。此の地獄は縱廣齊等にして一萬由旬なり。此の中の罪人は互に害心をいだく。若たまかく相見れば犬と猿との逢るがごとし。各鐵の爪をもて互につかみさく。血肉既に盡きぬれば唯骨のみあり。或は獄卒手に鐵杖を取りて頭より足にいたるまで皆打ち碎く。身體くだけて沙のごとし。或は利刀をもて分々に肉をさく。然れども又蘇生々々するなり。此の地獄の壽命は人間の晝夜五十年をもて第一四王天の一日一夜として四王天の天人の壽命の五百歳なり。四王天の五百歳を此の等活地獄の一日一夜として其の壽命五百歳なり。此の地獄の業因をいはず、ものの命を斷つもの、此の地獄に墮つ。螻蛄蚊蠅等の小蟲を殺せる者も、懺悔なければ必ず此の地獄に墮つべし。譬へば、鍼なれども



持律戒律をよく持ち守ること

水の上におけば沈まざることもなきが如し。又懺悔すれども懺悔の後に重ねて此の罪を作れば、後の懺悔には此の罪消えがたし。譬へば、盗をして獄に入りぬるものの、しばらく経て後に御免を蒙りて獄を出づれども、又重ねて盗をして獄に入りぬれば、出でゆるされがたきが如し。されば當世の日本國の人は上一人より下萬民に至るまで、此の地獄をまぬがる人は一人もありがたかるべし。何に持戒の覺を取れる持律の僧たりとも、蟻虱などを殺さず、蚊蟲をあやまたざるべきか。況や其の外山野の鳥鹿江海の魚鱗を日々に殺すものをや。何に況や牛馬人等を殺す者をや。

第二に黒繩地獄とは等活地獄の下にあり。縦廣は等活地獄の如し。獄卒罪人をとらへて熱鐵の地に伏せて、熱鐵の繩をもて身にすみうち、熱鐵の斧をもて繩に随つて斬りさきけづる。又鋸を以てひく。又左右に大なる鐵の山あり。山の上に鐵の幢を立て、鐵の繩を張り、罪人に鐵の山を負せて繩の上よりわたす。繩より落てくだけ、或は鐵の鏝に墮し入れて煮らる。此の苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり。人間の一百歳は第二の忉利天の一日一夜也。其の壽一千歳なり。此の天の壽一千歳を一日一夜として、此の第二の地獄の壽命一千歳なり。殺生の上に偷盜とて、盜をかさねたるもの、此の地獄に

墮つ。當世の偷盜のもの、ものをぬすむ上、物の主を殺すもの此の地獄に墮つべし。

第三に衆合地獄とは、黒繩地獄の下にあり。縦廣は上の如し。多くの鐵の山二つづよに相向へり。牛頭馬頭等の獄卒手に棒を取つて罪人を駈て山の間に入らしむ。此の時兩の山迫り來りて合せ押す。身體くだけて血流れて地にみつ。又種々の苦あり。人間の二百歳を第三の夜摩天の一日一夜として、此の天の壽二千歳なり。此の天の壽を一日一夜として此の地獄の壽命二千歳なり。殺生偷盜の罪の上に邪姪とて佗人の妻を犯す者此の地獄の中に墮つべし。而るに當世の僧尼士女、多分は此の罪を犯す。殊に僧にこの罪多し。士女は各々互に貪り又人目をつまざる故に此の罪を犯さず。僧は一人ある故に淫欲乏しきところに、若有身れば父糾されあらはれぬべき故に、獨ある女人をおかさず、もしや隠ると佗人の妻をうかどひ、ふかく隠れんと思ふなり。當世のほか、貴とけなる僧の中に、ことに此の罪又多くあるらんと覺ゆ。されば多分は當世貴けなる僧此の地獄に墮つべし。

第四に叫喚地獄とは、衆合の下にあり。從廣前に同じ。獄卒惡聲出して弓箭をもて罪人を射る。又鐵の棒を以て頭を打ちて熱鐵の地を走らしむ。或は熱鐵の煎架に打返しうち



大論—大智度論  
百卷、龍樹菩薩  
の作  
五百生—五百度  
生れかゝる間

相—すがた、有  
機  
化樂天—都率天  
の上の空中に住  
する天界

かへし、此の罪人を炙る。或は口を開けて湧ける銅の湯を入るれば、五臓やけて下より直に出づ。壽命をいはず人間の四百歳を第四の都率天の一日一夜とす。又都率天の四千歳也。都率天の四千歳の壽を一日一夜として此の地獄の壽命四千歳なり。此の地獄の業因をいはず、殺生、偷盜、邪淫の上に飲酒とて酒のむもの此の地獄に墮つべし。當世の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆の大酒なる者、此の地獄の苦免れがたきか。大論には、酒に三十六の失を出し、梵網經には酒盃をすよめる者五百生に手なき身と生ると説かせ給ふ。人師の釋には蚯蚓體の者となると見えたり。況や酒を酤りて人に與へたる者をや。何に況や酒に水を入れてうるものをや。當世の在家の人々この地獄の苦まぬがれがたし。

第五に大叫喚地獄とは叫喚の下にあり。縱廣前に同じ。其の苦の相は、上の四の地獄の諸の苦に十倍して重くこれを受く。壽命の長短を云はず、人間の八百歳は第五の化樂天の一日一夜なり。此の天の壽八千歳なり。此の天の八千歳を一日一夜として此の地獄の壽命八千歳なり。殺生、偷盜、邪淫、飲酒の重罪の上に妄語とて虚言せる者此の地獄に墮つべし。當世の諸人は設ひ賢人上人などいはると人々も、妄語せざる時はありとも、妄語をせ

雪の如し—今の  
火の非常に執苦  
なるに對すれば  
前のものは心易  
きを譬へたるも

業因—其處に生  
れ行く因となる  
行爲

ざる日はあるべからず。設ひ日はありとも月はあるべからず。設ひ月はありとも年はあるべからず。設ひ年はありとも一期生妄語せざる者はあるべからず。若しからば、當世の諸人一人もこの地獄をまぬがれがたきか。

第六に焦熱地獄とは、大叫喚地獄の下にあり。縱廣前におなじ。此の地獄に種々の苦あり。若此の地獄の豆計の火を閻浮提に置けらんに、一時にやけ盡きなん。況や罪人の身の契なること綿のごとくなるをや。此の地獄の人は、前の五つの地獄の火を見る事雪の如し。譬へば人間の火の薪の火よりも、鐵銅の火の熱きが如し。壽命の長短は人間の千六百歳を、第六化天の一日一夜として、此の天の壽、千六百歳也。此の天の千六百歳を一日一夜として此の地獄の壽命一千六百歳なり。業因を云はず、殺生、偷盜、邪淫、飲酒、妄語の上、邪見とて、因果なしといふ者此の中に墮つべし。邪見とは、有人の云はく、人飢ゑて死ぬれば天に生るべし等と云々。總じて因果を知らぬ者を邪見と申すなり。世間の法には慈悲なき者を邪見の者といふ。當世の人々此の地獄を免かれがたきか。第七に大焦熱地獄とは、焦熱の下にあり。縱廣前の如し。前の六つの地獄の一切の諸苦に十倍して重く受くるなり。其の壽命は半中劫なり。業因に云はず、殺生、偷盜、邪淫、



淨戒—清く戒律を保つこと

瓜の上の土—極めて小敷なる譬

さへづる—饒舌することをいふ

善根—善い行

飲酒、妄語、邪見の上に淨戒の比丘尼を犯せるもの、此の中に墮つべし。又比丘、酒をもて不邪淫戒を持てる婦女をたほらかし、或は財物をあたへて犯せるもの、此の中に墮つべし。當世の僧の中に多く此の重罪あるなり。大悲經の文に、末代には士女は多くは天に生じ、僧尼は多くは地獄に墮つべしと説かれたるはこれ體の事か。心あらん人々は愧づべしはづべし。總じて上の七大地獄の業因は、諸經論をもて勘へ當世日本國の四衆にあて見るに、此の七大地獄を離るべき人を見ず、又きかず。涅槃經に云はく、末代に入りて、人間に生ぜん者は瓜上の土の如し、三惡道に墮つるもるは十方世界の微塵の如しと説かれたり。若爾らば我等が父母兄弟等の死ぬる人は皆上の七大地獄にこそ墮ち給ひては候ふらめ。あさましとも云ふばかりなし。龍と蛇と鬼神と佛菩薩聖人をば未だ見ず、たゞ音にのみこれを聞く。當世に上の七大地獄の業を造らざるものをば未だ見ず、又音にもきかず。而るに我が身よりはじめて一切衆生七大地獄に墮つべしと思へる者一人もなし。設ひ言には墮つべきよしをさへづれども、心には墮つべしとも思はず。又僧尼士女、地獄の業をば犯すとは思へども、或は地藏菩薩等の菩薩を信じ、或は阿彌陀佛等の佛を恃み、或は種々の善根を修したる者もあり。皆思はく、我はかゝる善根を持てればなん

雲泥—差の甚だしき譬  
僻案—誤れる考

別處—八大地獄に附屬したる小地獄あるをいふ

ど、うち思ひて、地獄をも怖ぢず。或は宗宗を習へる人々は、各々の智分をたのみて、又地獄の因を怖ぢず。而るに佛菩薩を信じたるも愛子夫婦などを愛し、父母主君などを敬ふには雲泥なり。佛菩薩等をば軽く思へるなり。されば當世の人々の佛菩薩を恃みぬれば、宗宗を學したれば、地獄の苦はまぬがれなんなど思へるは、僻案にや。心あらん人々は、よくよく慮り思ふべきか。

第八に大阿鼻地獄とは、又は無間地獄と申すなり。欲界の最底、大焦熱地獄の下にあり。此の地獄は縦廣八萬由旬なり。外に七重の鐵の城あり。地獄の極苦は且く之を略す。前の七大地獄並に別處の一切の諸苦を以て一分として、大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり。此の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を見る事、佗化自在天の樂の如し。此の地獄の香の臭さを人嗅ぐならば、四天下欲界六天の天人皆死しなん。されども出山没山と申す山此の地獄の臭き氣を押へて人間へ來らせざるなり。故に此の世界の者死せずと見えぬ。若佛此の地獄の苦を具に説かせ給はゞ人聽きて血を吐いて死すべき故に、委しく佛説き給はずと見えたり。此の無間地獄の壽命の長短は一中劫なり。一中劫と申すは此の人壽無量歲なりしが、百年に一壽を減じ、又百年に一壽を減するほどに、人壽十歳の時に減す



破和合僧出家  
の睡ましき團體  
をかき亂すこと  
相似し似通ひた  
るの意  
率兜婆佛の形  
になぞらひて墓  
等の標に立つる  
もの、木石にて  
造る

るを一滅と申す。又十歳より百年に一壽を増し、又百年に一壽を増する程に、八萬歳に増するを一増と申す。此の一増一滅の程を小劫として、二十の増減を一中劫とは申すなり。此の地獄に墮ちたる者これ程久しく無間地獄に住して大苦をうくるなり。業因を云はど、五逆罪を造る人、此の地獄に墮つべし。五逆罪と申すは、一に殺父、二に殺母、三に殺阿羅漢、四に出佛身血、五に破和合僧なり。今の世には佛まします。しかれば出佛身血あるべからず。和合僧なければ破和合僧なし。阿羅漢なければ殺阿羅漢これなし。但殺父殺母の罪のみありぬべし。しかれども王法のいましめ嚴びしくあるゆゑに、此の罪を犯しがたし。若爾らば當世には阿鼻地獄に墮つべき人すくなし。但し相似の五逆罪これあり。木畫の佛像堂塔等を焼き、かの佛像等の寄進の所を奪ひとり、率兜婆等をきり焼き、智人を殺しなどするもの多し。此等は阿鼻地獄の十六の別處に墮つべし。されば當世の衆生十六の別處に墮つるもの多きか。又謗法の者この地獄に墮つべし。第二に無間地獄の因果の輕重を明さば、問うて云く、五逆罪より外の罪によりて無間地獄に墮つることあるべしや。答へて云はく、誹謗正法の重罪なり。

問うて云はく、證文如何。

答へて云く、法華經第二に云はく、

若人不信誹謗此經、乃至其人命終入阿鼻獄等云云。

此の文に謗法は阿鼻地獄の業と見えたり。

問うて云はく、五逆と謗法と罪の輕重如何。

答へて云はく、小品經に云く、

舍利弗白佛言、世尊五逆罪與破法罪相似、耶、佛告舍利弗、不應言相似、所以者何、若破般若波羅蜜、則爲破十方諸佛一切智一切種智、破佛寶故、破法寶故、破僧寶故、破三寶故、則破世間正見、破世間正見、則得無量無邊阿僧祇罪、得無量無邊阿僧祇憂苦。

又云はく、

破法業因緣集故、無量百千萬億歲、墮大地獄中、此破法人輩、從一大地獄至一大地獄、若劫火起時、至他方大地獄中、如是徧十方、彼間劫火起、故從彼死、破法業因緣未盡、故還來是間大地獄中、等云云。

般若波羅蜜一覺  
に至るべき智慧  
阿僧祇一梵語、  
無數と譯す、

劫火一劫の終  
にこの世界を燒  
滅する火



法華經第七に云はく、

四衆之中、有<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>瞋恚<sub>一</sub>、心不淨者、惡口罵詈言、是无智比丘、或以<sub>二</sub>杖木瓦石<sub>一</sub>、而打<sub>二</sub>擲<sub>一</sub>之。乃至千劫於<sub>二</sub>阿鼻地獄<sub>一</sub>、受<sub>二</sub>大苦惱<sub>一</sub>等云云。

此の經文の心は法華經の行者を惡口し及び杖を以て打擲せるもの、其の後に懺悔せりといへども罪いまだ滅せずして千劫阿鼻地獄に墮ちたりと見えぬ。懺悔せる謗法の罪すら五逆罪に千倍せり。況や懺悔せざらん謗法に於ては、阿鼻地獄を出づる期かたかるべし。故に法華經第二に云はく、

見<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>讀誦書持<sub>一</sub>經者、輕賤憎嫉、而懷<sub>二</sub>結恨<sub>一</sub>、乃至其人命終入<sub>二</sub>阿鼻地<sub>一</sub>、具<sub>二</sub>足<sub>一</sub>一劫、劫盡更生、如是展轉、至<sub>二</sub>無數劫<sub>一</sub>等云云。

第三に問答料簡を明さば、

問うて云はく、五逆罪と謗法罪との輕重は知んぬ。謗法の相貌如何。

答へて云はく、天台智者大師の梵網經の疏に云はく、謗とは背く也等と云々。法に背くが謗法にてはあるか。天親の佛性論に云はく、若憎むは背くなり等と云々。この文の心は正法を人に捨てさするが謗法にてあるなり。

料簡一料理簡擇といふことにて法を問答して研究すること  
疏一註釋

所化一教を受くる人

依經一たより信奉する經文  
所依一依り處とする

雙觀經一所謂淨土門の大無壽經の別名  
乃至十念一僅に念佛を十返唱へたるのみにても直に極樂に生れ得ること

問うて云はく、委細に相貌を知らんと思ふ。あらく示すべし。

答へて云はく、涅槃經第五に云はく、若有<sub>レ</sub>人言、如來無常、云何是人舌不<sub>二</sub>墮落<sub>一</sub>等云云。

此の文の心は佛を無常といはん人は舌墮落すべしと云々。

問うて云はく、諸の小乘經に佛を無常と説かるよ上、又所化の衆皆無常を談じき。若爾らば佛竝に所化の衆の舌墮落すべしや。

答へて云はく、小乘經の佛を小乘經の人が無常と説き談するは舌たどれざるか。大乘經

に向つて佛を無常と談じ、小乘經に對して大乘經を破するが、舌は墮落するか。此をもて思ふに、おのれが依經には隨へども、依經よりすぐれたる經を破するは破法となるか。

若爾らば、設ひ觀經華嚴經等の權大乘經の人々、所依の經の文の如く修行すとも、かの經にすぐれたる經に隨はず、又すぐれざる由を談せば謗法となるべきか。されば觀經

等の經の如く法を得たりとも、觀經等を破せる經の出來したらん時、其の經に隨はずば破法となるべきか。小乘經を以て擬へて心うべし。

問うて云はく、雙觀經等に乃至十念即得往生など説かれて候ふが、彼の經の教の如く十念申して往生すべきを、後の經を以て申しやぶらば謗法にては候ふまじきか。



答へて云はく、佛、觀經等の四十餘年の經經を束ねて未顯眞實と説かせ給ひぬれば、此の經文に隨うて乃至十念即得往生等は實には往生しがたしと申す。此の經文なくば謗法となるべし。

決定性—二乗と定りて進歩せざる性  
永不成佛—何時までも眞の佛にはなれずとの意  
九品往生—極樂の階級に九品あるその處に往き生るること

前四味—五味の中より最上の醍醐味を除きたるもの、法華經以前の諸經に譬ふ

問うて云はく、或人云はく、無量義經の四十餘年未顯眞實の文は、あへて四十餘年の一切の經經並に文々句々を皆未顯眞實と説き給ふにはあらず。但四十餘年の經經に處々に決定性の二乗を永不成佛と嫌はせ給ひ、釋迦如來を始成正覺と説き給ひしを、其の言ばかりを指して未顯眞實とは申すなり。敢て餘事にはあらず。而るをみだりに四十餘年の文を見て、觀經等の凡夫のために九品往生などを説きたるを、妄りに往生はなき事なりなどと押し申す。あに恐しき、謗法の者にあらずやなんと申すはいかに。  
答へて云はく、此の料簡は東土の得一が料簡に似たり。得一が云はく、未顯眞實とは決定性の二乗を、佛、爾前の經にして永不成佛と説かれしを、未顯眞實とは嫌はるよなり。前四味の一切には互るべからずと申しき。傳教大師は前四味に互りて文々句々に未顯眞實と立て給ひき。さればこの料簡は古の謗法者の料簡に似たり。但し且く汝等が料簡に隨ひて尋ね明らかめん。

但一佛性—人天等の差異はあれど實は通じて皆一様に佛性は具へて居るとのこと

法藏比丘—無量壽經に阿彌陀佛の名として出づる行者を迎へ—念佛の行者を淨土に迎ふることを指す

問ふ、法華已前に二乗作佛を嫌ひけるを今未顯眞實といふとならば、先づ決定性の二乗を佛の永不成佛と説かせ給ひし處々の經文ばかりは、未顯眞實の佛の妄語なりと承伏せさせ給ふか。さては佛の妄語は勿論なり。若爾らば妄語の人の申すことは有無共に用ひぬ事にてあるぞかし。決定性の二乗永不成佛の語ばかり妄語となり、若餘の菩薩凡夫の往生成佛等は實語となるべきならば、信用しがたき事なり。譬へば東方を西方と妄語し申さん人は、西方を東方と申すべし。二乗を永不成佛と説く佛は、餘の菩薩の成佛をゆるすも又妄語にあらずや。五乗は但一佛性なり。二乗の佛性をかくし、菩薩凡夫の佛性をあらはすは、返て菩薩凡夫の佛性をかくすなり。或人云はく、四十餘年未顯眞實とは、成佛の道ばかり未顯眞實なり。往生等は未顯眞實にはあらず。又難じて云はく、四十餘年が間の説の成佛を未顯眞實と承伏せさせ給はば、雙觀經に云ふ、「不取正覺成佛已來凡歷十劫」等の文は、未顯眞實と承伏せさせ給ふか。若爾らば四十餘年の經經にして法藏比丘の阿彌陀佛になり給はずば、法藏比丘の成佛すでに妄語なり。若成佛妄語ならば何の佛か行者を迎へ給ふべきや。又かれ、此の難を通じて云はん。四十餘年が間は成佛はなし。阿彌陀佛は今の成佛にはあらず、過去の成佛なり等と云々。今難じて云はく、



今日の四十餘年の經經にして實の凡夫の成佛を許されずば、過去遠々劫の四十餘年の權經にても、成佛叶ひがたきか。三世の諸佛の説法の儀式皆同じきが故也。或は云はく「不得疾成無上菩提」と説かるれば、四十餘年の經經にては疾くこそ佛にはならねども、遅く劫を経ては、成るか。難じて云はく、次下の大莊嚴菩薩等の領解に云はく、

過不可思議無量無邊阿僧祇劫終不得成無上菩提等云云。

此の文の如くならば劫を経て爾前の經計りにては成佛はかたきか。或は云ふ、華嚴宗の料簡に云はく、四十餘年の内には華嚴經計りは入るべからず。華嚴經にすでに往生成佛あり。なんぞ華嚴經を行じて往生成佛を遂げざらん。

答へて云はく、四十餘年の内に華嚴經入るべからずとは華嚴宗の人師の義也。無量義經には正しく四十餘年の内に華嚴海空と名目を呼び出して、四十餘年の内に計へ入れられたり。人師を本とせば佛に背くになりぬ。

問うて云はく、法華經を離れて往生成佛を遂げずば、佛世に出でさせ給ひては、但法華經計りをこそ説き給はめ。なんぞ煩しく四十餘年の經經を説かせ給ふや。

答へて云はく、此の難は佛自ら答へ給へり。

若但讚佛乘、衆生没在苦、破法不信故墜於三惡道等。

の經文これなり。

問うて云はく、いかなれば爾前の經をば衆生謗せざるや。

答へて云はく、爾前の經經は萬差なれども、束ねて此を論すれば、隨佗意と申して、衆生の心を説かれて侍り。故に違する事なし。譬へば水に石をなぐるに争ふことなきがごとし。又しなぐの説教はんべれども、九界の衆生の心を出でず。衆生の心は皆善につけ惡につけて、迷を本とするゆゑに、佛にはならざるか。

問うて云はく、衆生謗すべきゆゑに、佛最初に法華經をとき給はずして、四十餘年の後に法華經を説き給はゞ、汝なんぞ當世に權經をば説かずして、左右なく法華經を説いて人に謗をなさせて惡道に墮すや。

答へて云はく、佛在世には佛菩提樹の下に坐し給ひて機をかゞみ給ふに、當時法華經を説くならば衆生謗じて惡道に墮ちぬべし。四十餘年過ぎて後に説かば、謗せずして初住不退乃至妙覺にのほりぬべしと知見しましたしき。末代濁世には當機にして初住の位に入るべき人は萬に一人もありがたかるべし。又能化の人も佛にあらざれば機をかゞみん

機をかゞみ―聽衆の智の程度を考へて見られしこと  
當機―現在のこゝと、目前に説法を聽く如きをいふ  
能化―教化をなす人

隨佗意―佗の意に隨つての意  
佛が凡夫をそれぞれに適はせて説かれたるをいふ  
九界―十界中より佛界を除きたるもの



當機衆一佛前にて正に説法聽聞する人々

印一手にて種々の形を結び成すもの  
眞言一陀羅尼のこと、之を唱ふる所に不思議の

事もこれかたし。されば逆縁順縁のために先づ法華經を説くべしと佛ゆるし給へり。但し又滅後なりとも當機衆になりぬべきものには、先づ權經を説く事もあるべし。又悲を先とする人は先づ權經を説く。釋迦佛のごとし。慈を先とする人は先づ實經をとくべし。不輕菩薩のごとし。又末代の凡夫は、なにとなくとも惡道を免れんことは難かるべし。同じく惡道に墮つるならば法華經を謗せさせて墮すならば、世間の罪をもて墮ちたるには似るべからず。「聞法生謗墮於地獄勝於供養恆沙佛者等」の文のごとし。此の文の心は法華經を謗じて地獄に墮ちたるは、釋迦佛阿彌陀佛等の恆河沙の佛を供養し歸依渴仰する功德には百千萬倍すぎたりと説かれたり。問うて云はく、上の義のごとくならば、華嚴法相三論眞言淨土等の祖師はみな謗法に墮すべきか。華嚴宗には華嚴經は法華經には雲泥超過せり。法相三論もてかくのごとし。眞言宗には日本國に二の流あり、東寺の眞言は、法華經は華嚴經に劣れり。何に況や大日經に於てをや。天台の眞言には大日經と法華經とは理は齋等なり、印眞言等は超過せりと云々。此等は皆惡道に墮つべしや。答へて云はく、宗をたて經經の勝劣を判するに二の義あり。一は似破、二は能破なり。

力現ずといふ破す一攻撃すること

回心一思ひかへすこと、先に勝れたりと思ひしものを劣れりと思ふに至ること

雙林一沙羅雙樹林のこと、釋尊入滅の所、時

一に似破とは、佗の義は吉と思へども此を破す。かの正義を分明にあらはさんがためか。二に能破とは、實に佗人の義の勝れたるをば辨へずして、迷ひて我が義すぐれたりと思ひて心中よりこれを破するをば能破といふ。されば彼の宗の祖師に似破能破の二の義あるべし。心中には法華經は諸經に勝れたりと思へども、且く違して法華經の義を顯さんと思ひてこれを破する事あり。提婆達多阿闍世王諸の外道が、佛の敵となりて佛德を顯し、後には佛に歸せしがごとし。又實の凡夫が佛の敵となりて惡道に墮つる事これ多し。されば諸宗の祖師の中に回心の筆をかよすば、謗法の者惡道に墮ちたりとしるべし。三論の嘉祥、華嚴の澄觀、法相の慈恩、東寺の弘法等は回心の筆これあるか。よくよく尋ねならふべし。

問うて云はく、まことに今度生死を離れんと思はんに、なにもものをか厭ひなにもものをか願ふべきや。

答ふ、諸の經文には女人等を厭ふべしとみえたれども、雙林最後の涅槃に云はく、菩薩雖見是身無量過患具足充滿、爲欲受持涅槃經故、猶好將護不令乏少。菩薩於惡象等、心無恐怖。於惡知識、生怖畏心。何以故是惡象等、唯能壞身不能



惡縁一惡事をなすたすけ、たよ  
り  
惡知識一誤を教ふる師

結一煩惱のこと  
藏一教を藏めたる經、又その教

壞心。惡知識者。二俱壞故。若惡象者。唯壞一身。惡知識壞無量身。無量善心。爲惡象。殺不至三趣。爲惡友。殺必至三趣。等云云。

此の經文の心は後世を願はん人は一切の惡縁を恐るべし、一切の惡縁よりは惡知識を恐るべしと見えたり。されば大莊嚴佛の末の四の比丘は、自ら惡法を行じて十方の大阿鼻地獄を經るのみならず、六百億人の檀那等をも十方の地獄に墮しぬ。鴛堀摩羅は摩尼跋陀が教に墮つて九百九十九人の指をきり、結句、母竝に佛を害せんと擬す。善星比丘は佛の御子十二部經を受持し、四禪定をえ、欲界の結を斷じたりしかども、苦得外道の法を習うて生身に阿鼻地獄に墮ちぬ。提婆が六萬藏八萬藏を暗じたりしかども、外道の五法を行じて、現に無間に墮ちにき。阿闍世王の父を殺し母を害せんと擬せし、大象を放つて佛を失ひたてまつらんとせしも、惡師提婆が教なり。俱伽利比丘が舍利弗目連をそしりて、生身に阿鼻に墮せし、大族王の五竺の佛法僧を滅せし、大族王の舍弟は加溼彌羅國の王となりて、健駄羅國の率都婆寺塔一千六百所を失ひし、金耳國王の佛法を滅せし、波瑠璃王の九千九十九萬人の人を殺して血ながれて池をなせし、設賞迦王の佛法を滅し、菩提樹をきり、根をほりし、周の宇文王の四千六百餘所の寺院を失ひ、二十六萬六百

震旦一支那のこと、戸那も同じ

月支一月氏ともいふ、西域地方を指す  
紀典博士一儒道の學者  
三宗一成實、俱舍、律を指す  
五宗一三論、法相、華嚴、天台、眞言を指す

一代一釋尊一代の教を指す

餘の僧尼を還俗せしめし、此等は皆惡師を信じ惡鬼其の身に入りし故也。

問うて云く、天竺震旦は外道が佛法をほろほし、小乗が大乗をやぶるとみえたり。此の日本國もしかるべきか。

答へて云はく、月支戸那には外道あり、小乗あり。此の日本國には外道なし、小乗の者なし。紀典博士等これあれども、佛法の敵となるものこれなし。小乗の三宗これあれども、彼の宗を用て生死を離れんと思はず。但大乘を心うる才覺と思へり。但し此の國には大乘の五宗のみこれあり。人々皆思へらく、彼の宗宗にして生死をはなるべしと思ふ故に、諍も多くいできたり。又檀那の歸依も多くあるゆゑに利養の心も深し。

第四に行者佛法を弘むる用心を明さばに、夫佛法をひろめんと思はんものは、必ず五義を存じて正法をひろむべし。五義とは、一には教、二には機、三には時、四には國、五には佛法流布の前後なり。

第一に教とは、如來一代五十年の説教は、大小權實顯密の差別あり。華嚴宗には五教を立て、一代ををさめ、其の中には華嚴法華を最勝とし、華嚴法華の中に華嚴經を以て第一とす。南三北七、竝に華嚴宗の祖師、日本國の東寺の弘法大師此の義なり。法相宗は



三時に一代ををさめ、其の中に深密法華經を一代の聖教に勝れたりとす。深密法華の中、法華經は了義經の中の不了義經、深密經は了義經中の了義經なり。三論宗に又二藏三時を立つ。三時の中の第三中道教とは、般若法華なり。般若法華の中には般若最第一なり。眞言宗には日本國に二の流あり。東寺流は弘法大師十住心を立て、第八法華、第九華嚴第十眞言。法華經は大日經に劣るのみならず、猶華嚴經に下るなり。天台の眞言は慈覺大師等大日經と法華經とは廣略の異。法華經は理祕密、大日經は事理俱密なり。淨土宗には聖道、淨土、難行、易行、難行、正行を立てたり。淨土の三部經より外の法華經等の一切經は難行聖道難行なり。禪宗には二の流あり、一流は一切經一切の宗の深義は禪宗なり。一流は如來一代の聖教は皆言説、如來の口輪の方便なり。禪宗は如來の意密言説に及ばず教外の別傳なり。俱舍宗、成實宗、律宗は小乘宗なり。天竺震旦には小乘宗の者、大乘を破する事これ多し。日本國には其の義なし。問うて云はく諸宗の異義區なり。一一に其の謂ありて得道をなるべきか。又諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか。答へて云はく、異論相違ありといへども皆得道なるか。佛の滅後四百年にあたりて、健

口輪一口のこ  
と、はたちき  
よりに輪といふ

一夏一四月中上  
り七月中に至る  
夏九十日間

馱羅國の迦貳色迦王、佛法を貴み、一夏僧を供し佛法を問ひしに、一一の僧異義多し。此の王不審して云はく、佛説は定めて一ならんと、終に協尊者に問ふ。尊者答へて云はく、金杖を折つて種々の物につくるに、形は別なれども金杖は一なり。形の異なるをば諍ふといへども、金たる事を諍はず。門門不同なれば、入門をば諍へども入理は一なり等と云々。又求那跋摩云はく、

諸論各異端、修行理無一。偏執有是非、達者無違諍。等云云。

眞因一各阿羅漢  
のさとりを得た  
る原因  
護法清辨一兩高  
僧の間の佛教根  
本義につきての  
異見、智光云々  
も同様  
空中一空の説と  
中道の説と

又五百羅漢の眞因各異なれども、同じく聖理を得たり。大論の四悉檀の中の對治悉檀攝論の四意趣の中の衆生意樂意趣。此等は此善を嫌ひ此の善をほむ。檀戒進等、一一にそしり、一一にほむる、皆得道を成す。此等を以てこれを思ふに、護法清辨のあらそひ、智光戒賢の空中、南三北七の頓漸、不定一時二時三時四時五時四宗五宗六宗、天台の五時、華嚴の五教、眞言教の東寺天台の諍、淨土宗の聖道淨土、禪宗の教外教内、入門は差別せりといふとも實理に入る事は但一なるべきか。難じて云はく、華嚴の五教、法相三論の三時、禪宗の教外淨土宗の難行易行、南三北七の五時等、門は異りといへども、入理一にして、皆佛意に叶ひ謗法とならずといはゞ、謗



四重一四重禁戒  
といふを犯すこ  
と

千部の論部一夫  
親のこと、その  
著千部の多數あ  
るに依ると  
常没一いつも地  
獄に在るべき罪  
人

法といふ事あるべからざるか。謗法とは、法に背くといふ事なり。法に背くと申すは、小乗は小乗經に背き、大乘は大乗經に背く。法に背かば、あに謗法とならざらん。謗法とならば、なんぞ苦果を招かざらん。此の道理にそむく、これひとつ。大般若經に云はく、般若を謗する者は十方の大阿鼻地獄に墮すべし。法華經に云はく、若人信ぜず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと。涅槃經に云はく、世に難治の病三あり、一には四重、二には五逆、三には謗大乘なりと。此等の經文あに空しかるべき。此等は證文なり。されば無垢論師、大慢婆羅門、毘連禪師、嵩靈法師等は、正法を謗じて現身に大阿鼻地獄に墮ち、舌、口中に爛れたり。これは現證なり。天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘經を破しき。後に無著菩薩に對して此の罪を懺悔せんがために、舌を切らんと悔い給ひき。謗法もし罪とならずんば、いかんが千部の論師懺悔をいたすべき。闍提とは、天竺の語、此には不信と翻す。不信とは、一切衆生悉有佛性を信ぜざるは闍提の人と見えたり。不信とは、謗法の者なり。恆河の七種の衆生の第一は一闍提謗法常没の者なり。第二は五逆謗法常没等の者なり。あに謗法を恐れざらん。答へて云くは、謗法とは只由なく謗法を謗するを謗法というか。我が宗をたてんがために、

隨喜一他の善を  
喜びてやること  
阿含經一小乘經  
の名

地藏一六道をめぐりて衆生を救ふ地藏菩薩のこと

餘法を謗するは謗法にあらざるか。攝論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは、假令人ありて一生の間、一善をも修せず、但惡を作る者あり。而るに、小縁に値ひて何れの善にてもあれ、一善を修せんと申す。これは隨喜讚歎すべし。又善人あり、一生の間たゞ一善を修す。而るを佗の善へうつさんがために、その善をそしる。「於一事中或呵或讚」といふこれなり。大論の四悉檀の中の對治悉檀又これ同じ。淨名經の彈呵と申すは、阿含經の時ほめし法をそしるなり。此等を以て思ふに、或は衆生多く小乗の機あれば、大乘を謗りて小乗經に信心をまし、或は衆生多く大乘の機なれば、小乗をそしりて大乘經に信心をあつくす。或は衆生、彌陀佛に縁あれば、諸佛をそしりて彌陀に信心をまさしめ、或は衆生多く地藏に縁あれば、諸菩薩を謗りて地藏をほむ。或は衆生多く華嚴經に縁あれば、諸經をそしりて華嚴經をほむ。或は衆生大般若經に縁あれば、諸經をそしりて大般若經をほむ。或は衆生法華經或は衆生大日經等同じく心うべし。機を見て或は讚め、或は謗る。共に謗法とならず。而るを機を知らざる者、みだりに或は讚め或は皆るは謗法となるべきか。例せば華嚴宗、三論、法相、天台、眞言、禪、淨土等の諸師の、諸經を破して我が宗を立つるは謗法とならざるか。



苦しからず一差  
支なしとの意

難じて云はく、宗を立てんに諸經諸宗を破し、佛菩薩を讚むるに佛菩薩を破し、佗の善根を修せしめんがために、この善根を破する、苦しからずば、阿含等の諸の小乘經に華嚴經等の諸大乘經を破したる文ありや。華嚴經に法華大日經等の諸大乘經を破したる文これありや。

答へて云はく、阿含小乘經に諸大乘經を破したる文はなけれども、華嚴經には二乘大乘一乘をあけて二乘大乘を破し、涅槃經には諸大乘經をあけて涅槃經に對してこれを破す。密嚴經には一切經中の王と説き、無量義經には四十餘年未顯眞實と説かれ、阿彌陀經には念佛に對して諸經を小善根と説かる。これらの例一にあらず。故に又破の經經による人師、皆此の義を存せり。此等をもて思ふに、宗を立つる方は我が宗に對して諸經を破るは苦しからざるか。

難じて云はく、華嚴經には小乘大乘一乘とあけ、密嚴經には一切經中の王と説かれ、涅槃經には「是諸大乘」とあけ、阿彌陀經には念佛に對して諸經を小善根とは説かれたれども、無量義經のごとく四十餘年と年限を指して、其の間の大部の諸經、阿含方等般若華嚴等の名をよびあけて、勝劣を説ける事これなし。涅槃經の「是諸大乘」の文計りこそ、雙

修多羅一梵語、  
經と譯す

已説一過去に説  
かれしこと  
今説一現在説か  
るること  
當説一未來に説  
かるべきこと  
上郎下郎一上藤  
下藤と書くが正  
し

林最後の經として「是諸大乘」と説かれたれば、涅槃經には一切經は嫌はるか覺ゆれども、是諸大乘經と擧げて、次に諸大乘經を列ねたるに、十二部修多羅、方等般若等とあけたり。無量義經、法華經をば載せず。但し無量義經に擧ぐるところは四十餘年の阿含、方等、般若、華嚴經をあけたり。いまだ法華經、涅槃經の勝劣は見えず。密嚴に一切經中王とはあけたれども、一切經を擧ぐる中に、華嚴勝鬘等の諸經の名をあけて一切經中王とく。故に法華經等とは見えず。阿彌陀經の小善根は時節もなし、小善根の相貌も見えず。誰か知る小乘經を小善根といふか。又人天の善根を小善根といふか。又觀經雙觀經の所説の諸善を小善根といふか。いまだ一代を念佛に對して小善根といふときはきこえず。又大日經、六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも、一代の一切經を嫌うて、その經をほめたる文はなし。但し無量義經計りこそ前四十餘年の諸經を嫌ひ、法華經一經に限りて已説の四十餘年、今説の無量義經、當説の未來に説くべき涅槃經を嫌うて、法華經計りをほめたり。釋迦如來過去現在未來の三世の諸佛世にいで給ひて各々一切經を説き給ふに、いづれの佛も法華經第一なり。例せば上郎下郎不定なり。田舎にしては百姓郎從等は、侍を上郎といふ。洛陽にして源平等已下を下郎といふ。三家を上郎といふ。



又主を王といはど、百姓も宅中の王なり、地頭領家等も又村郷郡國の王なり。しかれども大王にはあらず。小乗經には無爲涅槃の理が王なり。小乗の戒定等に對して智慧は王なり。諸大乘經には中道の理が王なり。又華嚴經は圓融相即の王、般若經は空理の王、大集經は守護正法の王、藥師經は藥師如來の別願を説く經の中の王、雙觀經は阿彌陀經の四十八願を説く經の中の王、大日經は印眞言を説く經の中の王、一代一切經の王にはあらず。法華經は眞諦俗諦、空假中、印眞言、無爲の理、十二大願、一切諸經の所説の所詮の法門の大王なり。これ教を知れる者なり。而るを善無畏、金剛智、不空、法藏、澄觀、慈恩、嘉祥、南三北七、曇鸞、道綽、善導、達磨等の、我が所立の依經を一代第一といへるは教を知らざる者なり。但し一切の人師の中には、天台智者大師一人教を知れる人なり。曇鸞道綽等の聖道淨土、難行易行、正行雜行は、源と十住毗婆沙論に依る。彼の本論に難行の内に法華眞言等を入ると謂へるは僻案なり、論主の心と論の始中終を知らざる失あり。慈恩が深密經の三時に一代を攝めたる事、又本經の三時に一切經の攝らざる事をしらする失あり。法藏澄觀等が五教に一代を攝むる中に、法華經華嚴經を圓教と立て、又華嚴教は法華經に勝れたりと思へるは、所依の華嚴經に二乗作佛久遠實成を

十住毘婆沙論  
印度の高僧龍樹  
の著  
論主論の作  
者、爰には龍樹  
を指す

あかさざるに、記小久成ありと思ひ、華嚴超過の法華經を我が經に劣ると謂ふは僻見也。三論の嘉祥の二藏等、又法華經に般若經すぐれたりと思ふ事は僻案也。善無畏等が大日經は法華經に勝れたりといふ。法華經の心を知らざるのみならず、大日經をも知らざる者なり。

問うて云はく、此等皆謗法ならば、惡道に墮ちたるか如何。答へて云はく、謗法に上中下雜の謗法あり。慈恩、嘉祥、澄觀等が謗法は上中の謗法か。其の上自身も謗法と知れるかの間、悔還す筆これあるか。又佗師を破するに二あり。能破似破これなり。教はまされりと知れども、是非をあらはさんがために法を破す。これは似破なり。能破とは、實にまされる經を劣ると思つてこれを破す。これは惡能破なり。又現に劣れるを破す、これ善能破なり。但し脇尊者の金杖の譬は、小乗經は多しといへども同じ苦空無常無我の理なり。諸人同じく此の義を存じて、十八部二十部相諍論あれども、但門の諍にて理の諍にはあらず。故に共に謗法とならず。外道が小乗經を破するは外道の理は常住なり。小乗經の理は無常なり空なり。故に外道が小乗經を破するは謗法となる。大乘經の理は中道なり、小乗經は空なり。小乗經の者が大乘



十二因縁一吾人の生死が十二階の因と縁とによる道理を示したるもの無明行一十二因縁最初の二

經を破するは謗法となる。大乘經の者が小乘經を破するは破法とならず。諸大乘經の中の理は未開會の理、いまだ記小久成これなし。法華經の理は開會の理、記小久成これあり。諸大乘經の者が法華經を破するは謗法となるべし。法華經の者の諸大乘經を謗するは謗法となるべからず。大日經眞言宗は未開會、記小久成なくば法華經已前なり。開會記小久成を許さば涅槃經と同じ。但し善無畏三藏、金剛智、不空、一行等の性惡の法門、一念三千の法門は、天台智者の法門をぬすめるか。若爾らば、善無畏等の謗法は似破か又雜謗法か。五百羅漢の眞因は小乘十二因縁の事なり。無明行等を縁として空理に入ると見えたり。門は諍へども謗法とならず。攝論の四意趣、大論の四悉檀等は、無著菩薩、龍樹菩薩滅後の論師として、法華經を以て一切經の心をえて、四悉四意趣等を用て爾前の經經の意を判するなり。未開會の四意趣四悉檀と、開會の四意趣四悉檀を同ぜば、あに謗法にあらずや。此等をよくく知るは教を知れる者なり。四句あり。一に信而不解、二に解而不信、三に亦信亦解、四に非信非解。問うて云はく、信而不解の者は謗法なる歟。答へて云はく、法華經に云はく、

以信得入 等云云。

契經一單に經と云ふに同じ

涅槃經の九に云はく、難じて云はく、涅槃經三十六に云はく、我於契經中說有二種人。謗佛法僧。一者不信。瞋恚心故。二者雖信不解。義故。善男子若人信心無有智慧。是人則能增長無明。若有智慧無有信心。是人則能增長邪見。善男子不信之人。瞋恚心故。說言無有佛法僧寶。信者無慧顛倒解。義故。令聞法者諦佛法僧等云云。

此の二人の中には信じて而して解せざる者を謗法と説く如何。答へて云はく、此の信而不解の者は涅槃經の三十六に、恆河之七種之衆生の第二の者を説く也。此第二の者は涅槃經の「聞一切衆生悉有佛性之說雖信之而不信者」なり。問うて云はく、如何ぞ信すと雖も而も不信なる乎。答へて云はく、一切衆生悉有佛性の說を聞いて之を信すと雖も、又心を爾前之經に寄する一類の衆生をば無佛性の者と云ふなり。これ信じて不信の者なり。問うて云はく、證文如何。答へて云はく、恆河第二の衆生を説いて云はく、經に云はく、



得聞。如是大涅槃經。生於信心。是名爲出。

又云はく、

雖信佛性是衆生有。不必一切皆悉有之。是故名爲信不具足。

此の文の如くんば、口には涅槃を信すと雖も、心に爾前の義を存する者なり。又この第

二の人を説いて云はく、

信者無慧。顛倒解義故。等云云。

顛倒解義とは、實經の文を得し權經の義と覺る者なり。

問うて云はく、信じて得道を解せざるの文如何。

答へて云はく、涅槃經の三十二に云はく、

是菩提因雖復無量。若説信心已攝盡。

九に云はく、

聞此經已。悉皆作菩提因緣。法聲光明入毛孔者。必定當得阿耨多羅三藐三菩提。

等云云。

法華經に云はく、

以信得入。等云云。

問うて云はく、解して不信なる者は如何。

答ふ、恆河の第一の者なり。

問うて云はく、證文如何。

答へて云はく、涅槃經の三十六に第一を説いて云はく、

有人聞是大涅槃經。如來常住無有變易常樂我淨。終不畢竟入於涅槃。一切衆生悉有

佛性。一闍提人。謗方等經。作五逆罪。犯四重禁。必當得成菩提之道。須陀洹人。

斯陀舍人。阿那舍人。阿羅漢人。辟支佛等。必當得成阿耨菩提。聞是語已。生不

信心。等云云。

問うて云はく、この文、不信とは見えたるも、解にして不信とは見えず。如何。

答へて云はく、第一の結文に云はく、

若有智慧。無有信心。是人則能增長邪見。

一闍提一梵語、不信と譯す



### 持妙法華問答鈔

抑希おちきに人身じんしんをうけ、適たたく佛法ぶつぽふを聞きけり。然しかるに法ほつに淺深せんしんあり、人ひとに高下かうげありと云いへり。何いかなる法ほつを修行しゆぎやうしてか、速すみやかに佛ぶつになり候まをふべき。願ねがはくは其そのの道みちを聞きかんと思おもふ。答こたへて云いはく、家家けんけんに尊勝そんじやうあり、國國こくこくに高貴かうきあり。皆みな其そのの君きみを貴たがみ其そのの親おやを崇あがむといへども、豈いかでかに國王こくわうにまさるべきや。爰こゝに知しんぬ、大小たうせい權實けんじつは家家けんけんの諍あそひなれども、一代いちだい聖せい教きやうの中には法華ほつげ獨ひとりり勝かちれたり。是こゝに頓證とんじやう菩提ぼだいの指南しなん、直至ぢくし道場だうぢやうの車輪しゃりん也なり。疑ぎつて云いはく、人師じんしは經論きやうろんの心こゝろを得えて釋しゃくを作る者もの也なり。然しからば則すなはち宗宗しゆしゆの人師じんし、面々めんめん各々かくかくに教門きやうもんを結構けつこうひ釋しゃくを作り義ぎを立て證得じやうとく菩提ぼだいと志しす。何いかぞ虚むなしかるべきや。然しかるに法華ほつげ獨ひとりり勝かちると候まをはど、心狭こゝろせまくこそ覺おぼえ候まをへ。答こたへて云いはく、法華ほつげ獨ひとりりいみじと申まをすが心こゝろせばく候まをはど、釋尊しゃくそん程ほど心こゝろせばき人ひとは世よに候まをはじ。何いかぞ誤あやりの甚あましきや。且しかく一經いつきやう一流いちりゆうの釋しゃくを引ひきて其そのの迷まよひをさとらせん。無量むりやう義經ぎきやうに云いはく、

頓證菩提—直に  
さとりを聞くこ  
と  
指南—導き者の  
こと  
直至道場—さと  
りの場處  
車輪—人を運び  
行く車のこと



種種説法。種種説法。以方便力。四十餘年未顯眞實云云。

此の文を聞いて大莊嚴等の八萬人の菩薩一同に、

過無量無邊不可思議阿僧祇劫。終不得成。無上菩提。

と領解し給へり。此の文の心は、華嚴阿含方等般若の四十餘年の經に付て、いかに念佛を

申し禪宗を持て佛道を願ひ、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、無上菩提を成す

る事を得じと云へり。然かのみならず方便品には、「世尊法久後。要當説眞實」と説き、

又「唯有二乘法。無二亦無三」と説きて、此の經ばかりまこと也と云ひ、又二の卷には

「唯我一人能爲救護」と教へ、「但樂受持大乘經典。乃至不受餘經一偈」と説き給へ

り。文の心は、たゞわれ一人して能くすくひ護る事をなす、法華經をうけ持たん事をね

がひて、餘經の一偈をも受けざれと見えたり。又云はく、

若人不信毀謗此經。則斷一切世間佛種。乃至其人命終。入阿鼻獄云云。

此の文の心は、若人、此の經を信ぜずして此の經にそむかば、則ち一切世間の佛の種を

たつもの也。その人は命終らば、無間地獄に入るべしと説き給へり。此等の文をうけて

天台は「將非魔作佛」の詞正しく此の文によれりと判じ給へり。唯人師の釋計りを憑みて

言語道斷一詞に  
云ひ表し得ぬ程  
あきれたるに云  
ふ  
偏圓一かたより  
て不完全なると  
完全にて缺くる  
處なきと

佛説によらずば、何ぞ佛法と云ふ名を付くべきや。言語道斷の次第也。之に依つて智證

大師は、經に大小なく理に偏圓なしと云ひて、一切人によらば佛説無用也と釋し給へり。

天台は、

若深有所以。復與修多羅合者。錄而用之。無文無義不可信受。

と判じ給へり。又云はく、

無文證者悉是邪謂。

とも云へり。いかゞ心得べきや。

問うて云はく、人師の釋はさも候ふべし。爾前の諸經に此の經第一とも説き諸經の王と

も宣べたり。若爾らば佛説なりとも用ふべからず候ふ歟如何。

答へて云はく、設ひ此の經第一とも諸經の王とも申し候へ、皆是權教也。其の語による

べからず。之に依つて佛は了義經によりて不了義經によらざれと説き、妙樂大師は、

縱有經云諸經之王。不云已今當説最爲第一。兼但對帶其義可知。

と釋し給へり。此の釋の心は、設ひ經ありて諸經の王とは云ふとも、前に説きつる經に

も後に説かんずる經にも、此の經はまされりと云はずば、方便の經と知れと云ふ釋也。



されば爾前の經の習として、今説く經より後に又經を説くべき由を云はざる也。唯法華經計りこそ、最後の極説なるが故に、已今當の中に此の經獨り勝れたりと説かれて候へ。されば釋には、

唯至法華説前教意顯今教意

と申して、法華經にて如來の本意も教化の儀式も定りたりと見えたり。之に依つて天台は、

如來成道四十餘年未顯眞實法華始顯眞實

と云へり。此の文の心は如來世に出でさせ給ひて四十餘年が間は、眞實の法をば顯はさず。法華經に始めて佛になる實の道を顯し給へりと釋し給へり。

問うて云はく、已今當の中に法華經勝れたりと云ふ事はさも候ふべし。但し有人師の云はく、四十餘年未顯眞實と云ふは、法華經にて佛になる聲聞の爲也。爾前の得益の菩薩の爲には未顯眞實と云ふべからずと云ふ義をば、いかゞ心得候ふべきや。

答へて云はく、法華經は二乗の爲也。菩薩の爲にあらず。されば未顯眞實と云ふ事、二乗に限るべしと云ふは德一大師の義歟。此は法相宗の人也。此の事を傳教大師破し給ふ

有人師或人師に同じ。ある一人の學者といふこと

に、

現在蠹食者。僞章數卷作。謗法謗人。何不墮地獄

と破し給ひしかば、德一大師其の語に責められて舌八に裂け失せ給ひき。未顯眞實とは二乗の爲也と云はく、最も理を得たり。其の故は、如來布教の元旨は、元より二乗の爲也。一代の化儀、三周の善巧、併ら二乗を正意とし給へり。されば華嚴經には地獄の衆生は佛になるとも、二乗は佛になるべからずと嫌ひ、方等には高峯に蓮の生ざるやうに、二乗は佛の種を焦りたりと云はれ、般若には五逆罪の者は佛になるべし、二乗は叶ふべからずと捨てらる。かゝるあさましき捨者の、佛になるを以て、如來の本意とし、法華經の規模とす。之に依つて天台の云はく、

華嚴大品不能治之。唯有法華能令無學還生善根。得成佛道。所以稱妙

又闡提有心。猶可作佛。二乘滅智。心不可生。法華能治復稱爲妙云云。

此の文の心は委く申すに及ばず。誠に知んぬ、華嚴方等大品等の法藥も、二乗の重病をば癒さず。又三惡道の罪人をも、菩薩ぞと、爾前の經にはゆるせども、二乗をばゆるさず。之に依つて妙樂大師は

化儀佛が衆生を導く爲の說法の形式、仕方三周同上說法の三段の方法併しながらしそのまゝ皆、全く



修羅—阿修羅のこと、姿は天人に似て心は常に嘆る。身非常に大なるものといふ。

後生の繼—死後に善所に生るる事の妨をいふ。

大虚—大ざら  
慧日—智慧を日に譬ふ  
臂をくたす—勉強に骨を折ること  
北嶺—比叡山、天台の學の本山

餘趣會 實諸經或有 二乘全無。故合菩薩對於二乘從難而說。と釋し給へり。しかのみならず、二乗の作佛は一切衆生の成佛を顯すと天台は判じ給へり。修羅が大海を渡らんをば是難しとやせん。嬰兒の力士を投げん何ぞたやすしとせん。然らば則ち佛性の種ある者は佛になるべしと爾前にも説けども、未だ焦種の者作佛すべしとは説かず。かゝる重病をたやすく治すは獨り法華の良藥也。只須く汝佛にならんと思はど、慢の幢を倒し忿の杖をすてて偏に一乘に歸すべし。名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生の繼也。嗚呼恥づべし恥づべし、恐るべし恐るべし。問うて云はく、一を以て萬を察する事なれば、あらく法華のいはれを聞くに耳目始めて明か也。但し法華經をば、いかやうに心得候ひてか、速に菩提の岸に到るべきや。傳へ聞く、一念三千の大虚には慧日曇る事なく、一心三觀の廣池には智水濁る事なき人こそ、其の修行に堪へたる機にて候ふなれ。然るに南都の修學に臂をくたす事なかりしかば、瑜伽唯識にもくらし。北嶺の學文に眼をさらさざりしかば、止觀立義にも迷へり。天台法相の兩宗は、貧を蒙りて壁に向へるが如し。されば法華の機には既に洩れて候ふにこそ。何んがし候ふべき。

墮在泥梨—泥梨は地獄、地獄に墮つること

答へて云はく、利智精進にして觀法修行するのみ法華の機ぞと云ひて、無智の人を妨ぐるは、當世の學者の所行也。是違つて愚癡邪見の至也。一切衆生皆成佛道の教なれば、上根上機は觀念觀法も然るべし、下根下機は唯信心肝要也。されば經には、淨信心敬不生疑惑者不墮地獄餓鬼畜生。生十方佛前。と説き給へり。いかにも信じて次の生の佛前を期すべき也。譬へば高き岸の下に人ありて登る事あたはさらんに、又岸の上に人ありて繩をおろして、此の繩に取附かば、我岸の上に引登さんと云はんに、引人の力を疑ひ、繩の弱からん事をあやぶみて、手を納めて是を取らざらんが如し。争か岸の上に登る事をうべき。若其の詞に隨ひて手をのべ是をとらへば、即ち登る事をうべし、「唯我一人能爲救護」の佛の御力を疑ひ、「以信得入」の法華經の教の繩をあやぶみて、「決定無有疑」の妙法を唱へ奉らざらんは、力又ばず、菩提の岸に登る事難かるべし。不信の者は墮在泥梨の根元也。されば經には、生疑不信者則當墮惡道。と説かれたり。受けがたき人身をうけ、値ひがたき佛法にあひて争か虚くて候ふべきぞ。同じく信を取るならば、又大小權實のある中に、諸佛出世の本意、衆生成佛の直道の一



乗をこそ信すべけれ。持つ處の御經の諸經に勝れてましませば、能く持つ人も亦諸人にまさされり。爰を以て經に云はく、

能持<sub>つ</sub>是經<sub>を</sub>者<sub>は</sub>於<sub>て</sub>一切衆生<sub>の</sub>中<sub>に</sub>亦爲<sub>る</sub>第一<sub>なり</sub>

と説き給へり。大聖の金言疑<sub>たがひ</sub>なし。然るに人此の理をしらず見ずして、名聞狐疑偏執を致せるは墮獄の基也。只願はくは經を持ち、名を十方の佛陀の願海に流し、譽を三世の菩薩の慈天に施すべし。然らば法華經を持ち奉<sub>たてまつ</sub>る人は、天龍八部諸大菩薩を以て我が眷屬とする者也。しかのみならず、因身の肉團に果滿の佛眼を備へ、有爲の凡膚に無爲の聖衣を著けぬれば、三途に恐なく、八難に憚<sub>はや</sub>りなし。七方便の山の頂に登りて九法界の雲を拂ひ、無垢地の園に花開け、法性の空に月明かならん。「是人於佛道決定無有疑」の文憑あり。「唯我一人能爲救護」の説疑なし。一念信解の功德は五波羅蜜の行に越え、五十展轉の隨喜は八十年の布施に勝れたり。頓證菩提の教は遙に群典に秀で、顯本遠壽の説は永く諸乘に絶えたり。爰を以て八歳の龍女は大海より來りて經力を殺那に示し、本化の上行は大地より涌出して佛壽を久遠に顯す。言語道斷の經王、心行所滅の妙法也。然るに此の理を忽諸にして、餘經に等しむるは、謗法の至、大罪の至極也。

因身の肉團凡夫の肉體  
果滿一さとり完全なること  
有爲一迷のもの無爲一さと

顯本遠壽一今の釋尊は實は本來佛にてありし方にて覺られし已來無量の劫なりとの説  
諸乘一諸教といふに同じ

譬を取るに物なし。佛の神變にても何ぞ是を説盡さん。菩薩の智力にても争か是を量るべき。されば譬諭品に云はく、

若説<sub>か</sub>其罪<sub>を</sub>窮<sub>む</sub>劫不盡<sub>き</sub>

と云へり。文の心は、法華經を一度もそむける人の罪をば、劫を窮むとも説盡し難しと見えたり。然る間、三世の諸佛の化導にももれ、恆沙の如來の法門にも捨てられ、冥きより冥きに入りて、阿鼻大城の苦患争か免れん。誰か心あらん人、長劫の悲を恐れざらんや。爰を以て經に云はく、

見<sub>て</sub>有<sub>ら</sub>讀<sub>み</sub>誦<sub>じ</sub>誦<sub>書</sub>持<sub>つ</sub>經<sub>を</sub>者<sub>は</sub>輕<sub>ろ</sub>賤<sub>せ</sub>憎<sub>む</sub>嫉<sub>む</sub>而<sub>し</sub>懷<sub>く</sub>結<sub>ぶ</sub>恨<sub>を</sub>其人命終<sub>して</sub>入<sub>る</sub>阿鼻獄<sub>に</sub>云云

文の心は法華經をよみたもたん者を見て、輕しめ、いやしみ、にくみ、そねみ、うらみを結ばん其の人は、命終りて阿鼻大城に入らんと云へり。大聖の金言誰か是を恐れざらんや。「正直捨方便」の明文豈に是を疑ふべきや。然るに人皆經文に背き、世悉く法理に迷へり。汝何ぞ惡友の教に隨はんや。されば邪師の法を信じ受くる者を名けて毒を飲む者也と天台は釋し給へり。汝能く是を慎むべし是を慎むべし。情世間を見るに法をば貴しと申せども、其の人をば萬人是を惡む。汝能くく法の源に迷へり。何にと云

恆沙一恆河の沙ほどに數多きに云ふ  
冥きより冥き一この世の心迷より來世は惡道に入ること

正直捨方便一法華經は佛の正意を打ち出したるものにて假の方便を説けるにあらずとの句



冥の照覽一神佛の目に見えぬ所より御覽あること望めて一比べ見るといふこと

我即是父一我は即ちこれ父と、衆生に向ひて佛といふの語

ふに、一切の草木は地より出生せり。是を以て思ふに、一切の佛法も又人によりて弘ま  
るべし。之によつて天台は佛世すら猶人を以て法を顯はす、末代いづくんぞ、法は貴けれ  
ども人は賤しと云はんやとこそ釋して御坐候へ。されば持たるよ法だに第一ならば、持  
つ人隨て第一なるべし。然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀る也。其の子を賤むる  
は即ち其の親を賤しむ也。爰に知りぬ、當世の人は詞と心と總てあはず。孝經を以て其  
の親を打つが如し。豈に冥の照覽恥しからざらんや。地獄の苦恐るべし恐るべし、慎  
むべし慎むべし。上根に望めても卑下すべからず、下根を捨てざるは本懷也。下根に望  
めても橋慢ならざれ、上根も漏るよ事あり、心をいたさざるが故に。凡そ其の里ゆかし  
けれども、道たえ縁なきには通ふ心も疎に、其の人戀しけれども憑めず契らぬには待  
つ思も等閑なるやうに、彼の月卿雲客に勝れたる靈山淨土の行、やすきにも未だゆか  
ず、「我即是父」の柔輒の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず。是誠に袂を腐し、胸を  
こがす歎ならざらんや。暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも、心をもよほす思  
也。事にふれ折に付けても後世を心につけ、花の春雪の朝も是を思ひ、風戦ぎ村雲まよ  
ふ夕にも忘るよ隙なかれ。出づる息は入る息をまたず、何なる時節ありてか「毎自作是

悲願一佛の衆生をあらはれみて立て給ひし衆生濟度の願

著一心をかたく附くることさこそ一これほものうからざるべき一思らざるべき

おきてられ一指導せられ

三笠の雲一人の身の上とながむること

念」の悲願を忘れ、何なる月日ありてか、「無一不成佛」の御經を持たざらん。昨日が今  
日になり、去年の今年となる事も、是期する處の餘命にはあらざるをや。總て過ぎにし  
方をかぞへて年の積るをば知るといへども、今行末において一日片時も誰か命の數に入  
るべき。臨終已に今にありとは知りながら、我慢偏執名聞利養に著して、妙法を唱へ奉  
らざらん事は、志の程無下にかひなし。さこそは「皆成佛道」の御法とは云ひながら、此  
の人争でか佛道にもものうからざるべき。色なき人の袖にはそごろに月のやどる事かは。  
又命已に一念にすぎざれば、佛は一念隨喜の功德と説き給へり。若是二念三念を期すと  
云はど、平等大慧の本誓、頓教一乘皆成佛の法とは云はるべからず。流布の時は末世法  
滅に及び、機は五逆謗法をも納めたり。故に頓證菩提の心におきてられて、狐疑執著の  
邪見に身を任する事なかれ。生涯幾くならず、思へば一夜のかりの宿を忘れて、幾くの  
名利をか得ん。又得たりとも是夢の中の榮、珍しからぬ樂也。只先世の業因に任せて  
營むべし。世間の無常をさとらん事は、眼に遮り耳にみり。雲とやなり雨とやなりけ  
ん、昔の人は只名をのみきく。露とや消え煙とや登りけん、今の友も又見えす。我いつ  
までか三笠の雲と思ふべき。春の花の風に隨ひ、秋の紅葉の時雨に染むる。是皆ながら



空也上人一天台宗の高僧、空也念佛の開祖、天祿三年七十にて寂す  
十和があら玉一楚人十和、荆山より璞を得、人その中に明玉あり

へぬ世の中のためしなれば、法華經には「世皆不<sub>レ</sub>牢固<sub>二</sub>如水沫泡焰<sub>一</sub>」とすよめたり。「以<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>無上道<sub>一</sub>」の御心のそこ、順縁逆縁の御言葉、已に本懐なれば、暫も持つ者も又本意に叶ひぬ。又本意に叶はば佛の恩を報ずる也。悲母深重の經文、心安ければ、唯我一人の御苦も僅々やすみ給ふらん。釋迦一佛の悦び給ふのみならず、諸佛出世の本懐なれば、十方三世の諸佛も悦び給ふべし。「我即歡喜諸佛亦然」と説かれたれば、佛悦び給ふのみならず、神も即ち隨喜し給ふなるべし。傳教大師是を講じ給ひしかば、八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を讀み給ひしかば、松尾の大明神は寒風をふせがせ給ふ。されば七難即滅七福即生と祈らんにも、此の御經第一也。現世安穩と見えれば也。佗國侵逼の難、自界叛逆の難の御祈禱にも、此の妙典に過ぎたるはなし。「令<sub>二</sub>百由旬内無<sub>二</sub>諸衰患<sub>一</sub>」と説かれたれば也。然るに當世の御祈禱は逆様なり。先代流布の權教也。末代流布の最上眞實の祕法にあらざる也。譬へば去年の曆を用ひ、鳥を鷄につかはんが如し。是偏に權教の邪師を貴んで未だ實教の明師に値せ給はざる故也。惜哉、文武の下和があら玉、何くにか納めけん。嬉哉、釋尊出世の鬘の中の明珠、今度我が身に得たる事よ。十方諸佛の證誠として忽ならず。さこそは「一切世間多怨難信」と知

るを知らざりきといふ  
鬘の中の明珠一  
鬘を小乘の人、  
珠を法華大乘に  
譬ふ、鬘珠とも  
いふ  
寂光の都一佛の  
さとりによりに  
この世を淨土と  
見たる名

りながら、争か一分の疑心を残して、「決定無有疑」の佛にならざらんや。過去遠々の苦は徒らにのみこそ受來しか。などか暫く不變常住の妙因を植ゑざらん。未來永々の樂は、かつく心を養ふとも、強ひてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず。「三界無安猶如火宅」は如來の教、「所以諸法如幻如化」は菩薩の詞也。寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし。本覺の栖を離れて何事か樂なるべき。願くは現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞、後世の弄引なるべけれ。須く心を一にして、南無妙法蓮華經と、我も唱へ佗をも勸めんのみこそ、今生人界の思出なるべき。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日蓮花押



# 法華題目鈔

根本大師門人日蓮撰

南無妙法蓮華經

四惡趣—地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の四惡界

四諦—苦集滅道とて覺を得る四つの心得  
三歸—佛と法と僧とに歸依すといふこと

問うて云はく、法華經の意をも知らず、義理をも味はよすして、只南無妙法蓮華經と計り五字七字に限りて、一日に一週一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんど唱へても、輕重の惡に引かれずして、四惡趣におもむかず、つひに不退の位にいたるべしや。  
答へて云はく、しかるべきなり。

問うて云はく、火々といへども手にとらざればやけず。水々といへども口にのまざれば水のほしさもやまず。只南無妙法蓮華經と題目計りを唱ふとも、義趣をさとらずば惡趣をまぬかれん事いかどあるべかるらん。

答へて云はく、師子の筋を琴の絃として、一度奏すれば餘の絃悉くきれ、梅子の酢き聲をきけば、口に唾たまり潤ふ。世間の不思議すら是の如し。況や法華經の不思議をや。小乘の四諦の名計りをさやづる鸚鵡なほ天に生ず。三歸計りを持つ人大魚の難をまぬかる。

法華題目鈔



何に況や法華經の題目は、八萬聖教の肝心、一切諸佛の眼目なり。汝等これを唱へて惡趣をはなるべからずと疑ふか。正直捨方便の法華經には、信を以て入ることを得と云ひ、雙林最後の涅槃經には、

是菩提因。雖復無量。若說信心。則已攝盡等云云。

夫佛道に入る根本は信をもて本とす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初なり。たとひ、悟なければども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たとひ、さとりあれども信心なき者は、誹謗闡提の者也。善星比丘は二百五十戒を持って四禪定を得、十二部經を誦にせし者也。提婆達多是、六萬八萬の寶藏を覺え、十八變を現せしかども、此等は有解無信の者なり。今に阿鼻大城にありと聞く。又鈍根第一の須梨槃特は、智慧もなく悟もなし。只一念の信ありて普明如來と成り給ふ。又迦葉舍利弗等は無解有信の者なり。佛に授記を蒙りて華光如來光明如來といはれき。佛説いて云はく、

生疑不信者。即當墮惡道等云云。

此等は有解無信の者を皆惡道に墮すべしと説き給ひしなり。而るに今の代の世間の學者の云はく、只信心計りにて解心なく、南無妙法蓮華經と唱ふる計りにて争か惡趣をまぬ

五十二位一佛の位に上る五十二階級十信十住十行十迴向十地等覺妙覺佛の十八變一十八種の神變不思議

授記一豫言を授かること

伊蘭一極めて惡臭ある樹

かるべき等云々。此の人々は經文の如くならば阿鼻大城をまぬかれがたし。されば、させる解なくとも、南無妙法蓮華經と唱ふるならば、惡道をまぬかるべし。譬へば蓮華は日に隨つて回る、蓮に心なし。芭蕉は雷によりて增長す、是の草に耳なし。我等は蓮華と芭蕉との如く、法華經の題目は日輪と雷との如し。犀の生角を身に帶して水に入りぬれば、水五尺身に近つかず。栴檀の一片開きぬれば、四十由旬の伊蘭變ず。我等が惡業は伊蘭と水との如く、法華經の題目は犀の生角と栴檀の一片との如し。金剛は堅固にして一切の物に破られざれども、羊の角と龜の甲に破らる。尼俱類樹は大鳥にも枝をれざれども、蚊の睫に巢をくふ鶴鷄鳥に枝折れぬ。我等が惡業は金剛の如く、尼俱類樹の如し。法華經の題目は羊の角の如く、せうれう鳥の如し。琥珀は塵をとり、磁石は鐵をすふ。我等が惡業は塵と鐵との如く、法華經の題目は琥珀と磁石との如し。かく思ひて常に南無妙法蓮華經と唱ふべし。法華經の第一の卷に云はく、

無量無數劫聞是法亦難等云云。

第五の卷に云はく。

是法華經。於無量國中。乃至名字不可得聞。等云云。



摩訶大といふ  
梵語  
邊土國はづ  
れ、田舎

法華經の御名を聞く事はおほろけにも難有き事なり。されば須扇多佛、多寶佛は、世に出でさせ給ひたりしかども、法華經の御名をだにも説き給はず。釋迦如來は法華經のために世に出でさせ給ひたりしかども、四十餘年の間は名をも語り出し給はず。佛の御年七十二と申せし時、始めて妙法蓮華經と唱へ出させ給ひたり。然りと雖も摩訶尸那、日本本の邊土の者、御名をも聞かざりき。佛滅後一千餘年を過ぎて三百五十餘年に及んでこそ、纔に御名計りをば聞きたりしか。されば、この經に値ひたてまつる事をば、三千年に一度華さく優曇華、無量無邊劫に一度値ふなる一眼の龜にもたとへたり。大地の上に針を立てて大梵天王宮より芥子をなぐるに、針のさきに芥子の貫かれたるよりも、法華經の題目に値ひ奉る事かたし。此の須彌山に針を立てて彼の須彌山より大風のつよく吹かん日、絲をわたさんに、針の穴にいたりて絲のさきの入りたらんよりも、法華經の題目に値ひ奉る事かたし。さればこの經の題目をとなへさせ給はん人は思召すべし、生盲の始めて眼あきて父母等をみんよりもうれしく、強き敵に捕られたる者の、ゆるされて妻子を見るよりも珍しとおほすべし。問うて云はく、題目計りを唱ふる證文これありや。

答へて云はく、妙法華經の第八に云はく、

受持法華名者、福不可量。

正法華經に云はく、

若聞此經、宣持名號、德不可量。

添品法華經に云はく、

受持法華名者、福不可量等云云。

此等の文は題目計りを唱ふる福計るべからずと見えぬ。一部八卷二十八品を受持讀誦し隨喜護持するは廣なり。方便品壽量品等を受持し等するは略なり。但一四句偈乃至題目計りを唱ふる者を護持するは要なり。廣略要の中には、要が中の要なり。

問うて云はく、妙法蓮華經の五字にはいくばくの功德を納めたるや。

答へて云はく、大海は衆流を納め、大地は有情非情を持ち、如意寶珠は萬寶を雨し、梵王は三界を領す。妙法蓮華經の五字も亦復是の如し。一切の九界の衆生竝に佛界を納めたり。十界を納むれば亦十界の依報の國土を收む。先づ妙法蓮華經の五字に一切の法を納むる事をいはず、經の一字は諸經の中の王なり。一切の群經を納む。佛世に出でさせ給

有情こころあ  
るもの  
非情こころな  
きもの、草木石  
の如し  
依報人畜等の  
生活し居るとこ  
る



阿羅漢一小乘の  
さとりを開きし  
もの

十三世界微塵數  
—十三の世界を  
微塵に碎きたる  
ほどの非常の數

ひて、五十餘季の間、八萬聖教を説き置かせ給ひき。佛は人壽百歳の時、壬申の歲二月十五日の夜半に御入滅あり。其の後四月八日より七月十五日に至るまで、一夏九旬の間、一千人の阿羅漢、結集堂にあつまりて、一切經を書きおかせ給ひき。其の後正法一千年の間は、五天竺に一切經弘まらせ給ひしかども、震旦國には渡らず。像法に入りて一十五年と申せしに、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯の歲、佛經始めて渡りて、唐の玄宗皇帝開元十八年庚午の歲に至るまで、渡れる譯者一百七十六人、持來る經律論一千七十六部、五千四十八卷、四百八十帙、是皆法華經の經の一字の眷屬の修多羅なり。先づ妙法蓮華經の以前四十餘年の間の經の中に、大方廣佛華嚴經と申す經まします。龍宮城には三本あり。上本は十三世界微塵數の品、中本は四十九萬八千八百偈一千二百品、下本は十萬偈四十八品。此の三本の外に、震旦日本には僅に八十卷六十卷四十卷等あり。阿含小乘經方等般若の諸大乘經等、大日經は梵本には阿嚩囉訶佉及又五の五字計りをもて、三千五百の偈をむすべり。況や餘の諸尊の種子、尊形、三摩耶、其の數をしらず。而るに漢土には但纔に六卷七卷なり。涅槃經は雙林最後の説、漢土には但四十卷なり。是も梵本これ多し。此等の諸經は皆釋迦如來の所説の法華經の眷屬の修多羅なり。此の外過去

の七佛千佛遠々劫の諸佛の所説、現在十方の諸佛の諸經も、皆法華經の經の一字の眷屬也。されば藥王品に佛、宿王華嚴經に對して云はく、  
譬如一切川流江河諸水之中海爲第一、衆山之中須彌山爲第一、衆星之中月天子最爲第一等云云。

妙樂大師の釋に云はく、  
已今當説最爲第一等云云。

此の經の一字の中に十方法界の一切經を納めたり。譬へば如意寶珠の一切の財を納め、虚空の萬象を含めるが如し。經の一字は一代に勝る故に、妙法蓮華の四字も又八萬寶藏に超過するなり。妙とは、法華經に云はく、

開方便門、示眞實相云云。  
章安大師の釋に云はく、

發祕密之奧藏、稱之爲妙云云。

妙樂大師此の文を受けて云はく、發とは開也等云々。妙と申す事は開と云ふ事也。世間に財を積める藏に鑰なければ開く事かたし。開されば藏の内の財を見ず。華嚴經は

八萬法藏—八萬  
四千種にも別る  
べき教法、實は  
無量數を意味す



一闍提梵語、不信者のこと

六萬九千三百八

佛説き給ひたりしかども、彼の經を開く鑰をば、佛彼の經に説き給はず。阿含方等般若觀經等の四十餘年の經經も、佛説き給ひたりしかども、彼の經經の意をば開き給はず、門を閉ぢて置かせ給ひたりしかば、人彼の經經を悟る者一人もなかりき。たとひさとれりと思ひしも僻見にてありし也。而るに佛法華經を説かせ給ひて、諸經の藏を開かせ給ひき。此の時に四十餘年の九界の衆生始めて諸經の藏の内の財をば見しりたりし也。譬へば大地の上に人畜草木等あれども、日月の光なければ眼ある人も、人畜草木の色形をしらず。日月出で給ひてこそ、始めてこれをば知る事なれ。爾前の諸經は長夜の闇の如く、法華經の本迹二門は日月の如し。諸の菩薩の二目ある、二乗の眇目なる、凡夫の盲目なる、闍提の生盲なる、共に爾前の經經にては色形をわきまへず。中程に法華經の時、迹門の月輪始めて出給ひし時、菩薩の兩眼先にさとり、二乗の經目次にさとり、凡夫の盲目次に開き、生盲の一闍提も未來に眼の開べき縁を結ぶ事、是偏に妙の一字の徳也。迹門十四品の一妙、本門十四品の一妙、合せて二妙。迹門の十妙、本門の十妙、合せて二十妙。迹門の三十妙、本門の三十妙、合せて六十妙。迹門の四十妙、本門の四十妙、觀心の四十妙、合せて百二十重の妙なり。六萬九千三百八十四字、一一の字の下に

十四字一法華經の文字の數

大藥師立派か  
る醫師

法定性の二乘一  
小乘のものと定  
りて移らぬもの

一の妙あり。總じて六萬九千三百八十四の妙あり。妙とは天竺には薩と云ひ 漢土には妙と云ふ。妙とは具の義也。具とは圓滿の義也。法華經の一一の文字、一字一字に餘の六萬九千三百八十四字を納めたり。譬へば大海の一滄の水に一切の河の水を納め、一の如意寶珠の芥子計なるが、一切の如意寶珠の財を雨らすが如し。譬へば秋冬枯れたる草木の、春夏の日に値ひて枝葉華葉出來するが如し。爾前の秋冬の草木の如くなる九界の衆生、法華經の妙の一字の春夏の日輪にあひたてまつりて、菩提心の華さき成佛の菓なる。

龍樹菩薩の大論に云はく、

譬如大藥師能以毒爲藥云云。

此の文は大論に法華經の妙の徳を釋する文也。妙樂大師の釋に云はく、

難治能治。所以稱妙等云云。

總じて成佛往生のなりがたき者四人あり。第一には決定性の二乘、第二には一闍提人、第三には空心の者、第四には謗法の者也。此等を法華經において佛になさせ給ふ故に、法華經を妙とは云ふ也。提婆達多是斛飯王の第一の太子、淨飯王には甥、阿難尊者の兄、



五法一欲、精進、念、巧慧、一心の上き行

風輪ある大地一強き風を以てささへられたる土地  
六欲四禪一以下皆天上界の名

教主釋尊には從子、南閻浮提にからざる人也。須陀比丘を師として出家し、阿難尊者に十八變を習ひ、外道の六萬藏、佛の八萬藏を胸にうかべ、五法を行じて殆ど佛よりも尊きけしきなり。兩頭を立てて、破僧罪を犯さんがために、象頭山に戒壇を築き、佛弟子を招き取り、阿闍世太子をかたらひて云はく、我は佛を殺して新佛となるべし。太子は父の王を殺して新王となり給へ。阿闍世太子既に父の王を殺ししかば、提婆達多又佛をうかどひ、大石をもつて佛の御身より血を出し、阿羅漢たる華色比丘尼を打殺し、五逆の内たる三逆を具に作る。其の上瞿伽梨尊者を弟子とし、阿闍世王を檀那にたのみ、五天竺十六の大國五百の中國等の、一逆二逆三逆等をつくる者は皆提婆が一類にあらざる事なし。譬へば大海の諸河を集め、大山の草木を聚むるが如し。智慧ある者は舍利弗に集り、神通ある者は目連に従ひ、悪人は提婆にかたらひし也。されば厚さ十六萬八千由旬、其の下に金剛の風輪ある大地すでにわれて、生身に無間大城に墮ちにき。第一の弟子瞿伽梨も又生身に地獄に入る。旃遮婆羅門女も墮ちにき。波瑠璃王もおちぬ。善星比丘もおちぬ。此等の人々の生身に墮ちしをば五天竺十六の大國五百の中國十千の小國の人々も皆これをみる。六欲、四禪、色、無色、梵王、帝釋、第六天の魔王も、閻魔法王

劫石一四十里四方の石を三年に一度磨して、その石のすれ盡す間の時を劫といふ、その石のこと

三皇一伏羲、神農、黃帝  
五帝一、小昊、顓頊、高辛、唐、虞  
三墳五典一三皇五帝の書

等も、皆御覽ありき。三千大千世界十方法界の衆生界も皆聞きし也。されば大地微塵劫はすぐとも、無間大城を出づべからず。劫石は隣ぐとも阿鼻大城の苦はつきじとこそ思ひ合ひたりしに、法華經の提婆品にして、教主釋尊の昔の師天王如來と記し給ふ事こそ、不思議には覺ゆれ。爾前の經經實ならば、法華經は大妄語、法華經實ならば爾前の諸經は大虚誑罪也。提婆が三逆罪を具に犯して、其の外無量の重罪を作りしも天王如來となる。況や二逆一逆等の諸の悪人の得道疑なき事、譬へば大地をかへすに草木等のかへるが如く、堅石をわる者輒草をわるが如し。故に此の經をば妙と云ふ也。女人をば内外典に是をそしり、三皇五帝の三墳五典にも詔曲者と定む。されば災は三女より起ると云へり。國の亡び人の損ずる源は女人を本とす。内典の中には、初成道の大法たる華嚴經には、女人地獄使能斷佛種子、外面似菩薩、内心如夜叉。雙林最後の大涅槃經には、

一切江河必有回曲。一切女人必有詔曲。又云はく、

所有三千界男子諸煩惱合集。爲一人女人業障等云云。



五障一女にある  
五つのさはり、

大華嚴經の文に、能斷佛種子と説かれて候ふは、女人は佛になるべき種子を焦れり。譬へば大旱魃の時、虚空の中に大雲起り大雨を大地に下すに、かれたるが如くなる無量無邊の草木花さき菓なる。然りと雖ども焦りたる種は生ひずして結句雨しければ、朽ち失するが如し。佛は大雲の如く説教は大雨の如く、かれたるが如くなる草木を一切衆生に譬へたり。佛の雨に潤ひて五戒十善禪定等の功德を得るは、花さき菓なるが如し。雨ふれどもいりたる種の生ひずして、かへりて朽失するは、女人の佛教に遇へども、生死をはなれずして、かへりて佛法を失ひ惡道に墮つるに譬ふ。是を能斷佛種子とは申す也。涅槃經の文に、一切の江河のまがれるが如く、女人も又まがれりと説かれたるは、水は軟かなる物なれば、石山などの硬き物にさへられて、水の先ひるむ故にかしこことへ行く也。女人も亦是の如く女人の心をば水に譬へたり。心よわくして水の如く也。道理と思ふ事も男のこはき心に値ひぬれば、塞かれてよしなき方へ趣く。又水に畫くに、とどまらざるが如し。女人は不信を體とする故に、只今さあるべしと見る事も、又しばらくあれば、あらぬさまになるなり。佛と申すは正直を本とす。故にまがれる女人は佛になるべきにあらず。五障三従と申して、五つのさはり、三つしたがふ事あり。されば、銀

轉輪王、梵天王、  
帝釋天、魔王及  
び佛となるを得  
ざることを  
三従一嫁せざれば  
父に從ひ、嫁  
すれば夫に從  
ひ、夫死すれば  
子に從ふ

初成道一華嚴經  
をさす  
雙林最後涅槃  
經をさす

色女經には、三世の諸佛の眼は大地に落つとも、女人は佛になるべからずと説かれ、大論には、清風は執ると云へども、女人の心は執りがたしと云へり。此の如く諸經に嫌はれたりし女人を、文殊師利菩薩の經の一字を説き給ひしかば、忽に佛になりき。あまりに不審なりし故に、寶淨世界の多寶佛の第一の弟子智積菩薩、釋迦如來の御弟子の智慧第一の舍利弗尊者、四十餘年の大小乘經の意をもつて、龍女の佛になるまじき由を難ぜしかども、終に叶はずして佛になりき。初成道の能斷佛種子も、雙林最後の一切江河必有回曲の文も破れぬ。銀色女經、竝に大論の龜鏡も空しくなりぬ。又智積舍利弗は舌を巻き口を閉ぢ、人天大會は歡喜のあまりに、掌を合せたりき。是偏に妙の一字の徳也。此の南閻浮提の内に二千五百の河あり、一一に皆まがれり。南閻浮提の女人心のまがれるが如し。但し娑婆耶と申す河あり。繩を引き延えたるが如くして直に西海に入る。法華經を信する女人も亦復是の如く直に西方淨土へ入るべし。是妙の一字の徳也。妙とは蘇生妙の義なり。蘇生と申すはよみがへる義也。譬へば黃鵠の子死せるに、鶴の母子安となけば、死せる子還て活り、鳩鳥水に入れば魚蚌悉く死す。犀の角これにふるれば、死せる者皆よみがへるが如く、爾前の經經にて佛種をいりて死せる二乘闍提女人等、妙の



一字を持ちぬれば、いれる佛種も還りて生ずるが如し。天台云はく、  
闡提有心。猶可作佛。二乘滅智。心不可生。法華能治。復稱爲妙云云。  
妙樂云はく、

但名大不名妙者。一有心易治。無心難治。難治能治。所以稱妙等云云。  
此等の文の心は、大方廣佛華嚴經、大集經、大般若經、大涅槃經等は、題目に大の字のみありて妙の字なし。但生者を治して死せる者をば治せず。法華經は死せる者をも治す。故に妙と云ふ釋也。されば諸華にしては、佛になるべき者も佛にならず。法華は佛になりがたき者すら尙佛になりぬ。佛になりやすき者は云ふにや及ぶと云ふ道理立ちぬれば、法華經を説かれて後は諸經に趣く人一人もあるべからず。而るに正像二千年過ぎて末法に入りて、當世の衆生の成佛往生の遂げがたき事は、在世の二乘闡提等にも百千萬億倍すぎたる衆生の、觀經等の四十餘年の經經に値ひて生死を離れんと思ふはいかど。はかなし、はかなし。女人は在世正像末總じて一切の諸佛の一切經の中に、法華經をはなれて佛になるべからざる事を、靈山の聽衆衆として、道場開悟し給へる天台智者大師定めて云はく、

道場開悟一説法の場にて直に悟を開きしこと智者大師の前身を指す

陀經但記男不記女。今經皆記等云云。

釋迦如來、多寶佛十方諸佛の御前にして、摩竭提國王舍城の良、靈鷲山と申す所にて八箇年の間説き給ひし法華經を、智者大師目のあたり聞しめしけるに、我五十年の一代聖教を説き置く事は、皆衆生利益のためなり。但し其の中に四十二年の經經には、女人佛になるべからずと説き、今法華經にして、女人の成佛を説くと名告らせ給ひしを、佛滅後一千五百餘年に當りて、靈鷲山より東北十萬八千里の山海をへだてて、摩訶尸那と申す國あり。震旦國是也。此の國に佛の御使として出世し給ひ、天台智者大師と名告りて女人は法華經を離れて佛になるべからずと定めさせ給ひぬ。尸那國より三千里をへだてて東方に國あり、日本國となづけたり。漢土の天台大師御入滅二百餘年と申せしに、此の國に生れて傳教大師とならせ給ひて、秀句と申す書を造り給ひしに、能化所化俱無歴劫妙法經。力即身成佛と、龍女が成佛を定め置き給へり。而るに當世の女人は、即身成佛こそかたからめ、往生極樂は法華を憑まば疑なし。譬へば江河の大海に入るよりもたやすく、雨の空より落つるよりも早くあるべき事也。而るに日本國の一切の女人は、南無妙法蓮華經とは唱へずして、女人の往生成佛をとけざる雙觀等經によりて、彌陀の名